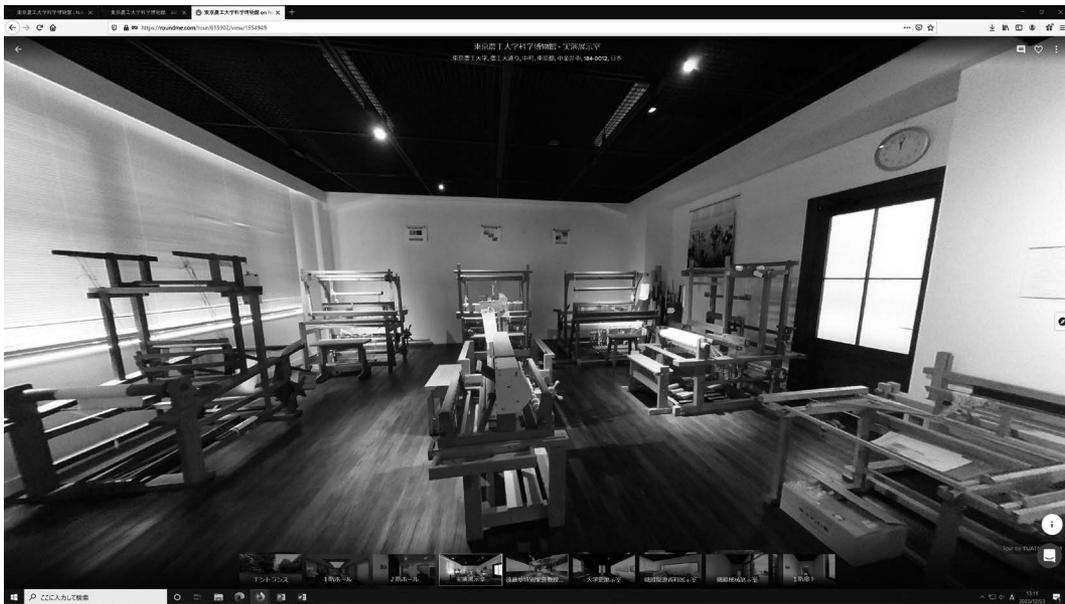


東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.42

コロナ禍の博物館



360度画像による博物館ビュー（東京農工大学 科学博物館）

2021.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集】 コロナ禍の博物館

● 2020年度企画委員会・編集委員会合同調査 「新型コロナウイルス対応アンケート」集計結果報告ー東京都三多摩公立博物館 協議会加盟館における新型コロナウイルス対策の状況と今後の課題ー 東京都三多摩公立博物館協議会企画委員長 青海 伸一（福生市郷土資料室）……2	
● コロナ禍とデジタルアーカイブ （公財）たましん地域文化財団 ……14	
● 日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアムのコロナ対応 日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム ……15	
● コロナ禍の国立ハンセン病資料館の取り組み 国立ハンセン病資料館 ……16	
● コロナ禍における SNS 活用の試み 武蔵野ふるさと歴史館 ……17	
● コロナ禍での資料館・古民家園運営 立川市歴史民俗資料館 ……18	
● 令和2年度 活動報告 武蔵村山市立歴史民俗資料館 ……19	
● コロナ禍における人々の学習する権利を保障するための活動 帝京大学総合博物館 ……20	
● たてもの園のこの1年 江戸東京たてもの園 ……21	
● 開かれた博物館と大学の安全措置のはざままで 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 ……22	
● アフターコロナの事業展開に向けて 小金井市文化財センター ……23	
● 令和2年度活動報告 東京都立大学91年館 ……24	
● コロナ禍での五日市郷土館の記録 五日市郷土館 ……25	
● コロナ禍の中での体験講座 町田市立博物館 ……26	
● 福生市郷土資料室における新型コロナウイルスの対応状況 福生市郷土資料室 ……27	
● コロナ禍での博物館活動 調布市郷土博物館 ……28	
● コロナ禍での令和2年度活動 瑞穂町郷土資料館けやき館 ……29	
● 令和2年度活動報告～コロナ禍における博物館活動～ 清瀬市郷土博物館 ……30	
● 檜原村郷土資料館の状況と対応 檜原村郷土資料館 ……31	
● 日野市郷土資料館でのコロナ対応 日野市郷土資料館 ……32	
● 新型コロナウイルス感染拡大による休館から活動再開まで 多摩六都科学館 ……33	
● 東京農工大学科学博物館のコロナ禍対応 東京農工大学科学博物館 ……34	
● コロナ禍の府中市郷土の森博物館とその対応 府中市郷土の森博物館 ……35	
● 休館と新型コロナウイルス パルテノン多摩 ……36	
● コロナ禍と東京都埋蔵文化財センター 東京都埋蔵文化財センター ……37	
● 新たなミュージアムの運営 奥多摩水と緑のふれあい館 ……38	
● コロナとハナビと博物館 東大和市立郷土博物館 ……39	
● 集合住宅歴史館の休館・再開と感染防止の取り組み 集合住宅歴史館 ……40	
● くにたち郷土文化館 コロナ禍の記録 くにたち郷土文化館 ……41	
● コロナ禍における文学館の活動 町田市民文学館ことばらんど ……42	
● 羽村市郷土博物館の新型コロナウイルス感染症対応 羽村市郷土博物館 ……43	
● 新型コロナウイルス この1年の対応 コニカミノルタサイエンスドーム (八王子市こども科学館) ……44	
● コロナ禍における古民家園 狛江市立古民家園(むいから民家園) ……45	
● 新型コロナウイルスとふるさと歴史館 東村山ふるさと歴史館 ……46	
● 青梅市郷土博物館 コロナ禍での令和2年度 青梅市郷土博物館 ……47	
東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿 ……48	

※各館からの報告は、2020年12月中旬に東京都三多摩公立博物館協議会加盟館より原稿を集め、まとめたものです。

「新型コロナウイルス対応アンケート」集計結果報告 —東京都三多摩公立博物館協議会加盟館における新型コロナウイルス 対策の状況と今後の課題—

東京都三多摩公立博物館協議会企画委員長 せいがい 青海 伸一（福生市郷土資料室）

はじめに

2020年2月末から急速に感染が拡大した新型コロナウイルスは、社会生活全体に大きな影響を与えたが、その影響は多くの博物館にも及んでいる。特に緊急事態宣言を受け、多くの博物館で臨時休館などの対応を迫られたとともに、その後の再開にあたって多くの課題が浮かび上がってきたところである。

こういった状況を踏まえ、東京都三多摩公立博物館協議会（以下「三博協」という）では、2月末頃から3月にかけて、当時の企画委員ならびに会長館である町田市立博物館において、各館の状況などをとりまとめ、情報の共有が進められてきた。その後も各館において動きがあるごとにメールにてその情報を共有するなど、新型コロナウイルスの感染拡大やその後の開館に向けて先の見えない中であって、各館の状況が少しでもわかるような活動がとられていたところである。

2020年度の三博協の活動については、それまで定期的に行ってきた対面による会議の機会を持つことができず、ようやく動き出せるようになった秋以降、研修等を企画する企画委員会において新型コロナウイルスを踏まえた研修が企画されたほか、機関紙である『ミュージアム多摩』（本誌）の編集委員会においても新型コロナウイルスをテーマとした特集記事を組むこととなった。

研修及び機関紙についてはそれぞれ別の担当で企画していたが、内容が重複することや、それぞれにアンケート調査を計画していたことから、企画委員会と編集委員会合同で、各館の対応状況などについて加盟各館に対しアンケート調査を行うこととした。今回その集計結果から見えてきた対応状況や課題等について報告し、新型コロナウイルスに三博協加盟館がどのように向き合い、今後の博物館運営をどう進めていくのか、その概況を報告していきたい。なお、各館における個別の取り組み状況については、本誌において各館より報告されているので参考いただきたい。

1 調査の概要

今回報告する調査は次のように行った。

調査対象：三博協加盟館全35館

実施時期：調査依頼2020年12月28日

回答期限2021年1月15日

実施方法：グーグルフォームによる回答。ただし、グーグルフォームでの回答が難しい場合は、紙により回答を得たうえで、編集委員により代理入力とした。

回答館数：35館

回答率：100%

調査担当者：企画委員会研修会班 竹内竜巳（くにたち郷土文化館）、佐藤志保（福生市郷土資料室）、青海伸一（福生市郷土資料室）

編集委員 安齋順子（くにたち郷土文化館）、仙仁径（パルテノン多摩）、齊藤有里加（東京農工大学科学博物館）、池田昌司（東大和市立郷土博物館）

集計協力：田中愛誠（福生市郷土資料室）

調査内容については、大きく3点について確認をした。①緊急事態宣言を受けての臨時休館や臨時休館後の開館対応の状況、②各館で行っている事業等の実施状況、③コロナ関連展示の開催やデジタル展示の取り組み状況となっている。

なお、本調査は調査時期の関係で、2020年4月に発出された緊急事態宣言による影響を調査したものであり、2021年1月に発出された緊急事態宣言に伴う対応については調査対象となっていないので、予めご了承ください。

以下ではそれぞれの調査項目に基づき、三博協加盟館全体の傾向について報告していきたい。

2 緊急事態宣言を受けての臨時休館や臨時休館後の開館対応の状況

・開館休館の状況

緊急事態宣言を受けての臨時休館の状況については、表1のような結果となった。加盟館のうち緊急事態宣言以前から休館に入っていた1館を除く34館で対応を行っており、実質全ての館が影響を受けたことがわかった。

表1 臨時休館を行ったか？

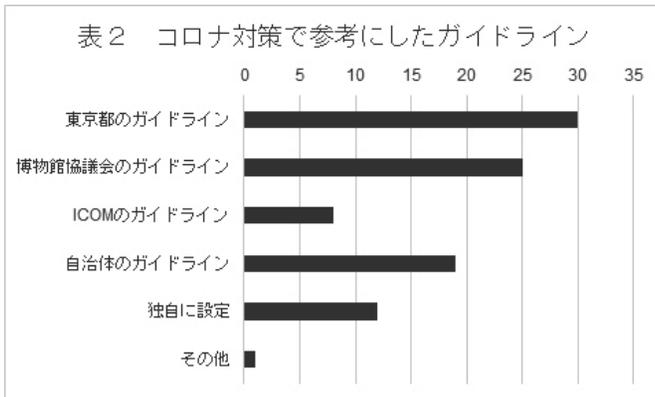
	はい	いいえ	非該当	合計
館数	34	0	1	35
割合	97.1	0	2.9	100

休館期間については、2月末から3月初めにかけて休館に入った館が23館と最も多く、休館の最終日については5月末から6月初めにかけてが27館と多くなっており、新型コロナウイルスの感染拡大が社会的な課題となってきた頃に休館に入り、緊急事態宣言の解除を受けてから順次開館となったことが読み取れた。

なお、臨時休館後、そのまま工事等のため引き続き休館となっている館が2館あるほか、開館が10月となった館が1館、さらに大学博物館3館では12月に入っても休館が継続となっているところがあるなど、臨時休館後の対応については分かれている状況が見て取れる。

・参考としたガイドライン

開館に向けて参考にしたガイドラインについてまとめたのが表2である。

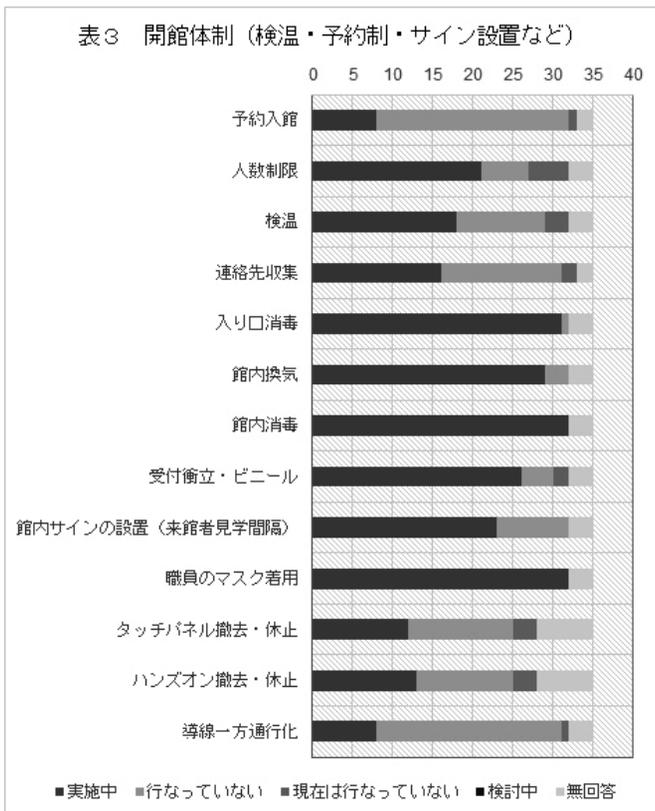


開館に向けて参考にしたガイドラインは、東京都のガイドライン85.7%、博物館協議会のガイドライン71.4%、自治体のガイドライン54.3%、ICOMのガイドライン22.9%などとなっており、公立館が多くを占める三博協加盟館においては、行政によるガイドラインを参考にした館が多く存在すること、博物館運営を考えるうえで博物館関係のガイドラインの利用が見られる。

なお、本項目については複数回答可となっている。

・開館時の体制

臨時休館後の開館体制についてまとめたものが表3である。



この質問項目では、現在も引き続き休館中の館や緊急事態宣言中に新型コロナウイルスとは関係なく休館となった館もあることから、期間中開館していた時期のある32館のうち実施割合の高い順にみていくと、9割以上の館で実施されている取

り組みとしては、32館すべての館で実施していたものとして、館内消毒と職員のマスク着用がある。そして、入口の消毒は31館、館内の換気は29館で行われている。

次いで実施割合の高い取り組みは、受付に衝立やビニールを設置しているで、設置しているが26館、設置していたが2館となっている。

入館者数の制限は、21館が実施中で、5館が現在は行っていないとなっており、開館後の取り組みとしては多くみられたが、入館者数の状況等に応じて制限を解除したところも見られる。館内サイン（ソーシャルディスタンスの励行）の実施については23館で実施しているとなっており、ここまでの取り組みが全体の7割を超える館で見られたものとなる。

全体の5割以上の館で見られる取り組みは、検温を実施中が18館、実施していたが3館、ついで連絡先の収集を実施しているが16館、実施していたが2館となっている。

ハンズオン展示とタッチパネルにおいてはそれぞれ13館、12館が撤去や中止としており、それぞれ3館が撤去や中止としていたと回答している。一方で、実施割合の少なかったものとしては、予約入館と導線の一方通行化でいずれも実施中が8館、実施していたが1館という結果となった。

これらの数字は統計的なものであるため、それぞれの館が持つ個別の状況、例えば、館の規模、館種、もともとの来館者の状況、展示室の状況など、様々な要因でこういった対応を行っているとか行わざるを得なかったなどのことを考えなければならぬのは言うまでもないが、それでも様々な博物館が含まれる三博協における取り組みの全体状況を端的に示す数字と考えられる。

・博物館施設における感染者の状況

感染者の発生状況は表4のとおりで、今回行った調査によると、職員及び来館者等での感染者は発生していない。臨時休館を経て開館した博物館において発生が見られないことは、館内の消毒等の対応に一定の効果があることが想定される。

表4 施設内感染者の発生状況

	あり	なし	無回答	合計
来館者の感染	0	33	2	35
職員の感染	0	33	2	35
その他	1	23	11	35

ただし、緊急事態宣言前と比べ、来館者の意識も変わっていることから、感染リスクの高い高齢者等の来館が少なかったなど、他の要因も影響していると考えられるので、博物館で実施した対応が充分であったと簡単に結論付けるわけにはいかないが、参考になる結果である。

・考察

臨時休館から開館に戻った館は、34館中29館となっていて、新型コロナウイルスとは関係なく休館している館を除くと、大学博物館3館を除くすべての館で開館に至っていることが分かった（調査結果では期間中開館していた館が32館となっているが、緊急事態宣言前に一時休館が解除になった事例や緊急事態宣言中でも当初開館していた事例などもあり、数字に差が

生じている)。

臨時休館からの再開の状況を見ると、新型コロナウイルスの影響を一番大きく受けているのは大学博物館であることがわかる。ニュースなどでも小学校から高校までの授業は再開されたが、大学ではオンラインなどの活用により大学へ行くことができないという情報を耳にすることがあったが、今回の調査でも同様の結果となった。

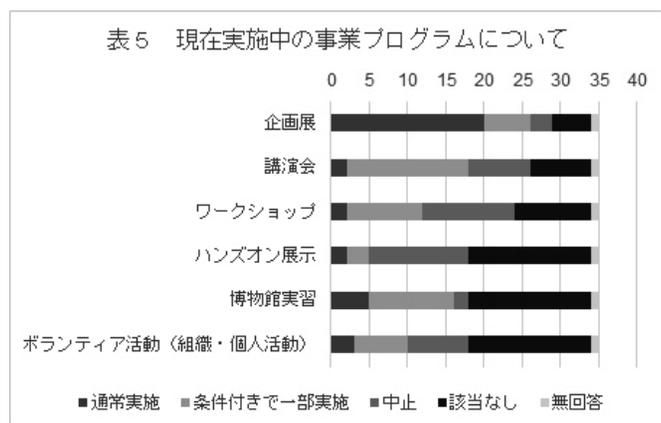
臨時休館からの開館に当たっての具体的な対応については、消毒とマスクに関しては未実施館や現在は行ってないという回答が見られないことから開館しているすべての館で実施しており、これは博物館ならではの対応というよりも新型コロナウイルス対策として実施することが求められているということの現れと考えることができる。また、衝立などの物理的な対策や換気を行うところが多く見られる一方で、検温や連絡先の収集などについては対応が分かっている。また、予約入館や一方通行化などは博物館の規模の問題やそもそもの入館者数の問題などとの関係が考えられるが、実施している件数が少なくなっている。

これらの状況から見えることは、来館者に関係なく実施できるものについては多くの取り組みが見られ、一方で、来館者に関わる取り組みについては館により差があるということである。博物館によってその取り組みに温度差はあるが、いずれにしても多くの館で、来館者に安心して来館してもらえる環境づくりに取り組んでいることが理解できる。

また、こういった取り組みと館内での感染者の発生状況について考えると、現在までのところ感染者が発生していないことから一定の効果があるとは考えられるが、博物館における対応だけが感染者の発生につながる要因ではないことを踏まえ、慎重な判断をすることが求められる。そういう意味でも、今後を見据えた時、現在行っている対応が充分であるかどうかについて、国や都、博物館協議会等の方針とも照らし合わせて検討していく必要がある。

3 各館で行っている事業等の実施状況

現在実施している事業プログラムについてまとめたものが表5である。



現在通常実施をしている割合が最も高い事業は、企画展示となっている。企画展示を実施している博物館のうち、条件付き実施も含めるとその実施状況は29館中26館とその割合は約

90%となっており、多くの館で企画展示については実施の方向に向けて進んでいることが分かる。ただし、臨時休館の前後にかかる企画展示の実施については、急な休館であったり、会期の変更を行ったりと、特に臨時休館がどれくらい続かわからない中で対応にあたらなければならなかったことから、その対応について苦慮したことが自由記述からも読み取れた。

現在通常実施をしている割合が最も高い事業は、企画展示となっている。企画展示を実施している博物館のうち、条件付き実施も含めるとその実施状況は29館中26館とその割合は約90%となっており、多くの館で企画展示については実施の方向に向けて進んでいることが分かる。ただし、臨時休館の前後にかかる企画展示の実施については、急な休館であったり、会期の変更を行ったりと、特に臨時休館がどれくらい続かわからない中で対応にあたらなければならなかったことから、その対応について苦慮したことが自由記述からも読み取れた。

次に実施割合が高い事業は博物館実習となっている。実施館は18館で、そのうち中止とした館は2館のみであることから、該当のある館の約90%で実施したことがわかった。ただし、博物館実習については企画展示と異なり、その多くが内容を更にするなどの条件付きで対応したことがわかる。

講演会については条件付きで実施している館が多いが、ワークショップになると中止の割合が高くなる。そしてハンズオン展示は実施館が少ない中ではあるが、特に中止の割合が高くなっている。また、ボランティア活動については中止としている館が多く見られる。

・考察

企画展示の実施割合が高く、講演会やワークショップ、ハンズオン展示などの実施割合が低くなっているという状況は、ソーシャルディスタンスを保つことが可能で、物理的な対応が行いやすい事業では実施の傾向が高いが、リスクを伴うと考えられる事業としてワークショップや直接手で触れることになるハンズオン展示が捉えられており、実施が取りやめられる傾向が見て取れる。

また、人と人との接触が想定される事業については各館でも対応に苦慮しているようであるが、博物館実習については実施割合が高く、ボランティア活動はその実施割合が下がっているという状況も見て取れた。博物館実習については、資格取得上必須の科目であることや、既に募集を終えていたことなどもあり、その実施や対応について加盟館によるメールでのやり取りなども多く見られた事業である。そういったやり取りもあり、各館で対応すべく様々な工夫をしながら実施につなげていったことがうかがえる。一方で、ボランティア活動については、その構成員の多くが高齢者であることや、ガイドなどの活動にあっては不特定多数の者と接することになることから、その対応について厳しい判断をしたところが多かったと考えられる。

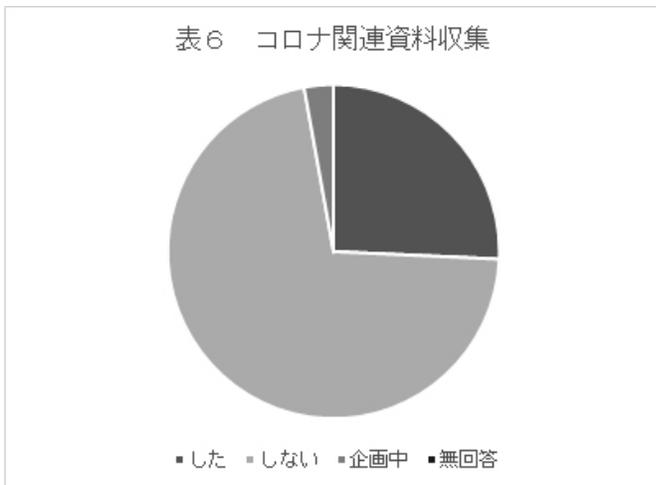
こういった取り組み状況が、先の調査項目にある施設内での感染者の発生状況が0という結果にもつながっていると考えられる。

いずれにしても、各館がどのような取り組みを行ってきたのかを把握できたことで、今後の博物館活動への重要な視点を得られたと考える。

4 コロナ関連展示の開催やデジタル展示の取り組み状況

・新型コロナウイルス関連の資料収集について

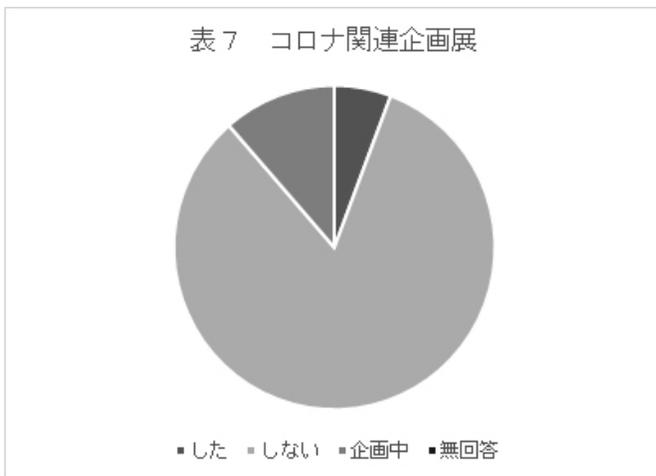
新型コロナウイルスを意識した資料の収集状況は表6のとおりで、資料収集を行ったまたは企画中の館は、全部で10館にのぼり、全体の約30%となっている。



博物館における資料の収集状況はなかなか数字としては見えにくいですが、加盟館の3割が現在進行形の出来事に対して意識を働かせている状況が見える。ここでは具体的にどのような資料を収集したかまでは問うていないのでどのような種類の資料が実際に収集されているかまではわかりかねるが、博物館全体としての傾向は把握できる。

・新型コロナウイルス関連の展示について

新型コロナウイルスに関連する展示の実施状況については表7のとおりで、実施したまたは企画中という館は6館で、全体の約15%を超える数字となっている。

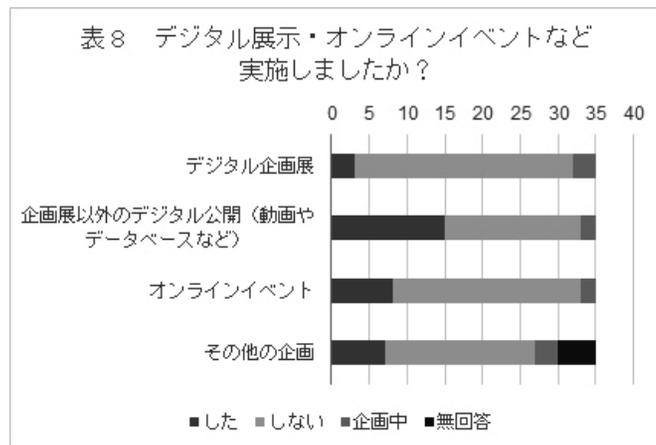


新型コロナウイルスに関連する展示の事例については、まだまだ全国的にも大きな数となっては現れていないが、厄除けといった視点で行われた展示や、昔の道具展において衛生といった視点で新型コロナウイルスを意識した展示、感染症防止方法についてのパネルの掲出、新型コロナウイルス感染者に対する差別発言を集めた展示、新型コロナウイルスに関連する資料の収集を行っていることを示す展示、大学博物館における医療系学部との連携展示、さらには新型コロナウイルスにより登校できない学生に向けたプログラムの実施など、それぞれの館の特

性に応じた様々な視点で新型コロナウイルスを意識した展示を実際に実施または企画している。新型コロナウイルスが展示活動に与えた影響について、具体的な事例も含め、意識的に取り組んだ様子が見えてきたところである。

・デジタル展示の取り組みについて

新型コロナウイルスによる影響に対する新たな対応として、デジタル展示の実施やオンラインイベントを実施していくことも、今回の事態を受け博物館業界では新たな展開として進んできたところである。これらへの対応状況を示したのが表8である。



対応状況を見ると、デジタル企画展示の実施及び企画中の数が全部で6館となっている。これはコロナ関連の展示を企画している数と同数になっている。ただし、企画展示以外のデジタル公開については、企画中も含めると17館となり、約50%となってくる。また、オンラインイベントやその他の企画はそれぞれ企画中を含め10館となっている。

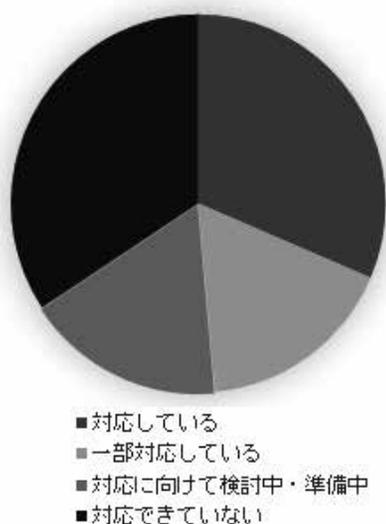
デジタル企画展示の実施は少ないが、企画展以外のデジタル公開については4割を超える館で行っていることがわかる。また、2割程度ではあるが、オンラインでのイベントやその他の企画なども実施されていることが分かった。

具体的には、オンラインでの講演会の実施、YouTubeでのプログラムの配信、北海道博物館で行っている「おうちミュージアム」への参加、ホームページ上において家庭でできるコンテンツを提供した事例、展示の紹介といった事例が見られる。これらの事例からは、ホームページの活用の延長に位置付けられる活動が一定程度進んでいることがうかがえるが、デジタル企画展示やオンラインでのイベントなどについては、全体としてまだそのノウハウが蓄積されていないことがうかがえ、今後さらなる拡大が期待される部分かと考えられる。

なお、デジタル展示やオンラインイベントの実施に関しては、インフラの整備状況を確認するため、Web会議やオンラインイベントの対応状況についても調査を実施したが、その結果は表9のとおりである。

対応している、一部対応しているを合わせても50%程度となっており、その実施に向けてはハード面での課題が存在することもわかってきた。なお、対応している、一部対応しているでもその多くはWeb会議への対応であり、外部への積極的な発信まで対応できる館はより少ない状況となっていることが記述式のアンケート結果からも読み取れたところである。

表9 Web会議やオンラインイベントの対応状況



・考察

新型コロナウイルスは、博物館活動のうち資料の収集や展示活動にも影響を与えたことが、今回の調査からも見て取れる。新型コロナウイルス関連の資料収集や、新型コロナウイルスを意識した展示の実施状況については、今回得られた数字が多いのか少ないのかは他に比較するデータがないのではっきりとは言えないが、個人的な感覚としては、意識が働いていることを示す数字ではないかと考えるところである。今後同種の調査結果が示されると、多摩地域の博物館における取り組み度が高いのか低いのかははっきりとしてくると思うが、一つの参考となる数字ではないかと考える。

また、デジタル展示やオンラインイベントについては、その実施に当たって、インフラの整備が必要であることや、そういった分野に対する知見を持った職員の有無などにも大きく左右されることが改めて見えてきた。ただし、新型コロナウイルスの感染が縮小したとしても、今後こういった活動は必要となってくるのが想定されるため、三博協としても研修の機会を増やしたり、実際に運用している館の事例に触れたりする機会を作りながら、全体としての底上げを図っていく必要があるように感じる。

なお、今回の調査結果で得られたデータを見る限り、この調査項目において、特定の館種等に偏りがあるといった印象はなく、公立館も大学博物館も、直営館も指定管理が導入されている館でも大きな差があるようには感じられない。強いて言うなら小規模な公立館で直営で行っているところよりは、規模が少し大きいところや指定管理が入っている館の方が動きがいいように見えなくもないが、全数が35館であることを踏まえると、それぞれの館が対応を模索していく中で個別の意識や設備状況等が反映された結果と考えられる。

5 全体を通して見えてきた課題

・開館休館について

今回の調査を通して見えてきたことは、加盟館のうち、新型コロナウイルス感染拡大前から休館をしていた館を除くすべて

の館において臨時休館の対応をしなかったことであり、何らかの新型コロナウイルス対策を行わなければ開館ができなかった実態を数字の上から示すことができた。

臨時休館や開館の再開にあたっては近隣の博物館の状況などにも影響されるところであり、とりわけどのような対応を取りながら再開に向かうのか、また、今回の対応にあたっては、博物館に限らず様々な施設で消毒液の購入をはじめとする感染症対策の資材を用意しなければならず、必要な資材の購入にあたっての情報共有をはじめ、消毒の方法によっては展示ケースを痛めることになるといった情報の共有なども実際には行われたところである。

従来であれば、加盟館で集まって直接意見を交わすことなどもできたが、今回の緊急事態宣言では、通常行われるべき会議なども行うことができなくなり、情報共有に支障をきたしたのもまた事実である。会長館において休館情報の取りまとめなども行っていただいたところであるが、こういう時こそ三博協加盟館の連携をより機能させることが今後さらに求められるところである。

実際に行われたそれぞれの対応については、施設の規模や、行政の方針など個別に見なければわからないことばかりではあるが、とはいえ、全体としてどういった対応がとられていたのかということについて、今回の調査で確認することができたことは大きな成果と考える。

そして、いずれの館においても臨時休館から開館に向けては各種ガイドラインを確認し、それぞれの館の状況に応じ、様々な試行錯誤を繰り返しながら、開館に向けた取り組みを行ったことが見て取れた。その取り組みには差があるが、それぞれの事情や状況に応じた対応であり、来館者に安心して来館してもらえ環境づくりへの取り組みであると理解したい。

・事業の実施について

一方で、今回の調査では、開館後も多くの事業に影響が出ていることも見て取れた。講演会やワークショップはまだ多くの館で中止となっている状況にあるし、ハンズオン展示も中止としている館が多い。これらはより博物館での学びを深めてもらうために必要な活動であり、従来多くの館で取り組んできた内容である。これらの活動はその後の調査項目であるオンラインイベントの実施状況も踏まえると、代替措置がうまく進んでいない分野ともいえる。進まない理由として、オンラインイベントを行うためのインフラ整備の問題や、職員の技術的な問題もあるかと思うが、やはり博物館活動の基本がモノを通した活動であり、モノを通した人とのかかわりなどに重点を置いてきたこととも関係があるかと思われる。

新型コロナウイルスの感染拡大は、ある意味で博物館活動のあり方そのものを問うことになったとも言える。その際にデジタル技術を用いた活動についての情報共有や、そういった活動を行うために必要となるスキルの獲得につながる研修等の実施も求められることが分かった。今後これらの課題に対して、三博協としても情報交換や意見交換を重ね、新たな博物館活動を模索し、展開しなければならない。

また、ボランティア活動の停止という状況も見て取れたが、博物館という場を通して人と人とがコミュニケーションを図る

機会が奪われてしまったことの影響も大きいのではないかと考える。例えばそれは、ボランティアの内容にもよるが、技術の継承の機会の喪失や、話をする場面が減ったことで、学芸員がボランティアから学ぶ機会の喪失にもつながっていると考えられる。

今回の調査項目にはなかったのだが、博物館で従来行っていた地元の人への聞き取り調査なども対面で行う活動であることから、多くの場合事業が止まっていることが想定される。また、地域でこれまで行われてきた行事が中止された事例も多くみられる。

そういった状況を踏まえ、博物館では今後どのようなことをしていくことができるのか、そういったことにも意識を及ぼさなければならない。

・新型コロナウイルスに対応した資料の収集や展示への動き

新型コロナウイルスの関連資料の収集や新型コロナウイルスを意識した展示の実施については、新たに発生した課題であり、具体的な調査はまだほとんど行われていないので、他の地域と比べ進んでいるのか進んでいないのかははっきりとは比較できないが、個人的な感想としては、特に音頭取りがいたわけでも声掛けを行ったわけでもない中、多くの館が意識を働かせているのではないかと感じる。

なかなか現在進行形の出来事に関連する資料を収集する機会はないというか、そういう判断を多くの館がしようと思うような状況に身を置く機会は限られているが、今回の新型コロナウイルスの感染拡大は、博物館活動そのものに対して新たな投げかけを行ったものであり、資料収集活動や展示活動といったものへも影響が及んだということを示す結果となったのではないかと考える。

・そのほかの課題

今回の緊急事態宣言を受けて考えなければならないことに、博物館での学びは本当に不要不急に当たることだったのかということも検討していく必要がある。

大きな博物館で行われていた来場者数の多い大型展覧会においては、3密と呼ばれる状況が発生するリスクが想定されることも理解するが、地域における博物館は、そもそもそれほど密だったかといわれるとそうではなかったように感じる。そのことは開館再開後の対応からもわかるが、予約入館を行っている館が少ない状況などからも読み取れる。それは大型展覧会とは立場が異なるからであり、地域にとって必要な学びの場であるからともいえる。

この地域にとっての学びの場という視点は、緊急事態宣言によって遠方への外出自粛要請が出ている中で、改めて見直されるべき視点の一つと考えられる。

この他にも、今回の新型コロナウイルスの感染拡大によって、従来の来館者数で評価するという概念の変更も求められるところである。来館者数の多い少ないはわかりやすい指標ではあるが、地域にとって必要な施設としての博物館、博物館があることで地域のことを学べるという環境、地域で起きている課題に対して意識を働かせる学芸員の存在、博物館ならではの学びがあるといったことを、新型コロナウイルスの感染拡大を通じて、より積極的に考えるとともに発信する機会としていかなければ

ならないと改めて感じたところである。

新型コロナウイルスの感染拡大を機に、今一度地域における博物館の役割を自覚し、その魅力や必要性を発信していく、そういう機会となることを切に願うものである。

まとめに代えて

今回のアンケート調査では、各館の協力のもと、新型コロナウイルスに対して三博協加盟館がどのような対応をしてきたのか、その一部ではあるがまとめることができた。個別の自由記入欄の内容については詳しく触れることができなかったが、それらの内容については、参考資料として本文の後に掲載したので、そちらにも目を通してもらうことで、より具体的に三博協加盟館がどんなことを考え、どう取り組みを展開しようとしてきたのかといったことについても理解いただけるかと思う。

また、各館の取り組みについては、本誌の各館からの報告にてより詳細になされているので、ぜひそちらも参照いただきたい。

いずれにしても今回の対応はこれまでに経験のないことであり、それぞれの博物館が手探りで行ってきた活動の記録ともいえる。それは、国や東京都からの情報や、所属する自治体の方針や判断の中で可能な範囲でいかに対応してきたかということでもある。三博協には、多種多様な館が加盟しており、今回の調査を通して様々なケースによる事例を集めることができた。これらの情報が多くの博物館の参考になることを願うものである。

あわせて、これらの情報を加盟館で共有し、これからの新しい博物館活動を模索することが、三博協の活動の活発化にもつながるし、そうしていくためにも今回のアンケートから得られた意見を今後の研修に生かすことはもちろん、加盟館との連携をより強固なものとするため、企画委員会としても様々な企画を行っていかなければならない。

原稿を執筆している段階でも新型コロナウイルスの終息にはまだまだ時間がかかることが想定されるが、新型コロナウイルスによって、私たちが当たり前と思っていた博物館活動についても様々な変化をもたらすことになった。この経験を未来につなぐことで、今後の新しい博物館活動構築につながることを期待し、まとめに代えさせていただきたい。

末筆ながら、本調査に協力いただいた加盟各館に深く感謝するとともに、アンケートの実施にあたっては企画委員ならびに編集委員からご意見をいただくとともに多大な協力を得た。さらに、集計にあたっては福生市郷土資料室の田中愛誠氏に多大な協力をいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

《参考資料》

・アンケート調査内容

2020/12/28 三多摩博物館コロナ禍アンケート

三多摩博物館コロナ禍アンケート

ミュージアム多摩の物業に向けて、コロナ禍の対応に関するアンケートのご協力をお願い致します。三多摩での全体傾向の把握を目指します。

企画委員を中心に集計作業を行います。自由記述については企画委員・編集委員内で抽出報告の中で必要に応じて反映します。
 (アンケート項目では網りきれないこともあるかと存じますので、各期の報告記事にぜひ詳細をお願いします。)
 ※今自由記述等の詳細版については、PDF化し加盟館内の情報共有資料として活用したいと考えています。
 *必須

1. メールアドレス*

2. 博物館名の記入をお願いします

3. 入力者のお名前をお願いします

1 開館対応・閉館対応について 今回のコロナ禍での開館・閉館対応について質問します

4. 臨時閉館を行いましたか？(202012月24時点)
 1つだけマークしてください。

はい
 いいえ
 その他 _____

2020/12/28 三多摩博物館コロナ禍アンケート

9. 閉館体制(検温・予約制・サイン設置など)
 当てはまるものをすべて選択してください。

	実施中	行なっていない	現在は行なっていない	検討中
予約入館	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
人数制限	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
検温	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
連絡先収集	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
入り口消毒	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
館内換気	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
館内消毒	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
受付衝立・ビニール	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
館内サインの設置(来館者見学時間)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
職員マスク着用	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
タッチパネル除去・休止	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ハンズオン除去・休止	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
動線一方通行化	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

10. コロナ対策に参考にしたガイドライン
 当てはまるものをすべて選択してください。

東京都のガイドライン
 博物館協会のガイドライン
 ICOMのガイドライン
 自治体のガイドライン
 独自に設定
 その他 _____

2020/12/28 三多摩博物館コロナ禍アンケート

5. 臨時閉館～開館までの期間を記入してください2020年 月 日～2020年 月 日

6. 「いいえ」の回答の方 臨時閉館代替措置があれば具体的に記入ください。

7. Web会議やオンラインイベントの対応状況
 当てはまるものをすべて選択してください。

対応できていない
 対応に向けて検討中・準備中
 対応している
 その他 _____

8. オンライン対応状況についての具体的なコメント

2020/12/28 三多摩博物館コロナ禍アンケート

11. 施設内感染者の発生状況(202012月時点)
 1行につき1つだけマークしてください。

	有り	無し	3行目
来館者の感染	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
職員の感染	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
その他	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

12. 発生時の連絡体制の有無
 1つだけマークしてください。

なし
 あり
 その他 _____

13. 閉館中に困ったこと

14. 閉館に向けて困ったこと

2事業系・学芸員実習系について

2020/12/28 三多摩博物館コロナ備アンケート

15. 現在実施中の事業プログラムについて

！行につき！つだけマークしてください。

	中止	条件付きで一部実 施	通常実 施	該当な し
企画展	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
講演会	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ワークショップ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ハンズオン展示	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
博物館実習	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ボランティア活動（新規・個人活 動）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ボランティア活動（来館者対応）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
団体対応（館内自由見学）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
団体対応（館内解説対応）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

16. 今回事業に関して大きな影響があった点

3 コロナ関連展示の開催・デジタル展示の取り組み状況について

2020/12/28 三多摩博物館コロナ備アンケート

その他共有したいこと、三多摩博物館協議会に期待すること

21. その他共有したいこと、三多摩博物館協議会に期待すること

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム

2020/12/28 三多摩博物館コロナ備アンケート

17. コロナを意図した資料収集・企画展を実施しましたか？

！行につき！つだけマークしてください。

	した	しない	企画 中
コロナ関連資料収集	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
コロナ関連企画展	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

18. コロナ関連企画について具体的に教えてください（自由記述）

19. デジタル展示・オンラインイベントなどを実施しましたか？

！行につき！つだけマークしてください。

	した	しない	企画 中
デジタル企画展	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
企画展以外のデジタル公開（動画やデータベ ースなど）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
オンラインイベント	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
その他の企画	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

20. 実施したオンラインイベントについて具体的に教えてください

・調査項目のうち、自由記述の項目

(重複する内容についての精査を行ったほか、掲載にあたり明らかな誤字脱字や文末表現を整えるなど一部内容を修正している。順不同)

①オンライン対応状況についての具体的なコメント

- ・担当職員や設備が不足。
- ・オンライン講座 (YouTube)、情報発信 (Twitter、Instagram)、会議 (Zoom、Slack)。
- ・学内の学芸員課程受講者に対しては web 配信でのレクチャーを実施したが、一般の方向けのオンラインイベントは行っていない。
- ・市直営館のためインターネット環境に制約があるため対応できない。
- ・設備面で課題があり、現状実施の予定はない。
- ・web 会議は一部対応しているが、オンラインイベントは実施できていない。
- ・Web 会議のみ対応 (イベントは実施せず)。
- ・YouTube にてプラネタリウム番組の動画配信。
- ・団体向けにオンライン展示説明、オンライン出前授業、オンラインでのミュージアムトークや講演会などを行っている。
- ・Zoom による会議・授業は行っているものの、オンラインイベントは未着手。
- ・休館中は、館ホームページや SNS で Web コンテンツを発信。休館が明けてからも、外部講師の講演会や一部体験プログラムのオンライン開催を継続して行っている。Web 会議も外部講師やボランティアとの打ち合わせで継続して行っている。
- ・オンライン研修などへの参加は実施している。一方で、来館者向けのオンライン事業等の開催は実施しておらず、検討中である。
- ・展示紹介／収蔵品紹介の動画公開、公開講座のライブ配信のほか、スタッフミーティングと種々編集等でオンラインシステムを使用。
- ・web 会議については LINE のビデオ通話を利用して実施したことがある。
- ・オンラインイベントは構想途中。
- ・ホームページ内に特設ページを設け、イベント内容の動画や資料、オリジナルぬりえを公開。
- ・経費なし手作りで実施している。得意な職員やボランティアに頼っての対応となる。
- ・オンラインに対応できる体制が整っていない。
- ・環境は整うが、イベント実施は人員不足。一人で操作するのは問題ない。
- ・Web 会議のみ対応。
- ・古文書講座でオンラインと会場のハイブリッド開催、市民学芸員養成講座の一部と市民学芸員定例会のオンライン開催、オンラインで職場の朝礼と終礼を実施、公式 Twitter、Facebook、インスタグラムの活用。
- ・〈おうちミュージアム〉などを利用し Web で活動。

②休館中に困ったこと

- ・休館中も今後の準備、情報発信などやるべきことは明確だったので、特に困ったことはなかった。
- ・現時点では大きなことは無し。テレワークと事務所勤務を併用して実施したため、通常に近い対応はできた。
- ・緊急事態宣言中は、週の半分が自宅勤務日となったため、特別展などの事業の準備に遅れが生じた。
- ・緊急事態宣言に対応した休館だったため、いつ開館可能になるかわからず、展示準備をしたものの開催できなかった企画展があった。
- ・休館はしているものの、何か情報発信は行わなければいけないと考えたが、限られた予算・マンパワーと、ノウハウも足りなかったため、効果的な取り組みができたか疑問である。
- ・臨時職員、契約職員、委託業者の雇用確保。
- ・開館再開見通しに関する問合せが多数あり答えに窮した。
- ・職員も在宅勤務を中心としたことから、館が行う資料整理等に遅れが出た。
- ・博物館実習の実施方法に苦慮。
- ・事業の休止に伴い、契約変更の手続きが多数発生した。
- ・緊急事態宣言発令中は、電話番号だけ番制で出勤し、あとは基本在宅ワークとしたが、自宅にネット環境が整っていないため思うように仕事ができない、リモート会議で回線負荷が増大して家族の通信にも支障が出てしまうといった不都合が生じていた。
- ・休館中は積極的に web 発信をする方針で取り組んでいたが、携わるスタッフが増えたのに対し、ホームページや SNS の管理・運用ルールが明示・徹底されていなかった面もあり、発信されていることが利用者からわかりにくくなってしまった。
- ・市民からの文化財に対する問い合わせに対して、直接話をするのができないため、資料などを提示しながら説明することができず苦慮した。
- ・設営・広報まで済ませていた企画展の公開の目途をたてることができず、延期・中止の段階を踏んだため、関係各所と調整し告知までに手間取った。その後の企画も先が見通せず、情報を収集し決定するまで逡巡がつづいている。
- ・事業の準備がなかなかできない(外部との打ち合わせが困難)。
- ・事業再開に向けての調整。
- ・交代勤務による業務停滞。
- ・なかなか先が見通せず、計画を立てにくいこと。大規模改修による休館の前の記念イベントの多くが中止、または大幅縮小になってしまったこと。
- ・休館中を中心とする会期の企画展示の実施をどうするか。
- ・オープン後におけるイベント等の周知。(タイミング等)。
- ・ハンズオン展示が多数のため、現在も展示エリアを利用休止としている。
- ・オープンするためには、定期的な消毒が必要となり、予算上、人員確保が難しい。
- ・管理業務委託をどのようにするか。
- ・収入がなくなり、管理運営に影響大。博物館としての業務が遂行できない。

③開館に向けて困ったこと

- ・来館者の方への対応方法の協議や対策備品の不足（マスク・アルコール・手袋など）。
- ・開館後のコロナ感染症対応（消毒や受け入れ態勢の準備、マニュアル作成など）や変更になったスケジュールの調整などに追われ、大変だった。特にコロナ対応についてはマニュアルを一から作らなければならなかったため、大変だった。
- ・開館再開が可能な条件の決定とその後の開館のタイミング。
- ・どこまで対策・準備をすれば開館してもよいという判断ができるかがわからなかった。
- ・団体の受け入れ要請をすべて断った。
- ・長期停止による器具の不具合（バッテリー消耗等）。
- ・館内換気設備の増設に手間取った。
- ・消毒剤を含む消耗品の入手、開館時のマニュアル作りなど。
- ・感染予防対策として展示室のスペース確保。
- ・再開に向けて、消毒液やマスク、使い捨て手袋や非接触型の体温計などの入手に苦労した。また復元建造物の見学は、靴を脱いでの見学を、狭い室内で密になるのを考慮して、一部を除いて休止。そのかわりに外周部から室内を見られるよう、ふだんよりも多くの箇所の窓を開けるなどの対策をした。靴を履いたままで内部を見学する場所については、窓などの開放に加えて扇風機などを設置し、室内の換気に配慮した。このほか、展覧会を開催している展示室は、室内の見学者数の上限を設定、それを超えた場合は待機していただいた。さらに園内散策時のソーシャルディスタンス維持のためのアナウンスを、音声トーカーを設置して呼びかけるなど、入園時から退園までの、様々な個所での来園者動線の設定に苦慮した。
- ・ハンズオン展示がベースの施設なので、「触らせない」展示を考えることに苦労した。
- ・プラネタリウムドームや展示室の消毒方法や、作業にあたるスタッフ体制が整うまでに少々時間がかかった。消毒のために従来のシフトや上投影スケジュールの変更も余儀なくされた。
- ・休館中の web コンテンツの発信と開館してからの通常のプログラム準備が重なり、業務量が多くなった。
- ・開館日や営業時間、企画展の実施の有無などがなかなか決定できず、企画展のためのアルバイトを無駄に拘束することになってしまった。
- ・どこまで広報していいか（存在感は示したいが必要以上に人が集まらないようにしたい）。
- ・館内の換気方法（換気扇を使用したのが、温湿度管理などとの調整が困難だった）。
- ・大学の方針に従い学内者のみ来館可能の日を設けているが、その都度、学内・学外と二重の告知が必要となっている。
- ・感染予防対策の備品準備、来館者受け入れ態勢（基準）の策定、事業計画・進め方の見直し。
- ・感染症対策の確保、イベント実施に伴うガイドラインの作成、中止イベントの代替方法。
- ・消毒用アルコール等がなかなか手に入らなかったこと。
- ・新たな感染症のため対策に確実性がない。
- ・再開当初は予約制としたが、大きな施設ではないため、実際

- に予約する人は少なかった（予約なしでも、人数制限にかからなければ見学可としていた）。
- ・来館者の連絡先等の個人情報をどのように収集し、保管するか。
- ・市民スペース（図書・新聞等の閲覧スペース）を開放するか、また開放する場合はどのような感染拡大防止対策をとるか。
- ・館内の消毒や換気等の対策をどのように実施するか等。
- ・外部者の立ち入り制限。
- ・ガイドラインを見ただけでは判断しかねる事項も多く、開館にあたっての対策が妥当なものであるかの判断がしづらかった。
- ・消毒の回数や、どこまでの対応をすべきか判断に迷った。
- ・消毒を行うためのアルコール等、器具の確保。
- ・展示再開の見通しが立たないこと。それに伴う規則に基づいた入館料、年間定期券の取り扱い。
- ・感染予防も考慮したワークショップ（工作教室等）内容の練り直し。
- ・どこまで感染防止策をとるべきか判断が難しいこと。

④今回事業に関して大きな影響があった点

- ・8月に総来館者数が25万人に達成したが達成記念イベントなどが行えなかった。
- ・展示・イベントの人数制限については現在も続いている。また、体験事業の実施については、実施を見送ったものが多かった。展示についてはスケジュールを移して対応したため、展示内容を変更したものはあったが、予定した数は行った。
- ・対面での講演会、ワークショップ等の実施方法について新型コロナウイルスの感染の状況に左右される。そのため先々の予定が組みにくくなった。
- ・耐震工事に伴う休館の間、大学のイベントに合わせた出張展示やワークショップを実施することを予定していたが、全て中止となった。
- ・人を集めて行うイベントは中止せざるを得なかった。
- ・特別展・企画展は通常通り実施したが、入場時に検温を実施したり、各事業の募集人数を制限したりするなどの影響があった。
- ・どうしても密集・密接ができてしまう事業については中止せざるを得なかった。
- ・予定していた企画展を白紙に戻した。
- ・年末の親子向けイベントの中止他。
- ・花火大会が中止となり、またマスクコミに紹介されたこともあり、花火をテーマにしたプラネタリウム番組「ハナビリウム」が大ヒットしたが、座席数を制限していたこともあり、投影回数を増やして対応した。
- ・マンホールカードの配布を2020年3月から予定していたが、11月に延期になった。来館者が数千人規模で増加した。
- ・来館者受け入れだけでなく、調査研究や資料整理等を行うことができず、進捗が遅れが出た。
- ・学芸員に必要な技能習得が対面の場が限られているため困難であったこと。
- ・事業の実施にあたって、ボランティア活動が休止となったた

- め職員のみで対応することとなり、例年より規模を縮小せざるを得なかった。またワークショップは、3密になる可能性が大きいので、実施を見送った。博物館実習については、もともと本館での実習に組み込まれているので当園では1日だけの実習となっており、ほぼ通常通りの実施となった。小学3年生を対象に実施している「昔くらし体験」も、ボランティア活動休止のため職員のみで対応、週1日、午前中のみの実施とし、囲炉裏や火鉢に火が入っている様子を見るというオペレーションとなった。
- ・春の企画展が休館により実施できなかったため、夏に行った。混雑を避けるために、従来は会場に自由に入出入りして来ていたところを定員ありの時間入れ替え制に変更したため、来場者数は大幅に減った。
 - ・ほぼ毎日どこかしらで行っていた体験プログラムは週末のみの開催に絞った。入室する人数を低く抑えるために、定員は半分程度に、また付き添いも最少人数にしたために、幼児連れの家族の参加が難しくなってしまった。
 - ・プラネタリウムの定員を半分に減らしたことで、学校団体の観覧スケジュールに影響が出た（1校を2回に分けて投影など）。
 - ・1学期に取りやめになった校外学習が2・3学期に振替になり、団体利用が集中する時期が生じた。そのことで雨天利用団体は受け入れできないなど、影響が出た。
 - ・高齢者の多いボランティアは基本活動休止。現在、小5～高校生ジュニアボランティアは限定的に活動再開しているが、大人ボランティアについては未だ再開の目途が立っていない。
 - ・工作などの体験講座について、密にならない運営ができず、一定期間中止した。
 - ・学者の見学は原則中止しているため、対外的に休館の形を取っている。
 - ・入館人数に制限を設けているので、小学校の団体見学は実質不可能。
 - ・企画展はギャラリートークを中止・回数を減らして実施。
 - ・飲食を伴うイベント（体験学習）の中止による予算割れ。
 - ・接触や調理による古民家事業やわら細工教室を中止とした、イベント参加人数を減らした、参加型イベント実施時の対策に苦慮した。
 - ・計画していた講座や体験学習会が中止になった。
 - ・夏期企画展の準備期間は市民との接触が難しかったため、資料借用をとりやめ、収蔵品で構成する内容に変更した。
 - ・ワークショップは参加人数を通常の約半数に減らして実施している。
 - ・来館者向け事業は停止となった。SNSでの発信を強化。
 - ・予定していた行事、予約が入っていた団体見学などが一旦すべて白紙となり、基準を設けて再開をした。学校見学については、先方のニーズとの調整が難しく、希望に沿えないことが多かった。
 - ・コロナ対応のために事業（特に講座）の運営体制を大幅に変更せざるを得なかったことと、それによる職員の負担増や、事業収入の大幅減。
 - ・通常ではなかなか実現しにくかったオンラインによる講座の実施ができたこと。コロナ収束後もオンライン講座は続く可能性がある。
 - ・基本的に事業については現在も中止となっているものが多く、再開のめどが立っていないこと。特にボランティア活動についてはこの間フォロー等もできていないことは課題と感じている。
 - ・展示スペース休止による入館者の減少。
 - ・小・中学校の団体受入休止（プラネタリウムの学習見学中止）による入館者の減少。
 - ・プラネタリウムの入場者数制限による入館者の減少。
 - ・収入（入館料等）の減
 - ・主要事業の中止。
 - ・企画展「端午の節句」を中止したこと。
 - ・各種事業を中止せざるを得なかったこと。
 - ・中止や延期など事業が通常通り行えないケースが多々あった。
 - ・体験講座参加人数の制限。
- ⑤コロナ関連企画について具体的に教えてください(自由記述)
- ・帝京大学の医療系学部との連携の企画展、講演会等の実施を検討中。
 - ・ハンセン病回復者による、新型コロナの感染者やその家族、医療従事者に対する差別に関する発言を集めたギャラリー展を1月30日から開催する。
 - ・展示室の一角で、新型コロナウイルスや感染防止の方法についてのパネルを掲示。監修で協力していただいた明治薬科大学の先生によるオンライン講習会も開催した。
 - ・収蔵品の中から浮世絵や染織品、郷土玩具などで厄除けの要素のある資料を展示し、その歴史的背景を紹介。
 - ・1～2月に開催の企画展「暮らしと道具」のなかで、コロナ禍における消毒・衛生管理に関連して、昔の生活道具のなかから衛生道具・清掃道具を紹介・展示する。
 - ・東京都文化財指定記念展「深大寺の元三大師」・・・厄除け大師として有名な元三大師に関する展示を、深大寺と共催で実施した。
 - ・館内ギャラリースペースにて、「郷土玩具に込めた病除けの祈り」と題し健康に関する願いを込めた郷土玩具を紹介した。
 - ・課外活動が制限されている学生、10月までキャンパスに来ていない新入生のサポートを意識した学内プログラムを実施。(WELCOME TO CAMPUS PROGRAM)
 - ・2月から実施予定の企画展示の中で、ワンコーナーを設け、新型コロナウイルスに関連する資料の収集を行っていることを示す展示を予定している。
- ⑥実施したオンラインイベントについて具体的に教えてください
- ・講演会。
 - ・オンラインイベントとは異なるが、SNS(Facebook)の活用と希望者への当館発行物の郵送を開始した。
 - ・Twitterで開催できなかった企画展の資料紹介を行った。

- ・YouTubeにてプラネタリウム番組を配信する「お家でプラネタリウム」を実施した。
- ・団体向けオンライン展示説明、出前授業、オンライン講演会、オンラインミュージアムトークなどを行っている。
- ・デジタル公開あるいはその他企画として、当園公式ウェブサイトにて「えらべる 学べる えどまる広場」と題して、クロスワードやペーパークラフト、ワークシートなど、家庭でも楽しめる様々なコンテンツをアップした。当園に来園できなくても、同じくウェブ上にある「360°パノラマビュー」を見れば答えられるようにし、様々なコンテンツを通じて、来園のきっかけになればと工夫した。
- ・オンラインコンテンツをまとめた「おうちでロクト」のコーナーをホームページに開設（星座ぬりえ、スマホでの天文写真の撮り方、動画による展示物解説等）。
- ・スタッフによる科学の本の紹介「web版 科学の本棚」。
- ・講演会やサイエンスショーのライブ配信。
- ・参加者とZoomでつながり、掛け合いで実験をする「オンラインサイエンスショー」。
- ・フィールドにいる講師と科学館、参加者を繋いで川の生きものを中継で紹介する「オンライン自然観察会」。
- ・地域FM局とコラボレーションした、ラジオ放送とYouTubeを利用した オンラインプラネタリウム。
- ・展示紹介／ギャラリーツアー／所蔵品紹介の動画を公開するほか、公開講座のライブ配信を継続しておこなっている。
- ・北海道博物館主催のおうちミュージアムに参加している
- ・第12回 藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日WEB講演会。YouTubeによる動画配信「東京オリンピックのレガシー」「戦争体験を語り継ぐ」。特別展「みんなのひの宝モノ語り展」展示室内でのQRコードでの展示解説。
- ・夏休み体験事業の代わりにホームページにワークシートを載せた。
- ・企画展関連講演会「武蔵野台地の地名から学ぶ」のWeb開催。
- ・申込をしたすべての方を対象に期間中いつでも何度でも講演動画を閲覧することができ、またインターネット環境がない方は、来館の上、当館タブレットにて視聴が可能となるよう対応した。
- ・学芸員課程の学生の公開発表会等を実施。（オープンではなく博物館関係者対象とした）
- ・公式Twitterアカウントで、2/28、29、3/1、16しか開催できなかった特別展「パルテノン多摩」の展示内容の一部をWeb展覧会として紹介。
- ・古文書講座などをオンラインで開催。
- ・市役所とのイベントコラボ、収蔵品のぬり絵・パズルなどを掲載。

⑦その他共有したいこと、三博協に期待すること

- ・コロナの拡大により、YouTubeなどを通じた情報発信の仕方が注目されているが、他館がどのような(zoomなどのオンラインを除いた)取り組みをしているか知りたい。
- ・オンラインでの発信に関するノウハウの共有。コロナ禍での来館者対応に関する考え方の共有。

- ・今回発令される緊急事態宣言中の各館の対応について情報共有したい。
- ・コロナ関連の資料情報、各館のコロナ対策の共有。
- ・コロナ禍の学芸員実習の実施方法、on-line イベントの実施方法、予算、設備など。
- ・イベントの実施規模や来館者の管理体制などを決める際に、管理・経営サイドと接客の現場サイドでの危機感のポイントにずれがあり、意識共有が課題だと感じている。加盟館同士で、中小規模の博物館における具体的な対応策や職員の作業内容などが共有できるとよい。（具体的な事例だと、消毒方法やフリーパスや招待券の期限延長など、些末なようでいて館にとっては大きな影響を持つ事例）
- ・このたびの新型コロナ対応について、成功した事例のほか、オフレコで結構なので失敗例や改善案も共有していただけたらありがたい。
- ・この取り組みを通して、対コロナ禍関連資料群の構築。
- ・コロナに関する定期的な情報共有。
- ・今年度実施した研修会などを通して、手法を知りたい。
- ・当館は休館が続いているが、連携することで、新たな企画が可能になるかもしれない。ぜひ今後も情報交換をさせていただきたい。
- ・3月の各館の臨時休館情報の共有はとても良かったので、今後も情報共有をサポートしていただけたらと思う。
- ・実施状況の把握だけでなく、その考え方も情報収集項目に入れて欲しい。例えば「ガイドラインに沿った対応」あるいは「ガイドラインに沿っていないが、こういう理由で実施している」など。
- ・他の博物館の状況を聞きたい。

コロナ禍とデジタルアーカイブ

(公財) たましん地域文化財団 保坂 一房

新型コロナウイルス感染症への対応

2020年3月25日、東京都より新型コロナウイルス「感染爆発の重大局面」にあたり、不要不急の外出自粛要請が発表されました。これにともない、当財団歴史資料室は翌26日より臨時休館しました。4月7日には政府より緊急事態宣言が発出され、東京都をはじめ7都府県が実施区域に指定されます。当財団でも出勤7割削減をめざして、在宅勤務体制を整えました。『多摩のあゆみ』を編集する(株)ぎょうせい(江東区)も在宅勤務体制にシフトして、原稿校正などのやり取りは、すべてネット上で行なうようになりました。

その後も感染は終息することなく、4月16日に緊急事態宣言の実施区域が全国都道府県に拡大します。さらに5月4日には、緊急事態宣言が5月末日まで延長されました。このような状況下、在宅勤務中の業務内容の大きな柱として、デジタルアーカイブで公開を予定している絵葉書データの点検、画像と文字データの確認と文字修正を行いました。

5月25日に緊急事態宣言が解除され、在宅勤務も終了して6月2日より歴史資料室を再開しました。しかしながら、ホームページのリニューアルなど滞っていた業務を処理するなか、5月15日に発行予定だった『多摩のあゆみ』第178号は6月30日に発行しました。また、第179号は8月31日、第180号は11月30日と、発行日を変更しました。

デジタルアーカイブの更新

当財団では、2017年9月に『多摩のあゆみ』バックナンバーのうち創刊号～第100号までを、デジタルアーカイブで公開しました。翌2018年11月には、『多摩のあゆみ』バックナンバー第101号～第120号までと、歴史資料室で所蔵する絵

図・地図とチラシを追加公開しました。

公開当初、ひと月約10,000pv (page view: ページへのアクセス数) だったアクセス数は、『多摩のあゆみ』の追加と絵図・地図とチラシを公開すると15,000pvに増えて、その後は20,000pvを前後するようになりました。

歴史資料室を臨時休館した2020年3月のアクセス数は28,000pvに急増し、4月は33,000pv、5月は41,000pvと増えていきました。多くの人たちが長時間自宅で過ごす生活を強いられ、図書館や博物館も臨時休館するなか、インターネットで情報収集する人や機会が増えた結果でしょう。

この間、リモート会議やオンライン講演会、Web展示会が各地で開催されるようになりました。また、各種資料群をデジタルアーカイブで公開する機能も増えてきました。

こうしたなか、当財団歴史資料室では11月30日にデジタルアーカイブの内容を更新しました。全体のデザインを変更して、地図とチラシの資料を追加しました。さらに、在宅勤務期間中に点検した絵葉書3100余点(多摩地域を主として、全国各地、海外)を新たに公開しました。絵葉書はマップやサムネイル、テーマ、リストなどから直感的に検索できます。袋入の複数枚の絵葉書セットは、まとめてご覧いただけます。

残念ながら、現時点で新型コロナウイルス感染症の終息目途は立っていません。一日も早い終息を願うばかりですが、インターネットを利用した情報発信はさらに重要性を増していくことが予想されます。当財団でも、『多摩のあゆみ』バックナンバーや各種資料群のデジタルアーカイブ化に今後とも取り組んでいく所存です。



(公財) たましん地域文化財団デジタルアーカイブ 袋入絵葉書セット

日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアムの コロナ対応

日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアム 石井 奈穂美

当館の基本情報

当館は、2015年に日本獣医生命科学大学内に設置された大学付属博物館です。館内には、主に大学史についての展示を行う歴史系展示室と、日本の里山に暮らす野生動物について展示を行う自然系展示室があります。通常時は事前予約制で見学を受け入れるほか、大学のイベントに合わせてどなたでも見学できる特別開館を実施しています。当館が展示室として活用している本学一号棟は、2020年4月に「旧東京市麻布区役所庁舎（日本獣医生命科学大学一号棟）」として国の登録有形文化財（建造物）に指定されました。現在、一号棟の耐震化や基礎の補強、周辺環境の整備のための工事を実施しているため、当館は2022年3月まで長期休館しています。

新型コロナウイルス感染症への対応（2月～5月）

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の感染拡大を受け、大学の方針として大学付属施設（博物館・図書館）を臨時休館することが2月27日の時点で決まりました。これを受け、当館では2月28日付で大学公式サイト内の博物館ページに2月29日から3月31日まで臨時休館する旨を掲載しました。当時は臨時休館の期間を3月末までとし、その後の開館は状況を見て判断する方針でしたが、感染拡大が続いたことから、臨時休館を4月末まで延長することを決断しました。当館は、展示室のある本学一号棟の周辺環境整備工事のため、2020年5月1日から2021年3月末までの間を長期休館期間とすることが2019年度の時点で決まっていたため4月以降も展示の再開はせず、現在も休館を続けています。

休館中の活動

2019年度の時点で長期休館を実施することが決まっていたため、休館中の活動として、2020年度は大学のイベントに合わせた学内出張展示の形で収蔵資料を一般公開すること計画していました。現在は校舎の一角にガラスケースを設置し、学内関係者向けのミニ展示を実施していますが、COVID-19の感染拡大に対する大学全体の方針としてキャンパスへの入構が原則禁止となっていること



ミニ展示コーナー



実習の様子

から、一般公開の実施には至っていません。

当館は、本学で学芸員課程を受講する学生の学内実習の場としての役割も担っています。休館が計画されていた今年、出張展示の設営や展示解説を受講生とともに行う予定でしたが、COVID-19の感染拡大を受け、予定されていたイベントがすべて中止となりました。実習の実施にあたり規模の縮小や予定の変更も余儀なくされていることから、Web配信形式での説明や、少人数に分けてのレクチャーを実施しています。今後は受講生によるミニ展示コーナーでの展示が実習の一環として行われる予定です。

休館中の新たな取組として、公式Webサイトにて当館発行物のPDFデータを公開したほか、希望者への郵送配布を開始しました。また、広報活動の一環としてSNSでの情報発信も開始しています。9月に設置した当館公式Facebookでは、日々の活動や収蔵資料の紹介など、週に2回の更新を続けています。その他の活動としては、展示や教育普及活動の実施が難しい現在の状況を考慮し、資料の収集・整理作業に力を入れています。特に今年度は、一号棟の工事に際し廃棄される可能性のあった学内の歴史資料の収集・整理作業に取り組み、昔の校舎やかつて宮城県に設置されていた付属牧場の図面、大学史に関連する書籍、昔の大学報など、新たに数百点の資料が当館に移管される予定となっています。

今後の予定

COVID-19の感染拡大対策として大学全体での入構制限が続く間は、学内の展示活動として本学関係者向けの展示を続ける方針となっています。一方学外での活動として、他館と協同でのワークショップの実施に向けた検討を続けています。博物館の展示室を用いた展示の再開は工事終了後を予定していますが、工事期間が当初の予定より延長されており、展示再開は2022年度内となる予定です。

※本原稿は2020年12月時点の情報をまとめたものです。



公式 Web サイト
<https://www.nvlu.ac.jp/universityinstitution/004.html/>



公式 Facebook
<https://www.facebook.com/nvlu.wildlife.museum>

コロナ禍の国立ハンセン病資料館の取り組み

国立ハンセン病資料館 管理部広報担当 及川由紀子

はじめに、当資料館では新型コロナウイルスに感染・発症した方やその家族、医療や看護に携わっている方々に対して、様々な場面での差別的な事例が報じられている状況を鑑み、当資料館館長名で下記のメッセージを2020年5月28日に公式サイトに掲載し、SNS等において周知に努めました。

「ハンセン病と新型コロナウイルスによる感染症とは、その病気の性格は大いに違っており、本来は同一に論じるものではないかもしれません。しかしながら、ハンセン病患者や回復者及びその家族が体験してきたような、病気を理由とした不当な差別、偏見、いじめ等はけっしてくり返されてはなりません。みなさまにおかれましては、むやみな恐怖心に基づく言動をとることなく、正しい情報を確認いただくとともに、人権に配慮した冷静な行動をとっていただくようお願いいたします。

館長 成田稔



当資料館は、2020年2月29日より、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の一環として、一時休館いたしました。緊急事態宣言が解除

されたことに伴い、感染防止対策を施したうえで、2020年6月23日よりサービスを限定して再開いたしました。

現在、通常通り火曜日から日曜日まで開館しておりますが（月曜日が祝日の際は開館、祝日翌日の火曜日は休館）、事前予約制ならびに定員制とさせていただきます。

【開館時間】

- ・午前の部：10時～11時30分 定員：10名
- ・午後の部：13時30分～15時 定員：10名

これまで頻繁に行っていたイベントも、「三密」を避けるためにオンラインでの開催とし、また開館に際しては、常設展示室・企画展示室の見学と、図書室の本の貸し出し・返却にしばらくご利用いただいております。

加えて、館内の消毒作業を徹底するにあたり、清掃担当者を増員して対応しており、お客様のご来館前と後に、手すり、床、トイレ等に至るまで徹底して消毒作業を行っております。

また、お客様に対しては、入館される際の検温、手指のアルコール消毒の実施はもちろんのこと、来館者票記載時のえんぴつの共有は止め、えんぴつのお持ち帰りや、証言映像コーナーのヘッドホンも、使い捨てのイヤホンに切り替えるなどの対応を行っています。

また、当資料館公式サイトにおける来館予約の際に、いつ予約が可能なのかわからないという声を多数いただきましたので、各開館日の予約人数をリアルタイムで表示するページを公式サイト内に開設いたしました。特に、企画展「石井正則「13（サーティーン）～ハンセン病療養所の現在を撮る～」の再開

時は、写真展の会期終了まで来館予約がすべて埋まった状況となってしまうため、キャンセルが発生した際は、またすぐに予約が定員に達するという状況が繰り返していました。



コロナ禍、当資料館では様々な新しい取り組みをチャレンジしております。

従来、団体で来館するお客様には、展示見学前のガイダンス対応を行ってきましたが、定員制の現在では、10名を超える団体での見学が困難となりました。そこで、団体の皆さま向けに、リモート（Zoomなどを利用した遠隔からの参加）によるオンライン展示解説プログラムを開始いたしました。

とりわけ、団体来館者の大半を占める学校からの見学対応として、学芸員がオンラインで常設展示室を案内し、ライブ中継で直接質問に答える方



小平市立小平第五小学校 提供

式を展開しており好評を得ております。なお、オンライン展示解説プログラムは、学校だけでなく、一般の団体のお客様向けにも実施しています。

加えて、コロナ禍で一時休止していたミュージアムトークを2020年7月より、オンラインミュージアムトークと題しZoomウェビナーを活用して実施しています。ミュージアムトークでは、当資料館学芸員がスピーカーとなり、ハンセン病にまつわる様々な話を用意しています。これまでのミュージアムトークでは、会場の都合上約30名ほどしか入場ができませんでしたが、オンライン開催となり、各回100名ほどの方に視聴いただけるようになったと同時に、遠方で来館が難しかった方々にもご覧いただけるようになり、また年齢層も20代～80代とこれまで以上に幅広い世代の方にご視聴いただけるようになりました。

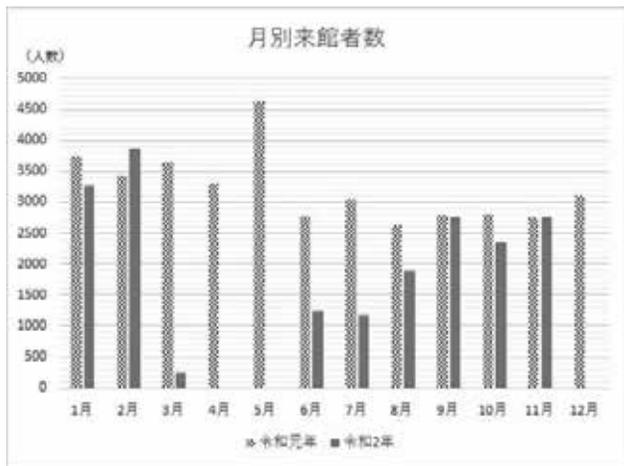
普及啓発活動においても、これまで実施していた学芸員による多数の出張講演も、対面での講演に加えてリモート講演も展開しています。オンライン配信となったことで、今まで子育てのため参加が難しかったママなどの新しいニーズの掘り起こしができています。

今後も試行錯誤を繰り返しながら、コロナ禍における新しい資料館のカタチをつくっていきたくと考えております。

コロナ禍における SNS 活用の試み

武蔵野ふるさと歴史館 木村 遊

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、武蔵野ふるさと歴史館は令和2年（2020）3月2日より休館した。休館を決定する直前の2月29日からはイベントや講演会を中止または延期とした。緊急事態解除宣言に伴い6月1日に再開し、同時に企画展や特集展示も開催したが、前年の同時期の来館者数と比べると、6、7月の来館者数は半数未満となった。9月以降は延期していた古文書解説講座や歴史館大学等の講座を再開し、来館者数も前年と同程度となっている。



休館中には、「おうちミュージアム」に参加した。「おうちミュージアム」とは、学校や保育園等が休校・休園となる中、子どもたちがおうちで楽しく学べるアイデアを各地のミュージアムと連携して提供する事業として、北海道博物館が開始した試みだ。当館では、子どもだけでなく広く一般を対象を定め、「おうちで歴史館」として、学芸員や文化財指導員、公文書専門員が武蔵野市域の歴史や文化について、Twitter と Facebook を通じて紹介することとした。掲載した記事の内容には、「土屋忠司氏作詞昭和38年（1963）録音「茶もみ唄」や「日露戦争期の軍事郵便」などがある。3月14日より6月26日までの主に休館中の間に21件の記事を掲載し、Twitter で最も多く閲覧された記事「旧境村の字名「上水端」」は5,122件の閲覧があった（12月17日現在）。また、「おうちで歴史館」のなかには、学芸員が展示や所蔵資料の解説を行う動画を「動画で見る武蔵野ふるさと歴史館」としてYouTubeに5本投稿し、Twitter と Facebook にリンクを添付した。動画は1件につき平均300件ほどの視聴があった。休館していた3月から5月末までの3か月間で、Twitter のフォロワー数は増加し、SNSを通して当館の情報を得る利用者が増えたことが伺える。一方、コロナ禍でも9月以降は来館者も増え、展示室への入場者も例年並みとなっている。

6月1日に再開して以降、延期していた講座の再開はおおよそ9月の後半を待つこととなった。しかし、9月以降実施したイベントも、例年より定員を減員する講座や、開始前・終了後には職員が使用器具の消毒を実施する講座など、例年とは方法を変更してのイベント運営となった。また講演会などの大規



模なイベントは開催が難しく、11月29日に従来通りの会場・定員で講演会を実施したが、参加者からは、席の間隔を開けてほしい、換気をしているため寒い、窓を開けていると外の音（電車通過時の音等）で聞き取りにくい、といった声が上がリ、特に空調が必要な時期のイベントの実施には課題があると感じた。

一方で、当館の新たな試みとして、Webで開催する講演会を実施した。当館の講座や講演会は、応募者数が募集定員を上回ることが多く、たびたび抽選となっていた。Webで開催した企画展関連講演会「武蔵野台地の地名から学ぶ」は、抽選がなく申込をしたすべての方を対象に9月14日から17日間の期間にいつでも何度でも講演動画を閲覧することができるというものだった。また、インターネット環境のない方には、来館いただき当館のタブレットで視聴ができるように対応した。当館の通常時の講演会の定員は50名であるが、本講演会の申込者数は208人（内来館対応が2人）、動画の閲覧数は451回となり、多くの反響があった。さらに、講演に対する質問をフォームからお送りいただき、後日ホームページにて回答集を掲載することで、申込ができなかった方にも情報を提供することができる形をとった。

博物館におけるSNSを利用した情報提供が広報や集客のために有効な手段であることは、これまで多くの館の実践によって示されてきた。しかし、コロナ禍の現在、博物館のSNS活用は広報や集客のためだけでなく、来館が困難な状況の中で利用者に博物館の活動や地域の歴史・文化を発信し続けるための教育普及手段へと変化してきている。今後は、来館が困難な利用者に向けた情報発信や、多くの利用者が集まるイベントの開催の場としてSNSを活用するとともに、新たな活用方法についても模索していきたい。その際には、SNSを活用する意義をよく検討し、その効果と労力や時間等のコストも十分考慮する必要があるだろう。

コロナ禍での資料館・古民家園運営

立川市歴史民俗資料館 漆畑 真紀子

立川市歴史民俗資料館および川越道緑地古民家園（以下、資料館・古民家園）は、立川市教育委員会生涯学習推進センター文化財係が管理・運営しています。

令和2（2020）年2月以降、東京都内での感染拡大に伴い、立川市の新型コロナウイルス感染症対策本部の決定を受け、3月1日（日）から資料館および古民家園は一般見学を中止、休業となりました。感染者数の推移を慎重に見守りながら、休業期間は2週間ずつ段階的に延長することになり、結果的には5月末まで、約3か月間一般公開中止ということになりました。昭和60（1985）年の開館・平成5（1993）年の開園以来、これほど長期間に及ぶ休館・休園はありませんでした。

また、4月7日（火）からは東京都に緊急事態宣言が発令されたため、立川市職員も出勤を抑えるよう指示があり、館の職員も例外なくリモートワークが推奨されたことにより、資料整理などの学芸活動がほとんど休務状態となりました。休館・休園に伴い、期間中に予定していたミニ展示、体験学習、自然観察のウォーキングイベント9件は打ち切り、または中止（一部延期）となりました。ことごとく中止となっていたイベントですが、偶然にも5月から当館公式Twitterを開設したこともあり、市民の目には触れる事もないかもしれないけれど…と密やかに館内で展示していた「端午の節句」飾りを、子どもの健やかな成長を願って「邪気を払う」ことから「ウイルスの脅威を払いのける、意味も込め、SNS上で公開しました。また、古民家園での麦刈り風景の写真を公開することができました。

緊急事態宣言が解除されて、6月2日（火）から資料館・古民家園とも感染防止策を講じ利用制限を設けて再開しました。立川市の公共施設感染防止対策と施設の特性に合わせて、日本博物館協会の「博物館における新型コロナウイルス拡大防止予防ガイドライン」に沿った対応とし、来館・来園者にはマスク着用、手指の消毒、会話の自粛、発熱している際の見学自粛を呼びかけ、また、館・園の施設規模から入館・入園人数は30名まで、滞在時間は60分以内と制限し、館・園内飲食禁止を徹底しました。資料館常設展示のハンズオン部分には来館者が直接操作できないようにカバーをかけ、利用希望の際には職員に声をかけてもらうように促す注意書きを設置しました。また、密を避けるため、資料館内のラウンジにあるテーブルやイスを間引きし、間隔をあけて設置するなどの対応をしました。

長期休館後の教育普及活動事業では、「with コロナ」を見据えて、事業内容およびスケジュールを再検討することとなりました。まず、東京2020オリンピックの開催延期に伴い、企画展「東京1964オリンピックー立川の記録ー」の開催時期を半年延期し、中止となったイベント（とんからりんはた織りまつり、文化財特別公開）に代わり、企画展「立川の機織り」・写真展「文化財写真展」を実施し、立川近辺の機織り文化の紹介や当館ボランティアサークルとんからりんの織物作品展示、国宝六面石幢や立川市指定有形文化財阿豆佐味天神社本殿を写真で紹介、公開しました。例年行っていた講演会などの外部団体

との共催イベントも、双方で協議のうえ、中止することにしました。体験学習イベントでは、施設における感染防止対策に合わせて、企画内容を大幅に変更し、講師にもご意見を伺いながら中止・開催を検討しました。基本的には飲食を伴う体験学習イベントは中止とし、飲食しない学習内容であっても、指導過程でどうしても密を避けられない場合は中止するという判断をとりました。体験学習を実施する際は必ず受付時に検温を実施し、感染拡大の防止に努めました。

イベントの周知活動として、例年はHPで公開するほかポスターの掲示・チラシの配布を行っていましたが、今年度はモノに触る機会を減らすことを優先し、チラシの配布は行わず、代わりに公式Twitterで呼びかけを行いました（フォロワー数は現在100名近くに及びます）。

その後、徐々に対策制限が緩和され、「新しい生活様式」が定着してきていますが、飲食する場面は感染リスクが高いことが実証されているため、飲食を伴う体験学習は作り方のデモンストレーションのみとするなど、学習内容を変更して開催しています。小学校の団体見学も、公共施設の感染防止対策に合わせて、人数が確実に30名以下の場合（特別支援学級など）は、先生方と綿密に調整し、少しずつ受入れを再開しています。

当分の間、このような様子見の事業運営が続くと予想されます。当館のような地域の資料館・古民家園では、施設の拡充や新たな設備を導入することは難しく、そのため、来館・来園を積極的に促すフレーズを使用してイベントを宣伝することも躊躇われます。代わりに、インターネットを活用してバーチャルな展示会・講演活動を開催する案もありますが、個人情報を取り扱う自治体のセキュリティポリシーのなかでソフト開発やネット環境を整備していくことのハードルが高く、実質難しいのが現状です。

また資料館には貴重な収蔵資料や文化財を適切に保存・管理し、利活用に資する使命がありますが、来館者の感染防止対策で行われる換気（外気の取り込み）やアルコール消毒が、館内の資料保存環境に及ぼす影響が懸念されることも否めません。

ワクチン接種などでの有効的な感染症防止対策が確立するまで、積極的な事業展開ができないことから、こういう時期に学芸活動（資料整理や保存、調査研究）を着実に、「afterコロナ」に向けた事業充実のための準備期間にあてたいと思います。



対策を取りながらのイベント実施模様

令和2年度 活動報告

武蔵村山市立歴史民俗資料館

令和2年度の武蔵村山市立歴史民俗資料館は臨時休館から始まりました。新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から4月4日から燻蒸消毒期間を含む6月3日まで臨時休館とした結果、4月下旬から5月上旬に開催する予定だった年中行事展「端午の節供」が中止になりました。

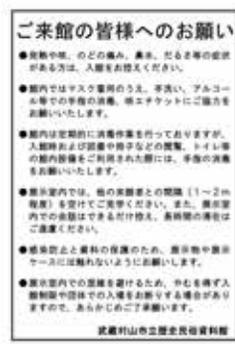
今年は武蔵村山市が市制施行50年の節目に当たることから、特別展のテーマを「武蔵村山市」とし、それに合わせて常設展も含めた展示を行うこととしていました。常設展の展示替えが必要なことから、燻蒸消毒期間中の臨時休館と特別展会期直前の約2週間を特別展準備として臨時休館とする予定を組むなど、例年より作業工程が多い年度となる計画でした。

4月からの臨時休館中は出勤できる職員の人数も制限され、なかなか全員が揃う日がなく、年度当初の打合せもままならない状況の中で、各々の作業進捗状況が把握しにくいということが想定されました。そこで、各自が年度内に行うべき項目について最終目標と期限を設定し具体的な作業をリスト化することで、それぞれが今後何を行うべきか、また、だれが何を行っているのかを把握できるようにすることで情報共有を図ることにしました。各自で決めたスケジュールを元に進めることで、作業に遅れが出ている際には早い段階でフォローし合える体制を作ることを目的としていましたが、可視化することで漏れていた必要作業も洗い出すことが出来ました。

来館者対応について、6月4日からの通常開館に戻る際には、来館者へ向け資料館入口にお知らせを掲示し、手指の消毒をお願いする対応をとることになりました。館内の入口はいつでもの正面に掲示してあるため、来館者の目に留まりやすくアルコール消毒などに御協力いただける方が多いように思います。また、館内のジオラマやDVD閲覧コーナー、リーフレット配架用ラック、トイレなど来館者が手を触れる可能性がある場所について1日2回の消毒を行うことにしました。さらに職員が目が届きにくいDVD閲覧コーナーにもアルコール消毒液を設置し、来館者に手指の消毒を促すようにしています。夏休みの子ども向け展示では「学校とあそび」をテーマにし、50年前に発行された社会科副読本や昔のおもちゃなど触れることができるコーナーを設ける予定でしたが、計画を変更しケース内のみの展示としました。



資料館入口に掲示してある来館者へのお知らせ



講座事業については、当初の計画通り、体験教室と歴史講座を行いました。例年、夏に開催している親子向けの体験教室ですが、4・5月の臨時休校に伴い夏休みの有無が不明だったことや以前から大人向けの体験教室を実施してほしいという要望があったことから、今年は大人のみ参加も可能ということで実施しました。実施にあたり、会場の関係から募集人数を例年の半数とし、当日に体調不良があった際には欠席いただくよう協力を求めました。テーマを「草木染め」としたことや夏休みが例年通りに開始したこと、他のイベントがあまり実施していなかったことなどから募集開始直後から参加申込が相次ぎ、早々に定員数に達してしまいました。当日はマスク着用やアルコール消毒、検温及び体調についてのチェックシートの記入などの協力を求め、通常よりも座席の間隔を空けて、実施しました。実際に染色を行う場面では、密を避けるために館外に移動し、場所やグループを分けるなど例年とは少し違う実施方法となりました。

特別展関連事業として開催した歴史講座でも、体験教室と同じようにマスクの着用などについて御協力いただき、募集定員数を会議室利用定員の半数とし、座席の間隔を開けて実施しました。いずれの講座でも滞りなく開催することが出来ました。3月に実施を予定していた文化財見学会は、新型コロナウイルスの感染が再び増加していることから中止が決定しました。

コロナ禍でのこの1年は、展示や講座などの事業の実施方法や職員間の情報共有の仕方など手探りの状態での活動になりましたが、そうした中でも得られたものが多々ありました。改善を加えつつ今後に生かしていきたいと考えています。



歴史講座 実施風景

今年度開催の主な事業は次の通りです。

- 夏の子ども展示「学校とあそび」(7/18～9/6)
市制施行50周年を迎えるにあたり、子ども目線で振り返ることとし、子どもたちの生活の大半を占めている学校とあそびをテーマに展示を行いました。
- 特別展「武蔵村山を知る～市制施行50周年～」(10/24～1/31)
市制施行からの50年と市制施行前の市域の歴史をテーマに展示を行い、展示解説書を発行しました。
- 夏の体験教室「草木染め」(8/22、9/12)
綿と絹のハンカチを藍・キハダ・タンガラで染め上げました。
- 歴史講座「子どもたちが見た武蔵村山の50年」(11/28)
市制施行から50年間の市域の移り変わりについて、子どもや教員の目線からお話を伺いました。
- 企画展「武蔵村山を歩く」(3/13～5/23)
市内の文化財を巡る歴史散策コースについて、既存のコース及び新設されたコースの紹介をします。

コロナ禍における人々の学習する権利を保障するための活動

帝京大学総合博物館 橋田 梢

1 緊急事態宣言発令から現在まで

帝京大学総合博物館は帝京大学八王子キャンパス内にある。そのため、大学として入構制限を実施すれば原則としてそれにあわせて休館等の対応をすることになる。帝京大学総合博物館(以下本館)は、日本国内において新型コロナウイルス感染拡大が確認された2月末から活動の制限を始めた。以下にその状況を時系列に示す。

2月29日

- ・ 講座「ミュージアムセミナー-大学で学ぶ日本の歴史」延期
- ・ 当面の間、講座の延期

3月21日、28日、4月4日

- ・ 東京都の外出自粛要請を受けて臨時閉館

4月8日～6月7日

- ・ 緊急事態宣言・学内立ち入り禁止のため臨時閉館
- ・ 職員は在宅勤務と事務所勤務を交代で実施

6月8日～

- ・ 大学での対面授業が一部開始
- ・ 学内関係者に限り博物館の利用再開

10月3日～

- ・ 一般利用者(学外からの来館者)の入館再開
- ・ 企画展 帝京大学理工学部創設30周年記念「理工学部のラボのなか! -コトワリとワザの探究- 開催

2 開館再開の判断と開館後のオペレーション

一般利用者の入館再開の判断は、大学の入構制限について一部解除の判断にあわせて実施した。来館予約システム等の導入を検討したが、コロナ以前の来館の状況を考慮すると、事前予約制を導入せずとも、密の状態は回避できると判断した。入館にあたっては、入口での検温・手指消毒・健康状態の確認と、感染者が発生した場合、同日に来館した方へ状況をお知らせするための連絡票への記入をお願いした。展示室内のタッチモニターやスイッチについては2時間毎に消毒を実施し、あわせて展示物付近に除菌ペーパーを設置して可能な限り来館者が展示を楽しめるようにした。

3 利用者のニーズに合わせた活動の展開

本館は大きく分けて3つの属性の利用者がいる。一般利用者、帝京大学の在学生、帝京大学の教職員である。それぞれの利用者に対してそれぞれの求めに応じた活動を実施した。念のため付け加えると実施した内容については、博物館としてコロナ禍以前から実施しなければならないことであったことを追記する。

(1) 一般利用者へ向けてオンラインでの情報発信

コロナ禍で来館できない利用者やさらに多くの方々に本館の活動を知ってもらうため、Twitter・Instagram・YouTubeの利用を開始した。その中でも本館にとって最も大きな試みは、企画展の関連講座をYouTubeを使いオンラインでライブ配信

を実施したことである。初めての試みであったが、準備の甲斐あってトラブルもなく配信を行うことができた。あわせて、講座の動画は講座終了後にYouTubeで公開したため、当日参加せずともいつでも講座を受講できる。こちらは今後も活用予定である。



企画展関連講座はYouTubeを活用しライブ配信した

(2) 学習意欲の高い学生とのニュースレターづくり

本館は帝京大学に在籍する学生教育の場としての役割もある。現時点での本学の授業は対面形式とオンラインでの遠隔方式で実施されており、コロナ禍以前の状況には戻っていない。その中でも学習意欲が高い学生に自分を磨くための機会を提供し、さらにコロナ禍でも力強く生きている人々を応援する目的で、多摩地域の歴史・文化・自然・現在を取材して記録するニュースレター発行プロジェクトを立ち上げた。感染対策を徹底しながらの活動となったが、学生の感性が満ち溢れた素晴らしいものが完成した。こちらも今後継続して活動する計画である。



取材をする学生と学生が執筆・デザインしたニュースレター

(3) 帝京大学の教員への教材提供

現在、講義の多くは遠隔で実施されているが、教員の多くはその教材づくりに膨大な時間を割いている。その手助けになればと博物館を活用したオンライン講義用教材(音声データ)を作成した。現在まで多くの先生方にご活用いただいている。

4 コロナ禍における帝京大学総合博物館の役割

以上の取組の根っここの部分には、「本館は人々の学習する権利を保障する場である」という考えがある。コロナ禍で厳しい環境だからこそ、人間は学び、そして楽しむ事が必要だと考える。決して思考停止にならず、そして人間として何をしなければならないかを考えるための場や、材料を提供し続ける事こそ現在における本館の役割と考え、今後も活動を展開していく。

たてもの園のこの1年

江戸東京たてもの園 阿部 由紀洋

臨時休園

江戸東京たてもの園では、新型コロナウイルス感染症が拡大していくさなか、2020年（令和2）2月29日より感染拡大を防止する観点から、東京都の方針に則り臨時休園となった。休園となるひと月ほど前より、園内の案内スタッフはマスクを着用してのお客様対応となり、高齢者の多いボランティアも、休園となる前に活動を休止した。休園は当初3月16日までとされていたが、その後3月31日まで延長され、さらに4月13日、5月7日までと延長を繰り返し、結局は5月25日の緊急事態宣言の解除から7日後の6月2日に再開するまで続くこととなった。例年、桜の開花やゴールデンウィークなどで多くの来園者でにぎわう園内が、とても静かな春を迎えた。

感染拡大防止策を講じて再開

約3か月間の臨時休園を経て再開したが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、来園者に対して入園前の検温や手指のアルコール消毒、園内でのマスクの着用など、さまざまな協力を呼び掛けながらの再開となった。また園内には、音声POPを設置して、来園者同士で距離をとっていただくよう注意喚起をした。そして3月3日に開会予定であった特別展「ぬくもりと希望の空間～大銭湯展」が公開となったが、展示室内での見学人数は20人までと入場制限を行なった。復元建造物の公開についても、靴を脱いで内部を見学できていた建物については外観のみの見学とし、外からの見学に支障のないよう、可能な限り窓などを開けて見られるよう配慮した。しかし「子宝湯」だけは、関連する展覧会を開催しているため、内部を一方通行の強制動線とすることで見学可とした。その際、靴はげた箱に入れず、靴袋を配布して来園者自身で管理していただくようにした。

茅葺き民家での囲炉裏の燻煙や来園者へのガイドなどを担っているボランティアの活動は、再開後も休止となった。あわせて団体客の受け入れについても、当面休止とした。なお、団体来園の受け入れは7月15日に再開したが、ボランティア活動は現在でも活動を休止している。



ビジターセンター入口に設けた検温所の様子

コロナ禍の中での事業実施

このようにして再開園を果たしたが、年間の事業はさまざま

に見直さざるを得なかった。まず当園の建物やその街並みを活かして展開している「情景再現事業」のうち、こどもの日にちなんで開催する「こどもの日イベント」や夏の夜間開園の「下町夕涼み」は、多くの来園者でにぎわう事業であり、密を避けるため休止となった。もう一つの夜間開園である「紅葉とたてものライトアップ」は、例年3日間の開催であるところを2日間に短縮し、対面接触型のワークショップはとりやめて実施した。幸いにして2日間とも天候に恵まれ紅葉も見ごろを迎えたこともあり、両日あわせて8,800名ほどの来園者があった。開催中、入園を待つ人たちの列が生じたり、園内では写真撮影をする来園者の集団が発生する場面もあったが、大きな混乱もなく無事に終了できた。このほか、毎月定期的に開催している「伝統工芸の実演」は7月より再開し、会場内に来園者同士で距離をとってもらうよう立看板などを設置して実施している。一方、学芸員による「ミュージアムトーク」は、いまだ再開には至っていない。

学校団体への対応についても、今年は実施方法の変更を余儀なくされた。例年、小学校3年生を対象に10月より実施している「昔くらし体験」は、当園ボランティアにより火起こしや石臼の体験などを実施していたが、前述のとおり活動休止のため職員で対応することとなった。そこで、木曜日限定で実施することとし、園内「吉野家」で囲炉裏を焚き、火鉢も使用して子供たちに見てもらおう、という方法で実施した。体験というよりは見学といったスタイルではあるが、それでも学校からは好評であった。

そして10月末には、休止していた建物の内部公開を、一部の建物を除いて再開した。再開園以来、多くの来園者から内部公開の再開を望む声があったのを受けて、各建物内部の見学動線を設定し、建物ごとに最大の収容人数を設定して表示するなど、内部で密にならないような対策をしての公開となった。

WEBによる発信

長引く臨時休園の中、さまざまな博物館や美術館でWEBを活用した試みが行われたが、当園でも職員間で話し合いながらどのようなコンテンツが提供できるか、検討を重ねてきた。そして再開園後の7月下旬より「えらべる 学べる えどまる広場」というページを立ち上げ、クロスワードやペーパークラブ、ぬりえや「昔のくらし」をテーマにした探検マップなど、未就学児から高校生まで幅広く楽しめるコンテンツの配信を始めた。現在も建築に関することや園内の英会話のシミュレーションなど幅広いテーマでコンテンツを充実させ、家でも楽しむ、そして来園のきっかけとなることを期待している。

当園は野外博物館ということもあり、比較的多くの方々に足を運んでいただいている。このような状況の中で、今まで実施してきた事業をいかに工夫して行っていくか、あるいは新規に立ち上げた事業をいかに充実していくか、まだまだ試行錯誤を続ける必要があるようである。

開かれた博物館と大学の安全措置のはざままで

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 具嶋 恵

展覧会の見合わせと臨時閉館

当館は大学の教育施設であると同時に、広く一般に公開しており、学内外に向けて例年それぞれ3回の特別展と公開講座を開催しています。しかし2020年3月13日に特別展「ICUに眠るコレクション探訪」を会期満了で閉幕して以降は、COVID-19の動静を睨みつつ本学の方針と歩調を合わせ、各企画の開催のタイミングを検討してきました。結果、2020年度を通して残念ながら一般開館を見送ることになりました。以下は実施を断念した展覧会です。

4月14日～7月3日 「よみがえる宮古島の祭祀」(中止)

9月23日～11月13日 「日本のうるし工芸」(延期)

2021年1月12日～3月19日 「型紙 精美なる技」(延期)

うち4月の企画は宮古島の秘祭を記録した写真展で、作品借用を含め多くの関係者の協力を得て準備し、展示・広報が完了していたこともあり、開幕予定日以降も開催の可能性を探りましたが、事態収束の見通しが立たず最終的に中止を決定しました。残り2つは当館所蔵品展であり、来年度に会期をスライドすることとしました。



オンライン企画を発信

大学職員として館員も在宅勤務が推奨されたため館内業務の限定・縮小は避けられない状況となり、当該年度の運営計画の変更が課題となりました。幸いにして本学はいち早くオンライン授業を実施しておりインターネット環境が整っていたため、館でもリモートワークや情報コンテンツ発信に積極的に活用していきました。ウェブサイトとSNSでの広報のほか、所蔵品紹介やギャラリーツアー動画などを継続して公開していますが、これらコンテンツはすべて館員がウェブ会議システムやオンライン共同作業ツールを用いて協同で制作しています。

また閉館中も外部とのかかわりを維持するべく、インターネットのライブ配信(ウェビナー)で公開講座を開催、常連の

聴講者のほか地方や海外からの初参加もあり、新たな利用者開拓にもつながりました。

6月13日 トークライブ「よみがえる宮古島の祭祀」(出演：藤田ラウンド幸世氏、館長ロバート・エスキルドセン)

10月31日 公開講座「20世紀アメリカにおける日本美術収集活動の展開」(講師：白原由起子氏)

2021年1月30日 公開講座「疫病は江戸時代にどう描かれたか」(講師：M.ウィリアム・スティール氏)

博物館実習の実施

本学は2020年3月以降、教員と学生のキャンパスへの出入りを制限、卒業式、入学式、春学期の対面講義を取りやめました。秋学期(9月～)からは順次緩和されたものの、学外者の入構は原則禁止となっています。これに伴い当館の予定も随時修正を余儀なくされましたが、とりわけ大きな課題となったのは、館内で実施する学芸員課程の授業をいかに安全におこなうかということでした。モノを扱い、場を作るという学芸員の性質上、その職務を学ぶ講義を全面オンラインに移行するには無理があると判断、学生の受講環境やウイルスの流行状況を考慮しながら各科目担当教員の意向をふまえ、対面とオンラインを組み合わせて慎重にカリキュラムを構成していきました。特に11月の博物館実習では館内の清掃と消毒を徹底し、十分な講習スペースと換気設備を整えた上で、受講生にも感染防止の協力を求めるなどし、無事に8日間の集中講義を終えることができました。専用の道具類を人数分揃え、復習用に実技を録画するなど、期せずして次回以降の備えとなるような成果物ができたことは収穫でした。

学内限定で安全な開館を試みる

事態の収束の見通しが立たないまま臨時閉館の期間が予想以上に長引く中、「教育を止めない」ことを最優先事項とする本学の方針に従い、例年と変わらぬ授業開講に加えさらに実のある教育環境に与するため、まずは学生と教職員に限定して開館することを決定、9月から週1日のみ展示室の規模を縮小してコレクション展示を公開しています。学内者は専用ウェブサイトから予約の上、大学ヘルスケアオフィスの体調管理ガイドラインに則って来館するよう案内しています。

当面はこの体制が続くものと思われませんが、館内では学内利用者に対応する経験を積み重ねることで安全策の確立に努め、再び通常開館できる日に備えています。



アフターコロナの事業展開に向けて

小金井市文化財センター 高木 翼郎

年間計画の企画事業は全て中止

当館は、令和2年3月初めから臨時休館となり、6月の館再開後は来館者数に少なからず影響がありました。これは、春季に予定していた季節展「名勝小金井桜」が、臨時休館に伴い中止したことが要因の一つです。

秋季では東京文化財ウィークにおける企画事業として、企画展や文化財講演会・史跡めぐりを計画していたものの、新型コロナウイルス感染症の第三波を見越して利用者・職員の安全面から全てのイベントを中止しました。

「小金井市文化財センター通信」発行

企画事業が未実施のなか、館の事業として唯一実施できたのが「小金井市文化財センター通信」の発行です。

当館には文化財や市史編さん事業で収集してきた資料が数多く保存されています。資料の活用の観点及び学芸研究の成果として、小金井地域の歴史や文化財等を紹介することを目的に今年度より発行を開始しました。

講演会のような対人の事業展開が難しい中、情報発信のツールとして重要な役目を果たして欲しいと願います。



文化財センター通信No.1 発行

「武蔵小金井まちかど歴史ミュージアム」開設

こうした中で新たな試みもありました。

生涯学習課で企画した「まちかど歴史ミュージアム」事業の第一弾が開始されました。6月30日に武蔵小金井駅前で開催した商業施設「SOCOLA 武蔵小金井クロス」の一画には、当館所蔵の本町六丁目遺跡の出土品などを活用した、「武蔵小金井まちかど歴史ミュージアム」がオープンしています。

小さな展示コーナーではありますが、縄文土器や近世～近代

の陶磁器等の実物資料及びイラストを混じた解説パネルによって、分かりやすい構成に仕上げることができました。考古資料の有効活用の観点、官民協働による常設の展示施設としての意義は高いでしょう。開設元年ということもあり、武蔵小金井駅前において手軽に郷土学習ができる施設と評判です。

生涯学習課では、今後、機会をみてまちかど歴史ミュージアム事業を推進していくようで、当館も連携を図っていくこととなります。



武蔵小金井まちかど歴史ミュージアム

課外学習の文化財センター利用増

市立小学校の課外学習では、市外への施設見学が難しくなったことも背景にはありましたが、当館を利用するケースが増えました。

6年生では学校側の希望もあり、消毒を徹底したうえで、実物の縄文土器を使つての郷土の歴史の授業を行うこととなりました。ケース内に展示されている土器を見て触れられたことで、児童からは「意外と重い」「デザインが凝っている」「縄目が無いんだ」と様々な感想が出ていました。担当教諭の方々も、「地域史をより知る大切な授業となった」「学校周辺の歴史の理解が深まった」とコロナ禍にあって、目線を地元に戻し再発見する機会となったようです。

多様な手段を使い、知恵を絞り、市の文化財の魅力を外内に広めていく、通常とは違う新たな事業を進めることができ、今後の事業展開を考えていく一年になりました。

令和2年度の活動報告

東京都立大学 91 年館（学芸員養成課程展示室・実習室） 堀 智博・加藤 早百合

令和2年度、他の大学・博物館施設と同様、当館もまた、コロナ禍という未曾有の事態に戸惑い、その対応に苦慮し続けた1年となりました。

当館ではその名の通り、都立大学の学生に向けて学芸員養成課程科目の講義や、館園実習に先立つ学内実習「博物館実習Ⅰ」を開講しています。この「博物館実習Ⅰ」では、カリキュラムの一環として展示制作が課されており、学生たちは慣れない作業に悪戦苦闘しつつも協力して課題に取り組み、場合によってはその成果を展示室に公開し、学内外の皆様にお披露目することもあります。この模様については『ミュージアム多摩』紙上でも何度かご紹介させていただきました。ところが、年初より起こった新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、上記にみる活動も大きく制限されることとなりました。

大きな動きとして、第一に展示室の臨時閉鎖が挙げられます。91年館は、当初から博物館施設を目的として建設されたものではなく、元々は大学のカフェテリアとして利用されていました。そのため当館展示室は、学生・一般の方を迎えるのに十分なスペースがありません。それでも例年7月・8月にかけて行われるオープンキャンパスでは、300人程度の来館者がいらっしゃいます（今年度はWeb 大学説明会が実施され、残念ながらオープンキャンパスは中止となりました）。こうした状況はいわゆる「三密」に該当し、感染拡大は必至です。学生および教員の生命の安全を憂慮した結果、臨時閉鎖という処置をとらざるを得ませんでした。最近ですとコロナウィルスワクチンの開発というニュースも届いており、事態が好転して展示室が再開出来ることを心から望んでおりますが、一方でコロナ禍の継続という事態も考慮して、今後は自宅でも楽しめるオンラインコンテンツの充実、具体的には展示解説動画の製作・HP上における公開を考えております。

第二に、オンライン授業の導入が挙げられます。やはり感染拡大防止の観点から、出来るだけ対面・接触を避けるために自宅からの受講が可能な、ZOOM（web 会議サービス）を介しての授業が実施されました。例年ですと、学生達は91年館に集まり、そこに常備してある専門器具や資料を実際に使用して、学芸員に必要な技術を学んでいくのですが、自宅学習ではそれは困難です。このように不便な状況ではありますが、それでも学生達にとって充実した学習の機会になるよう、担当の先生方には各自工夫を凝らした授業をしていただけました。たとえば、自分が学芸員になったと仮定して、特別展を担当することになった場合、どんな展示を企画し、如何なるポスターを制作するのか、といった課題を与えて自由に考察・発表させるなど。その結果、学生たち主導で、個性的かつ興味深い報告が相次ぎました。

とはいえ、博物館実習という科目の性質上、画面越しの授業を見聞きするだけではどうしても限界があります。そこで、一部対面授業を実施しました。もちろん大学に出向くことは強制ではなく、まずは希望を聞き、対面授業の受講を望まない学生



web カメラを用いた授業風景



ある日の対面授業前の教室

第三に、学外の博物館実習の受け入れが叶わなかった学生を対象として、救済・特例措置として補講授業をハイブリッドで実施いたしました。たとえば、学生に対し、過去の展示パネルを館内に自由に配置してもらい、来館者の導線を意識してもらうなど、ユニークな実習が展開されました。

コロナウィルスという脅威に対し悲観するばかりではなく、学生、あるいは一般来館者の皆様に、より豊かな学習の場を提供できるよう、今後も工夫して取り組んでいく所存です。そのためにも、周辺大学・博物館施設との協力、および情報交換をすることが何より重要だと考えます。だからこそこれまで以上に三博協を通じて博物館35館の繋がりを大切にしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

コロナ禍での五日市郷土館の記録

五日市郷土館 小澤 雅也

はじめ

新型コロナウイルス感染症の対策は、令和2年3月3日の雛祭りのイベントを中止したことが最初でした。当館と併設している古民家「旧市倉家住宅」で琴の演奏を行う行事です。その数日後、3月5日に緊急事態宣言が発せられ、当館は臨時休館となりました。

新年度と共に新体制に

令和2年4月より、埋蔵文化財関係や文化財指定などの文化財保護業務を行っていた文化財係が本庁舎から当館内へ事務所移転をしました。ちなみに今回担当する私は今年の4月に異動してきた事務職で、郷土館で新鮮な毎日を送っています。

休館中は

館の業務としては収蔵資料の整理を行いました。また、文化財保護業務は通常どおりでしたので、休館中であってもどこか落ち着かない日々を送りました。異動したての私としては、通常の館の様子が分からず、郷土館で働いている実感がイマイチ持てない日々でした。

宣言解除により開館スタート

緊急事態宣言が解除された後、6月2日から開館を再開しました。市の感染症対策本部の判断を元に館運営のガイドラインを作成し、それに沿った形での開館でした。対策としては館内の消毒や換気、来館者への手指消毒や来館者票への記入、入場制限（館内30人）、また職員の検温や体調記録などを実施。ガイドラインの中では、温湿度を一定に保てないという点において館内の換気が課題となっています。感染対策第一ということで、展示室の換気扇を稼働させていますが、ケースに入っていない展示物も多くあるため、展示物へのダメージが懸念されています。展示としてはミニ企画展「郷土の古文書その31

乙津村『字高嶽』誤謬訂正願」を開催しました。市内から発見された古文書を読み下しや口語訳とともに解説する展示です。HPでも資料をPDFで公開しています。



夏になると

7月から8月にかけて、西多摩への観光客が急増し、これまでに見たことのないような渋滞が起きました。目的地となったのはあきる野市の西側に位置する檜原村や奥多摩町だったようで、当館の来館者が急増することは無くトラブルもありませんでした。展示としては、7月の七夕に併せて旧市倉家住宅の縁側にて「七夕飾り」を行いました。短冊に自由に願い事を記入し飾り付けられるようにしたところ、家族連れや近所の子も達がたくさん書いてくれ、竹が短冊でこんもりとなっていました。

秋になると

例年8月から9月にかけて、市内の各所で祭り囃子が聞こえてくるようになるのですが、今年はどこの祭りも中止となってしまいました。郷土芸能の団体も活動をしてよいのか、子ども達へどう教えたらよいのかなど不安な様子でした。一方で学校からの見学依頼が来はじめました。市内の学校に加え、都外への修学旅行に行けなくなった近隣市の学校の見学もあり、10月来館者は前年比130%でした。思わぬ増加です。学校見学の受け入れに際しては、密にならないように少人数での班分けとローテーションによる見学を徹底しました。展示としては旧市倉家住宅で年中行事「十五夜」を実施しました。縁側にごぎを敷き、一升瓶に挿したススキと野菜や団子を飾りました。



初冬になると

11月4日より企画展「写真で巡るあきる野の生業」を開催しています。明治から平成にかけて市内で撮影された写真の内、人々が働いている様子がわかる写真を約40点展示しています。企画の意図としては、コロナにより人々の働き方が大きく変わり、そして未だに定まらない不安定な社会の中で、あきる野で生きてきた先人たちがどんな仕事をしていたのかを写真から知ること、これからの私たちの働き方、そして暮らし方を考えるきっかけになってくれればとの思いでした。意外と知られていない職業や仕事もあるので、地域を見直すきっかけになると嬉しいです。11月には企画展の他にミニ企画展「郷土の古文書その32 黒八丈どろ染用の田土取二付惣百姓連印証文」と旧市倉家での写真展示「七五三」を、12月からは年中行事「正月飾り」として羽子板と破魔矢を飾っています。



これからについて

新型コロナウイルスにより社会が変わりました。新しい生活様式というものが今後はさらに広がります。そんな中で公立博物館はどういう方向に向かっていくのでしょうか。オンラインを活用した展示方法の開発だけでなく、増加し続ける収蔵民具、観光行政と教育行政のバランス、専門職員の養成など問題は山積しています。今回の社会の変化を好機と捉え、これからの新しい博物館を作り上げていきたいと思っています。

コロナ禍の中での体験講座

町田市立博物館 佐久間 かおる

町田市立博物館では、2019年6月をもって博物館内での展示事業は終了し、現在は館外での出張展示や体験講座を開催しています。2020年度は新型コロナウイルス感染者が都市部を中心に広がり、当館においても4月の下旬頃から6月初旬まで職員の勤務を交代制にするなどの対策を行いながら、夏以降のスケジュール調整を行ってきました。

体験講座は今回のケースに限らず、当館においてはすべて事前申し込みで募集を受け付けて実施しています。

会場では、講師をはじめ職員はマスクとニトリル手袋を着用し、参加者が使用する道具などの事前準備をしました。講座は1日に2回実施しているの、回が変わるごとにテーブルや椅子、使用した道具はすべてアルコールで消毒し、また使用済のアルコールウェットティッシュは専用のごみ袋を用意して、感染拡大予防に努めました。参加者には、申し込み時に講座中のマスク着用をお願いするとともに、体調不良の場合の参加辞退もあわせてお願いをしています。当日は、会場入口での非接触型検温と手指のアルコール消毒のご協力をお願いし、万全な体制で講座を開始できるよう準備を行い、2020年度の体験講座や出張展示を行ってきました。

次に2020年度実施した体験講座それぞれの実施状況についてご紹介します。

ガラス体験講座

ガラスのコップにグラインダーという工具で自由に模様を彫る子供向け講座として毎年開催しているものです。通常は開催場所の定員通りに募集人数を定めますが、今回は定員の半数で参加者を募集し、他の参加者と距離がとれるよう席を配置しました。また、ガラスを彫る際に粉が目に入る危険を防ぐため参加者は安全眼鏡を着用していただいたので、講座終了後は洗剤で洗浄し、次の講座開始前には再びアルコール消毒を行って使用しました。



写真1 「子どもセンターでガラス体験」講座風景

やきもの体験講座

この講座は、焼きものの成形作業を体験してもらう3種類の講座です。ガラス体験講座と同様、開催会場の定員の半数から三分之一を募集受付人数とし、参加者間を広く距離をとれるようテーブルを配置して講座を行っています。3講座の中で1講座は2回連続講座とし、1回目で製作した器に2回目で調理した料理を盛り付け、使う楽しさを体験する講座を実施しました。食材を使用しその場で実食するというので、食事の際はビニールカーテンを設置し、食器類は使い捨てのものを使い、参加者間の感染防止に努めました。



写真2 「粘土から作る My 茶碗 My 箸置」講座風景

紙すき体験講座

この講座は、和紙の材料である楮の加工から紙すきを行い、ハガキ2枚とマグネット1個を作成するものです。以前開催した際には、工程ごとにテーブルを分け、参加者全員が道具を共有して実施していましたが、今回は講師と相談の上、参加者が使用する道具は共有せず、またチリよりや紙すきに使用する舟は参加者1名ごとにテンバコを代替品として、他の参加者とは可能な限り間接的にも接触しないよう用意しました。



写真3 「本格的な和紙作り～夏休みスペシャル講座～」講座風景

福生市郷土資料室における新型コロナウイルスの対応状況

福生市郷土資料室 青海 伸一^{せいがい}

福生市では、緊急事態宣言が出される前から順次施設の閉館や開館時間の縮小などの措置が取られていました。郷土資料室や郷土資料室で管理している古民家については、4/3に市の方針として4/7～5/6まで閉館することとなったところから、具体的な新型コロナウイルス対応が始まりました。その後5/1時点で5/31まで閉館期間が延長され、その間HPでの周知や関連施設への掲示などの対応を行うとともに、市として半分の職員を在宅勤務とするという方針に基づき、正規職員1名と会計年度任用職員1名のみ出勤とし、残り職員は在宅勤務という形になったところです。

閉館期間中に予定されていた企画展示については、4/12までが会期だった企画展示「むかしの道具」は一週間早く展示期間を終了し、次の企画展示「資料が語る福生市のあゆみ」については再開の可能性があったことから予定通り展示の準備を行いました。この展示の展示期間は本来4/14～6/7を予定していたものの、再開時期が6月からとなったことを受け、6/2～6/21として実施しました。これは、この後に続く特別展示「写真でたどる福生」や企画展示「平和のための戦争資料展」の展示期間を後ろ倒しにし、かつ期間を短縮することで実現させたものです。

月曜休館日を挟み、6/2からの展示室の再開にあたっては、ガイドラインの作成を始め、カウンターへのビニールシートの設置、来館者用アルコール消毒液の設置、展示室内は一日2回（朝と昼）の消毒作業を行うこととし、感染症対策を行ったうえでの開館となったところです。この時、対応について協議する中では、入場者の検温や記名を求めるのかといった議論もありましたが、福生市郷土資料室は中央図書館に併設されており、図書館の対応と歩調を合わせることとし、来館前の自宅での検温を求めることとしたほか、展示室の入場者はこれまでの展示の状況から、一時的に密な状態が発生することも想定しにくいと判断し、一般入場者に対しては記名などを求めず、団体見学については当面の間受入れないこととしたうえで、入場制限や予約制による対応は行わないこととしました。

それでも展示室において感染拡大につながる恐れがあるということで、常時展示室に係員を配置することに対する安全上の課題なども考慮し、使用するごとに消毒が必要となる鉛筆を利用する活動は控えることとし、アンケートの撤去をはじめ、週末に実施していた小学生クイズやワークシートの実施は見送りました。また、講演会や古文書学習会などの各種講座やボランティアによるガイドツアー、夏に予定していた小学生向け見学会などの事業は中止となりました。

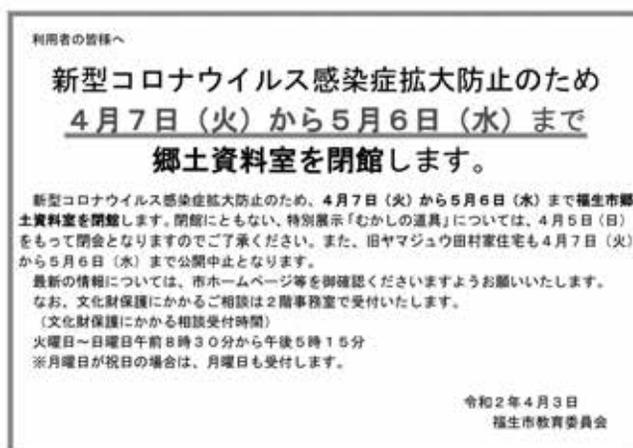
事業の再開は小学生クイズが8月から、小学生向けワークシートやワークショップは10月からとなりましたが、そのほかの事業は現在も中止となっています。

博物館実習については、学芸員資格取得に必要な科目であることから実施することとし、当初予定していた8月中旬から下旬に、感染症対策を行いながら、内容を大幅に変更して実施

しました。

この新型コロナウイルスに伴う社会の変化は、博物館活動に大きな影響を与えただけでなく、社会全体にも大きな影響を与えていると判断し、緊急事態宣言が出た後も、通勤途上を利用して市内の様子について撮影を行ったほか、関連する資料についても手作りマスクをはじめ気づいた範囲から収集を開始しました。それらの資料は、2月から行う企画展示の中で一部ではありますが展示し、それをきっかけに新たな資料収集につなげていきたいと考えています。

まだまだ新型コロナウイルスの影響により活動は制限されていますが、展示室では鉛筆を用いずにシールを貼ってもらう形のアンケート形式の新たなプロジェクトを立ち上げ実施するなど、これまでは行っていなかった様々な工夫をしながら、新しい博物館活動が行えるよう、今後も職員一同知恵を出しあい活動を行っていききたいと思います。



郷土資料室の閉館中の掲示物



ワークショップ再開にあたって、アクリル板や消毒液の設置、マスクやフェイスシールドの着用をはじめ、子どもたちの作業終了後には机の消毒を行うなどの対応を行っている。

コロナ禍での博物館活動

調布市郷土博物館 土井 昭穂

調布市郷土博物館は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、令和2年3月28日から5月31日まで臨時休館し、6月2日から再開した。2月下旬から都内の各博物館が相次いで臨時休館する中、調布市直営である当館は、市の公共施設における一律の対応に準拠して3月下旬というタイミングになった。臨時休館中は、1/3ないし2/3の職員が在宅勤務を行った。

当館は、国及び東京都の方針等を踏まえて作成された「調布市公共施設の開館・利用における感染拡大防止ガイドライン」で示される感染防止対策に基づき、施設利用やイベント実施の判断を行っている。以下、臨時休館から現在にいたるまでの開館状況や事業実施状況などを報告する。

開館状況

調布市郷土博物館は、6月2日以降は、人数制限を設けながらの開館を継続している。当初は10人以内としたが、ガイドラインが9月25日に更新され当館も10月13日からの秋季企画展開催にあわせて40人以内に緩和した（床面積から算出される施設の必要換気量を指標とした）。現在、団体見学は40人の範囲内であれば受け入れ、解説についても距離を保つなどの対策を講じながら、相談に応じて行っている。一方で、当館が管理する深大寺水車館は、観光地に立地すること・敷地が狭いことから密が避けられないと判断し、展示回廊と水車小屋内は閉鎖を続け、水車小屋外観のみ見学できるようにしている。

館内の感染症対策としては、まず、全ての来館者に対して入館票の記入を求め、氏名・住所・連絡先・体調・渡航歴の確認を行っている。また、図書閲覧スペースの封鎖、休憩用の長椅子の撤去、書籍販売の休止など行い、接触する共用部を極力減らす・滞在時間を短くする工夫をしている。そのほか、職員が1日に2回当番制で消毒を行っている。

事業について

展示は再開以降通常通りに行い、夏季企画展（6月27日～9月13日）、秋季企画展（10月13日～12月13日）ともに予定通りの会期で開催した。しかし、1964年の東京オリンピックをテーマとした夏季企画展においては、資料借用を前提に展示構成を練っていたが、資料提供者との接触を控えることとし、館蔵資料を中心に内容を再構成することにした。客足自体は減ることはなく、多くの来館者があった。

教育普及事業に関しては、計画していた事業の多くを見合わせた。特に年中行事や伝統技法を体験する事業は、指導の際に距離を保つことが難しい点、講師が高齢である点、飲食を伴う内容もある点などを考慮し、中止とした。一方、講演会は感染症対策が取りやすいと判断し、定員を減らして実施した。

博物館実習生の受け入れ

博物館実習については、各申込者の大学事務担当者と相談の上、3名を受け入れて実施した。実習直前の2週間の体温表の提出を求める、実習期間中も毎日の検温する、実習生同士距離を保つなど対策を講じた。例年は体験事業の補助をカリキュラムに組み込んでいたが、事業自体の中止により行えなかったり、

実習生同士の交流が控えめになってしまったり、コロナ禍での実施には課題も生じた。

自宅で楽しめるコンテンツの拡充

臨時休館中、自宅でも博物館を楽しむように、ツイッターの運用を開始した。これまで博物館単独のSNSアカウントは持っておらず、市役所のアカウントに寄稿するかたちで広報を行っていたが、より効果的に発信していくために臨時休館を機に取得した。開館情報やイベント、展示情報のほか、地域の歴史・文化に関する豆知識や、普段は展示していない館蔵資料の紹介なども行っている。

また、対面での教育普及事業に代わる取り組みとして、夏休み期間に合わせてWebコンテンツを新たに作成した。ワークシート、収蔵資料をモチーフとした塗り絵、工作や料理のレシピをホームページ上でダウンロードできるようにした。

一方、各施設で講演会・講座のオンライン配信が試みられているが、当館ではまだ実施していない。当館の利用者ニーズや通信環境を踏まえながら、今後検討していきたい。

コロナ禍における展示テーマの設定

今年度の秋季企画展として、深大寺との共催で東京都文化財指定記念展「深大寺の元三大師」を開催した。本展は、調布市内の古刹・深大寺所蔵の元三大師像が令和2年3月に都有形文化財に指定されたことを機に企画したものの、元三大師は厄除け大師として信仰を集めていることから、期せずしてより時流に沿った展示となった。深大寺所蔵の元三大師ゆかりの版木や古文書などを展示したほか、全国各地の天台宗系寺院の角大師の御札を収集して紹介した。疫病神を追い払うため鬼の姿になった元三大師を弟子が写したと伝えられるこの御札は、玄関などに貼り疫病除け祈願とするもので、昨今これまでに以上に人々の注目を集めている。各寺院で姿形のバリエーションに富み、来館者からも「これだけの種類の御札を一度に見られるのは貴重な機会」と好評だった。

そのほか、2階のギャラリーにて10月27日から12月27日まで、「郷土玩具に込めた病除けの祈り」と題し、当館所蔵の病除け祈願の郷土玩具約30点を紹介する展示を行った。



郷土博物館
ツイッター
QRコード



全国各地の角大師の御札

コロナ禍での令和2年度活動

瑞穂町郷土資料館けやき館 北爪 寛之

経緯・対策

令和2年度の当館でのコロナ感染症への取り組みを含めた活動を報告します。コロナ対応は、昨年の令和2年2月に遡ります。2月の中旬までは展示やイベントなどは通常通り行っていました。感染が国内に広がっていくに従い、イベントの実施の可否や展示の対応について検討されるようになります。そして、2月末に開催中の企画展示・イベントの中止が決まり、展示は常設展示とパネル展示のみとなります。4月7日に東京都に緊急事態宣言が発出されると、翌8日から臨時休館となり、5月25日に緊急事態宣言が解除されると、翌26日から限定的に再開しました。以降は予防策を講じつつ、開館しています。

当館の管理運営は指定管理が行っているため、臨時休館やイベントの制限については、政府、東京都、瑞穂町のコロナ感染症対策に準じ、かつ、町との協議の中で決定、運用しています。

現在のコロナ対策

来館者に館内を安全に見学・利用してもらうため、次のような取り組みをしています。

発熱など体調不良の方の来館をお断りする呼びかけをするのと同時に、入館時には、①アルコールでの手指の消毒、②マスク着用、③ソーシャルディスタンス、④滞在時間の制限(30分)、⑤サーマルカメラでの検温、⑥連絡先の記入(行政機関の聞き取り調査に協力する場合のため、2週間保管の後破棄)の協力をお願いしています。

イベントについては、募集人数を通常時の半分から1/3程度とし、講演者にはアクリル板で飛沫が飛ばないように協力をしていただいています。そして、距離を十分取り、換気を行いつつイベントを行っています。また、料理をとまなうイベント(料理教室など)は、現在全て中止にしています。

職員・スタッフの取り組みとしては、毎日の検温、飛沫が飛ばないように受付にアクリル板を設置する、換気を常時行う、ケースなどよく接触される箇所のアルコール消毒の実施を普段から行うなどして対策しています。



(写真1) 資料館の入り口

常設展示

常設展示は通常通り見学できるようになっていますが、ハンズオンの展示(タッチパネルのクイズ、土器パズルなど)は全て休止し、個室となる地形シアターについては間隔をあげ、人数を制限して実施しています。また、ケースや接触されやすい箇所のアルコール消毒を定期的に行っています。



(写真2)
常設展示室の様子

企画展示

企画展は、緊急事態宣言期間中に開催予定の展示もありましたが、期間を変更することで予定していた企画展を全て実施しています。

企画展は、①みずほの蝶(会期:6/1~7/26)、②ニシタマ・シネマエイジ(会期:8/7~9/22)、③清水家文書展(会期:10/10~11/29)、④造形作家 友永詔三の世界(会期:12/22~令和3年1/31)、⑤ひなまつり展2021(会期:2/13~3/7)となっています。

関連イベントとして展示のギャラリートークを実施していますが、距離を取りつつ、少人数での実施を心掛け、今のところ問題なく実施できています。

講演会・イベント・学校関連

講演会・イベント関連は、6月下旬から安全を確保できるイベントについては、広めの会場で行う、人数を制限するなどの対策をとりつつ実施しています。

学校関連については、普段から大学生の学芸員実習は受け入れていませんが、中学生の職場体験、高校生の受け入れは中止となりました。小学校の社会科見学については、11月から実施しました。学校からの要請により、出前授業を取り入れた場合もあります。昔の道具体験については小学生が資料に触れる場面もあったため、先生と話し合い、一人ずつ手指消毒をして資料に触れてもらいました。

現状と今後の展望

5月末から郷土資料館が再開して以降、感染症対策をとりつつ運営を行っているため、来館者数は例年の半分ほどに留まっています。今後はコロナ後も見据え、来館者数のみで評価するのではなく、来館者一人一人に満足してもらえる運営をつづけていく必要があると思われます。

令和2年度活動報告～コロナ禍における博物館活動～

清瀬市郷土博物館 古川百香

令和2年度は当館も例外なくコロナ禍による臨時休館からのスタートとなりました。当館では前年度末の令和2年3月6日から臨時休館となり、その後の情勢により延長に延長を重ね、緊急事態宣言解除後の5月27日から再開となりました。当然、この間の事業は全て中止となり、休館中はこれまで行き届かなかった資料整理等を行いながら、再開に向けて準備を進めていましたが、緊急事態宣言となってからは、職員も館への出勤を減らし、在宅ワークを余儀なくされました。私個人としては、担当している7月からの特別展の準備が佳境に入っていたため、なかなか思うように進まず、非常にもどかしい日々を過ごしました。

再開後は、入館時の手指消毒や緊急時用の記名、ハンズオン展示の停止、展示ケース等の定期的な消毒や清掃、貸館業務においては使用者名簿の提出や使用部屋の換気などを、予防対策として現在も引き続き行っています。また、不特定多数が密になりやすいコンサートやもちつきなどの事業は今年度中止となり、その他の事業の開催時には、定員を通常より制限し、適度に距離を保ちながら参加できるよう工夫して実施しているところです。

そのような中ではありますが、当館では令和2年度に3つの特別展を開催することができました。7月23日～8月16日の会期で開催した「絵本原画にみる横内襄展」では、発刊から60年近く経った今でも読み継がれている代表作『ちいさなねこ』（さく：石井桃子/1963年/福音館書店）をはじめとする絵本や挿絵原画を展示し、市内在住の洋画家・横内襄氏（1934-2016）の絵本作家としての仕事を紹介しました。生き生きとした動植物や昆虫の原画は、大人だけでなく子どもたちにも楽しんでいただき、約1,200人の来場がありました。



10月3日～25日の「清瀬市制施行50周年記念特別展 リマスターアート®でみるオルセー美術館印象派の名画展」では、フランスオルセー美術館所蔵のミレー、モネ、ルノワール、セザンヌ、ゴーギャン、ゴッホなど印象派画家の傑作を、超高精密な画像技術により原画に忠実な色彩で再現した復元画（リマスターアート®）で紹介しました。門外不出の海外の著名な作品が間近で鑑賞できる特別展だったことから、2,200人を超える多くの方に来場いただきました。

11月21日～12月13日の「下宿内山遺跡展—江戸～昭和



の清瀬を掘る—」では、縄文～昭和までの遺構・遺物が見つかった清瀬最大の遺跡「下宿内山遺跡」を紹介しました。清瀬水再生センター建設に伴い、昭和51年から約7年の年月をかけて発掘調査が行われたこの遺跡は、江戸時代以降の農村を考古学的に調査しており、当時としては画期的でした。それから約40年が過ぎ、近世以降を対象とする考古学的研究は目覚ましい発展をとげ、当時、解らなかった部分も解明されつつあります。そこで、本展では新しい考古学知見を踏まえ、下宿内山遺跡から清瀬の歴史を紹介しました。コロナの情勢が再び悪化してきた中での展示でしたが、講演会などの関連イベントも開幕前に定員に達するなど好評を博し、特に親子対象の発掘体験は「また参加したい」との声が多く聞かれました。



どの特別展も関連事業も含め、マスクの着用や手指消毒はもちろん、検温や記帳の協力等を声掛けやサインをお願いして実施しましたが、大きなトラブルもなく、むしろ「長い自粛期間の中で芸術文化に触れることができ良かった」「遠くになかなか行けない中で展覧会が開催されていて嬉しい」など、多くの方に喜んでいただき、「新しい生活様式」に適応した博物館活動を多少なりとも展開することができたと思います。とは言ってもまだ油断のならない状況ですので、引き続き予防対策を行いながら、博物館として何ができるのか？日々模索しながら活動を続けていきたいと思っています。



檜原村郷土資料館の状況と対応

檜原村郷土資料館 清水 達也

この原稿を執筆している12月は新型コロナウイルス感染症の第三波により全国で最多感染者数や重症者数が更新され檜原村でも3人目の感染者が報告されるなど高齢者の多い村では予断を許さない状況です。

檜原村郷土資料館は令和2年2月28日に檜原村教育委員会より3月2日から3月15日まで資料館を含む村内施設の臨時休館が決定したとの連絡があり取り急ぎ告知用張り紙の作成や檜原村HPでの告知などを行った、職員は4月13日までの臨時休館期間中通常通りに出勤し館内の清掃や収蔵品の整理などを行い臨時休館の解除に備えていたが感染者数の増加などにより臨時休館の延長が決定した。

4月13日には檜原村教育委員会より4月15日から再開の日まで檜原村役場と同様に職員同士の接触を極力減らすため2班に分けて出勤することとし、ふたつの班の職員同士は可能な限り接触しないようにとの通達が出され資料館職員のシフトを急ぎよ組みなおした。また檜原村役場も職員に感染者が出た場合に業務が完全に停止してしまう恐れがあった為、資料館を役場の臨時事務所の1つとして役場職員が仕事を資料館事務所で行う可能性があるとの話も出るなどしたが結果的には実施されず資料館では問い合わせの対応や展示品などの整理を引き続き行った。

5月6日には政府より非常事態宣言が5月31日まで延長とのニュースがあり檜原村としても5月31日まで村の公共施設は臨時休館とするとなっていたがその後政府や東京都の発表などにより5月27日に檜原村郷土資料館を再開することが出来た。

資料館を再開するにあたり檜原村教育委員会と資料館とで感染拡大防止対策について協議を行い職員ならびに来館者への対応マニュアルを作成したがこのような状況は初めての経験の為その都度変更を加え現在は以下の通りとなった。

職員は出勤前に検温を行い、来館者の対応をする際にはマスクと手袋を着用、こまめな換気や手を触れる箇所のアルコール消毒などをその都度実施、また職員への感染予防対策として手洗いや手指のアルコール消毒などを各自行うよう指示を出した。

檜原村HPや三博協HPにて入館には事前予約制でマスクの着用や館内の滞在人数を10名で団体予約は当面中止、館内滞在時間を30分間とし入口にて手指の消毒と非接触型体温計にて検温の実施とそれに関する告知を行ったが教育委員会より要望を受けていた完全事前予約制に関しては駐車場や階段前にも予約のお願いとして張り紙や看板を設置していたのだが予約の連絡をいただけず受付まで上がってきってしまうことがあるため教育委員会と相談し予約の方優先で館内人数を越えない範囲で受け入れを行っている。

入館のお断りに関してはマスク着用を拒否される方や検温時に37.5℃を超える場合、館内滞在人数が10名を超える場合などは入館をお断りとし、特に夏に多いBBQや通りすがり

の方などのトイレのみの利用も原則お断りしている。

当初は受付に設置予定の衝立の用意が再開に間に合わずマスクの配布も無かったがフェイスシールドが配布されたのでそれを着用して対応する予定だったがフェイスシールドの下部が開いているタイプだったので小さなお子様や受付時に飛沫がかかる恐れや職員によっては呼吸の際にフェイスシールドが曇ってしまって前が一切見えないなどの問題があった、1週間ほどでアクリル製衝立が用意できたため受付に設置した。

イベントについては開催方法に関しては積極的な開催告知は行わずスペースを広く取るなどの対策を実施していった、まず令和元年度の「檜原村野鳥写真展」は2月3月8日が最終日の予定だったが3月2日から臨時休館となった為2日以降は中止、「夏休み昆虫標本展」は夏休みにあわせて7月19日から開催予定だったが夏休み期間の短縮や感染状況なども含め教育委員会より開始を8月2日からとし8月31日まで開催、「お祭り写真展」については神事やお祭りなどが中止となり見学出来ないことなどから例年通り開催した。

入館者数は全体的には減少したが8月はGWなどの自粛の反動からか登山や川遊び、BBQなどをしに来村される方が多く例年の8月に比べ1.2倍ほどの来館者数となった。



日野市郷土資料館でのコロナ対応

日野市郷土資料館 白川 未来

日野市立の日野市郷土資料館は、旧小学校の校舎を活用した複合施設で、公民館・教育センター・学童クラブとともにあります。このような施設でのコロナ禍中の対応について、経過とピックアップした項目について報告します。

<経過>

1 日野市の対策本部の設置 (2月5日)

日野市では、令和2年2月5日に、日野市新型コロナウイルス感染症対策本部が設置され、その後状況に応じて対策本部の名称や体制を変更してきました(以下「市対策本部」と表記)。国・都・市対策本部の決定を受けて資料館は動いてきました。

2 イベント中止の決定 (2月21日)

市対策本部から、2月18日付「新型コロナウイルス感染症対策について」ではイベント・行事開催時の注意喚起と中止検討等について通知され、続いて2月21日付「市及び関係団体が実施するイベント等に関する取扱いについて(方針)」では年度内のイベントは原則中止もしくは延期が示され、年度内の資料館講座などは、2月21日に中止を決定しました。参加申込者へは、伝達内容の例文を作成し、原則電話連絡しました。

3 ボランティア活動の中止決定 (2月末～)

イベント中止の段階では、郷土資料館としてボランティア活動は、安全対策を講じて実施は「可」でしたが、活動内容やボランティア団体の参加者の意向を踏まえて、それぞれの活動毎に判断しました。その後2月後半から次々と中止を決定し、集まったボランティア活動は中止となりました。各自が自宅で資料を読み込んだり、撮影した写真をメールで送ったりということとなりました。

4 小中学校の臨時休校と施設の臨時休館 (3月)

日野市立の小中学校は3月3日から臨時休校が始まり、延長の末5月31日まで休校となりました。市内施設の利用制限も同様のスケジュールでの休業が基本となりました。郷土資料館は、3月4日～16日臨時休館が決定され、その後延長して5月31日まで臨時休館しました。休館中も職員は出勤していましたが、4月14日～5月31日は、出勤と在宅勤務の交代制となりました。

5 臨時休館の終了と開館の再開 (6月)

5月25日の緊急事態宣言の解除を受け、「感染症対策を踏まえた日野市の公共施設等の再開ガイドライン」が5月26日に定められました。当館でも再開に向けての準備をすすめ、郷土資料館再開ガイドライン、実施にあたってのチェックリストを作成しました。月曜休館の翌日6月2日(火)から開館することとなり、行事の中止や変更はありますが、感染防止対策を講じながら、事業を継続しています。ボランティア活動も6月から会合を再開するようになりました。

<項目別報告>

1 感染症対策 清掃

来館者に対しては、マスク着用、手指消毒などの協力を願いを掲示しています。ドアなど手に触る場所は、次亜塩素酸ナトリ

ウムを希釈して拭き掃除をしています。廊下側のドアは常時開け、メインの企画展示室は室内に扇風機を回しています。通常の来館者数では密になることはありません。

2 博物館実習

大学の授業開始が遅れていたため締切りをのばし、メール受付として人の動きを最小にしました。実施要項に中止の可能性がある旨記載し、体調管理など事前の安全対策について注意事項に加えました。実習期間の8月は当館と実施会場の公民館は開館中で、近隣在住学生のため来館途中の感染リスクも低く、実施しました。

3 小中学校の対応

秋季に集中する3年生の団体見学は、昨年度並みの数の学校から相談がありました。展示室と体育館に分散して見学するための時間が必要となります。大人数の学校から辞退が1校ありました。また例年ならグループ活動で外に出向いて行う中学校の地域調べ学習を、館職員や地域講師を学校に招いて実施するなど学校側もやり方を変更して対応していました。例年実施している農具などの体験は控えることにしました。

4 複合施設の課題

同じ建物の公民館と資料館は同時期に臨時休館となりました。学校見学の際には、公民館の一般利用者がいるエリアになるべく立ち入らないような導線を設定しました。来館者は世代も様々で、危機意識にも差があります。

5 講座などの実施と動画発信などの取り組み

令和2年度に入っても、予定していた講座を軒並み中止・変更してきました。当初のイベント予定を、パネル展「豊田・多摩平の100年」として開催し、藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日の講演会はWEB配信しました。またパネル展示に関連した動画をHPで公開し、展示終了後もYouTubeで見られるようにしました(「東京オリンピックのレガシー」、「戦争体験を語り継ぐ」)。特別展「みんなのひの宝モノ語り展」では、QRコードで解説をつけました。



手探り・予算無しではありますが、今年度は、新たな発信方法に取り組む機会となりました。

博物館の仕事は、ともすれば「不要不急」扱われてしまう事業ですが、学びや文化を止めないために何ができるのか、感染防止策を怠らずに、今後も取り組んでいく必要があります。

新型コロナウイルス感染拡大による休館から活動再開まで

多摩六都科学館 原 朋子

年度末の休館から緊急事態宣言を経て活動再開まで

当館は令和2年2月29日から6月1日(定休日含む)の間、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため休館しました。その期間、スタッフも問い合わせ対応等最小限の人数のみ出勤とし、あとは基本在宅勤務となりました。たまたま年末に指定管理者側で社内情報のクラウド化とスタッフの作業環境のノートPCへの移行が済んでいたため、在宅勤務でも大半の業務が継続でき、スタッフ間でもチャットで打ち合わせができる環境があったのが幸いしました。

休館中は「おうちでロクトを楽しもう!」と題した特設ウェブページを立ち上げ、展示物の解説動画やスマホを使った天文写真の撮り方、スタッフによるおすすめ科学の本の紹介など様々なコンテンツを発信しました。これは家にいながら科学館のコンテンツを楽しめるようにという思いと同時に、休館によって科学館が忘れられないように、という意図もありました。

休館は経営的にはデメリットが大きかったですが、一方でウェブコンテンツの製作や所蔵資料の登録作業など、開館している状態ではなかなか腰を据えて取り組めなかったことに時間を割くことができ、改めて地域博物館として持つべき機能や発信について考えさせられる機会となりました。

5月25日の緊急事態宣言の解除を受けて開館に向けての準備を始め、6月2日から活動再開しました。とはいえ、感染対策を考慮すると定員やプログラムの開催数などが閉館前と同じままというわけにはいかず、試行錯誤しながらの開館となりました。

入館者数のコントロール

当館は事前予約システムの導入はせず、代わりに館内の面積や換気能力を元に館内滞留者の上限を400名と定め、来館者数がその数に達すると新規の入館を制限するという措置を取りました。実際に入館制限をかけたのは夏休みと9月の連休に数日あった程度で、しばらく待てば入館できる程度でした。

館内の滞留者の状況は科学館ホームページのトップページで随時新しい数値を公表し、来館の判断目安にさせていただけるようにしました。混雑程度の把握とコントロールがされていることは、利用者にも好意的に受け入れられていました。

プラネタリウムの実施状況

プラネタリウムドームの定員は234名ですが、活動再開時は映画館等の運用を参考にしながら、従来の約1/4の定員でスタートしました。その後ドームの換気時間や席間の距離などから検討し、現在は利用可能な席を市松状に配置して定員の約半分で運用しています。定員が減ったことで満席に達するのが早くなったため、利用者からのプラネタリウムを予約制にしたいという声は聞かれました。

上投影の終了後には、毎回座席のひじ掛けとドーム内の手すりのアルコール消毒作業にあたっています。天文担当スタッフだけでは手が足りないため、他の部門のスタッフ7~8名も協力しての作業(10分弱)ですが、この頻度での作業はスタ

フ数が多い当館だからできていることだと思います。

展示室の状況

活動再開にあたって体験型の展示物が多い当館では、来館者が密になりやすい・手で触れる頻度が高いといった感染リスクの高い要素を洗い出して休止展示物を決め、それ以外のものについては1日に2~5回の消毒作業を行うことで利用できるようにしました。始めてみたらアルコール消毒によってアクリルケースにヒビが入るといったトラブルが発生し、試行錯誤の末、現在では来館者の触れる頻度の高いアクリルケースや解説板にはビニールシートをかぶせてその上からアルコールで消毒、標本ケースなど触れる頻度の低いものは閉館後に薄めた専用の界面活性剤で拭きとりをする、という対応をしています。

滞留者の総数がコントロールされているとはいえ、時間帯によって一部の展示室に人が集中してしまうことがあり、来館者の分散が課題として残されています。

プログラム実施の状況

当館では展示室内の小スペース(ラボ)と実験室で体験プログラムを、80名程度収容できるイベントホールで企画展示を行っています。それぞれ再開にあたって定員の設定について何度も議論しました。というのも利用者どうしの距離を基準にするか、部屋の換気量を基準にするかで定員数が大きく異なるためです。最終的には部屋の換気量に基づく定員を最大値として、プログラム毎に利用者同士の距離を考慮した人数を設けるというところに着きました。ただし、飛沫の広がりや人が密集しやすいことを考慮してオープンスペースでの開催はすべて見合わせ、企画展も開放型にはせず、時間で入場者を区切る形で行いました。実施時には机にアクリルパーテーションを置き、スタッフ・参加者ともマスク着用は必須の条件で行っています。

オンライン型の講座は活動再開後も継続して行っています。大人向けの講座はオンライン形式にすることで遠方に住んでいたたり、高齢で外出を控えていたりといった方が参加しやすくなって好評でしたし、親子向けのオンライン配信のために開発した実験ショーも人気でした。オンラインプログラムのメリットとして、今まで科学館にくることが難しかった人たちにもコンテンツが届けられることがわかったので、今後も対面型と並行して取り組んでいきたいと考えています。

これからの課題

新型コロナウイルスの感染拡大防止という制約のもと、徐々に活動範囲が広がっては来ていますが、未だ止まったままなのがボランティアの活動です。当館では約150名のボランティア(内約40名が小5~高校生のジュニアボランティア)を擁していますが、多くは重症化リスクが高いと言われる高齢者なため、従来行っていた来館者と対面でコミュニケーションをとる活動は休止しています。科学館での活動が生活のハリになっているという方も多いので、何とか安全と両立できた活動の仕方を考えていきたいです。

東京農工大学科学博物館のコロナ禍対応

東京農工大学科学博物館 齊藤 有里加

1. 現在も臨時閉館が続く農工大学科学博物館

東京農工大学科学博物館は、2020年3月7日から臨時閉館を続けています。企画展、イベント等は本年度実施していません。新入生にむけた予約開館を10月～12月まで実施しました。大学博物館が容易に開館できない理由の一つに「キャンパス内立地」が挙げられます。「学外の方と学生が接触するリスク」は大学博物館国際委員会のUMACでも話題に上がり、一般の博物館とは異なる悩ましい問題です。早く皆様をお迎えできる状況になりますよう、コロナウィルス禍の好転を心より願っています。

これまでの経過

2020年3月7日 臨時閉館開始

5月 非常事態宣言下

- ・3 支援組織協力による SNS の発信
- ・葵町製糸場 3D 動画公開

6月～7月

- ・前期学芸員実習（対面・オンライン）

8月

- ・360度博物館ビュー
- ・学芸員課程夏季集中講義（オンライン）

10月

- ・蚕織錦絵コレクション 400点 IIF 化・ジャパンサーチ接続
- ・新入生限定 WELCOME TO CAMPUS PROGRAM（12月未終了）
- ・後期学芸員実習（対面・オンライン）

3月

- ・オンライン企画展実施予定

2020年3月末まで臨時閉館継続予定（再開未定）

2. 最もコロナ禍の影響を受けた「三支援組織活動」

休館が継続したため、当館の特徴と呼べる機械の動態展示、手仕事のワークショップ、サイエンスコミュニケーションでは、担い手のエンジニア・市民・学生が博物館に集うことが難しい状況が続いています。博物館友の会は今年40周年記念でした。残念な年となった一方、繊維技術研究会では、オンライン化が進み、Zoomでの定例会を試みています。また、オンライン授業で大変だった学生たちとも今年の混乱を乗り越え、新しい体制で何ができるか？と話を進めているところです。コミュニティの維持に注力し、当館の大切な部分をいかに再興していくかをにらみつつ、新生科学博物館としての復活を目指しています。

3. 博物館のデジタル化への注力

閉館中の対応として、当館では展示室のデジタル化、資料のウェブ公開に努めました。蚕織錦絵コレクションをジャパンサーチと連動させるなど、情報公開において大きく進歩しました。（詳細はHPからご覧ください）

① SNS での情報発信

② 東京農工大学科学博物館 360°ビュー

③ 「蚕織錦絵コレクションの IIF 規格でのウェブ公開」

4. 大学博物館による新入生の応援

今年は入学式も実施されず、大学博物館ができることとして、10月に初めて登校する新入生へ予約入館の「WELCOME TO CAMPUS PROGRAM」を実施しました。

① 支援組織 musset によるパネルでの一言解説

② サークル活動のポスター・映像

③ 学芸員実習の成果

④ 一人でも動かせる組みひも機の体験コーナー

5. オンライン対応となった学芸員課程

当館で担当している学芸員課程では、通年での博物館実習と集中講義の双方ともオンラインを取り入れた内容となりました。大学に登校したことのない1年生たちとの遠隔講義は初めての経験でした。対面実習では「デジタルアーカイブ」をテーマにジャパンサーチのワーク機能を使ったギャラリー制作、inaturalistでのアプリ植物探索など、ICT活用の技術を中心に実施しました。オンライン対応の中、まさにリアル（モノ）の重要性を実感しながらの実習となりました。

6. 最後に

今年は大学の状況が大きく変化し、新しい対応に挑戦する1年となりました。高精細での錦絵公開など、デジタル公開に関して大きく進み、また遠隔交流など新たな視座も生まれました。新しく活用できる面を活かし、博物館をより良い形にして行きたいと思います。



写真1 支援組織とのオンライン情報交換



写真2 360度画像による博物館ビュー



写真3 新入生応援企画

コロナ禍の府中市郷土の森博物館とその対応

府中市郷土の森博物館 佐藤 智敬

コロナ対応に伴う臨時休館 都内の感染者も増加し、感染拡大が危惧された2020年はじめ、府中市郷土の森博物館は、1年間のなかでもっとも集客が見込まれる「郷土の森梅まつり」の期間中(2月初旬～3月初旬)であった。不要不急の外出自粛、全国各地のイベントの中止(自粛)が進んでいく中で、博物館も対応をせまられることになった。2月22日からは、体験学習等のイベントを中止。29日からはプラネタリウムの投映を休止した。しかしながら敷地内の梅はまさに見ごろを迎え、3月1日日曜日(晴)の園内は3,000人を超える来場者があった。

都内の各施設の自粛が顕著となり、東京国立博物館等が国の要請で臨時休館をするにおよび、ついに3月3日から郷土の森博物館も全面的に臨時休館することになった。それまで博物館のHP上で設定されていながら使用することはなかった緊急告知(トップページに一定時間緊急告知が表示される)が初めて使用され、府中市のHPでも臨時休館が大きく告知された。

休館は当初3月15日までの予定だったが、都内の感染者数は増加傾向で、13日には3月中の休館が、31日にはさらなる休館延長(当面の間と表記)が決定。4月7日に国から東京都に緊急事態宣言が出、16日には全国に宣言が拡大され、休館はさらに延長された。

4月18日には国内の感染者は10,000人を超えた。府中市内での感染者も徐々に増え、25日時点で45人と、多摩地域で最も多くなっていた。そして同日、市独自の施策として、市立の多くの施設は5月末日まで臨時休館することが決定した。

再開館と感染予防対策 5月25日に緊急事態宣言が解除され、東京都や府中市の指針をもとに博物館独自の対策マニュアルを策定した後、再開館したのは6月2日のことだった。当初は消毒等対応に不慣れであったこともあり、復元建物や無料休憩所等、一部の施設を開放しない形であったが、状況にあわせて徐々に開放していった。再開時は正門前にブースを設け、入場に際しての検温、万一感染者が出た場合に情報を収集するための来場者カードの記入を呼びかけた。その後検温やカード記入は本館建物内入場時のみ→常設展示室とプラネタリウム、体験学習等参加時のみと、規模を縮小しているが12月現在も継続中である。また、文部科学省からの補助金を活用し飛沫防止のためのアクリル板、体温計、サーキュレーター等必要な設備をそろえた。これらも当初は品薄で、発注から入手までに1か月以上かかるものもあった。5月中は再開館に向けて、こうした対策機器の入手や設営方法の検討に多くの時間を費したといっただろう。常設展示室や特別展示室等が万一密状態になった場合には人数制限を実施することを予告もしたが、そこまで密になることもなく、令和2年内にはその実績はない。

6月12日からは約200人が収容可能なプラネタリウムを定員35人で投映再開。規制の緩和と消毒等のサイクル確立により、7月7日には定員を70人に、10月3日以降は100人にまで回復させている。

各種イベントの再開 6月は、従来であれば郷土の森あじさいま

つりをはじめ、さまざまなイベントを実施し集客をはかる時期であったが、それらはすべて中止となった。例年なら年間を通じて行う古文書講座やこめっこクラブ(米作り体験)等の事業は延期、あるいは実施回数を減らすこととなった。講座や体験学習等が開始されたのは7月7日以降であった。

夏休み期間に予定していた自然分野の特別展は、ハンズオンを伴い子供たちを中心に多くの方々に密集してもらうことを意図したような展示会だったのだが、密回避が命題となったことにより規模を縮小。写真を中心とし密になりにくい展示会へと変更した。

臨時休館中に開始する予定だった企画展は、会場自体は完成していたため、エッセンスをPDF化し、web上で事前公開し、再開館後会期を延長した。その結果として、予定していた企画展の一つは会期が確保できなくなったことから開催を取りやめた。講座や体験学習等の参加型事業に関しては定員を削減、一回ごとの消毒、間隔をあけた参加スタイルをそれぞれ確立していった。ふるさと体験館では感染防止対策として換気のためそれまで設置されていなかった網戸を体験スペースのサッシに取り付けるとともに、消毒液等の除菌グッズや換気用大型扇風機を複数導入した。事業再開にあたっては、検温、参加者カードの記入を徹底することはもちろん、スタッフやボランティアメンバー等の意向を確認の上、事業規模を縮小する形で実施することとなった。

今後の課題 残念ながら現状では100%安全な対策をとれるようにはなっていない。そのため、感染リスクをある程度理解していただき、できうる限りの対策をとることはもちろん、万一感染者が確認された際に万全の対応をとる体制を継続している。再開館以降、徐々に来場者数は戻り、10月頃からは昨年度を上回る日もある。プラネタリウムや体験学習についても好調だ。また、コロナ禍のため他所で遠足の受け入れを断られ博物館にはじめて来るとい学校団体の相談もあり、全体として来場者、参加者は例年並みかそれ以上に増えつつある。こうした状況のなかでも博物館の施設や企画に何かしらの期待をもって下さる方がおり、リスクを承知で訪れてくださっているとらえ、ありがたく思っている。しかしながら来場者が増えることは、対応策を強化せねばならないということも意味している。コストを増やし対策をした半面、定員を減らし収入は減り、密を回避するためには来場者が多すぎても危険を伴うというジレンマを抱えながらの運営をしなくてはならない。

それだけではない。さわれる地形模型や古文書筆写コーナー等のハンズオン設備、旅装束を着たりむかしの道具にさわったりする体験スペース等、博物館の多くの「売り」について、感染防止の観点から活用再開のめどがたっていない。既存のものは2022年4月まで本館改修工事のためそもそも大半が利用できないが、その代替を構築することも困難な状況である。

このように博物館の抱える課題は多岐にわたる。しばらくはこの状況のなかで、どのようなことが可能なのかを考えながら対応し続けることになりそうである。

休館と新型コロナウイルス

パルテノン多摩 橋場 万里子・仙仁 径

パルテノン多摩は、令和2年4月1日より令和4年3月まで大規模改修のための休館に入った。休館直前頃から、新型コロナウイルスの影響により、講座や展示の中止や短縮が相次ぐ事態となっていた。また、年度後半に予定していた休館中の事業も、当初の形を変更して行うことになった。しかし、こうした事態はWEBの活用やオンラインの導入など、さまざまな試みを行う契機にもなった。ここではそれらの試みの内容を紹介したい。

WEB 展覧会・テレビ番組制作・大学の授業への出演

特別展「パルテノン多摩」は会期が4日間となってしまったが、その会場写真をSNSに上げてWEB展覧会を実施した。4月以降は大学によるオンライン授業への協力をおこない、動画がWEB公開された。そのほか、地元ケーブルTVとの番組の制作や、地元書店への展示開催などを実施するなど、多様な場所での成果の発信をすることができた。当館はリニューアル後に「地域まるごと博物館」を構想しており、WEBを含めた多様な場所で、他機関と連携した事業開催はその足掛かりになるものとなった。

新たな可能性を拓いた講座事業のオンライン併用開催

休館中の10月から予定していた「古文書講座」と「市民学芸員養成講座」ではオンライン併用講座として実施した。もとも「古文書講座」は公民館を会場としており、例年より大幅に席数が少なくなることから、コロナ終息如何にかかわらずオンラインとの併用を行い、受講者数を確保する予定でいた。また、「市民学芸員養成講座」は、博物館リニューアルに直結する内容で時期を遅らすことができないことから、こちらも感染拡大に関係なく実施できるオンライン併用の講座を検討していた。

「古文書講座」は会場でモバイルWi-Fiを経由してMicrosoft Teamsを用いてオンライン受講者に配信した。申込者にはURLを送り、事前に接続テストをおこなった上で、参加費を振り込んでいただき、テキストを郵送した。また、当日接続が悪かった方のため、録画した動画を後から期間限定で配信することも決めた。講座では、「画面共有」という機能を用いてパワーポイントの画面を共有し、先生の解説に合わせて文字に丸をつけながらすすめた。その結果、過去の大規模会場での受講よりも見やすく、理解しやすいという感想が寄せられた。一方、板書を多用する場面では、カメラの切り替えや解像度に不満を持たれた方もいた。解像度は一眼レフをWEBカメラにしたことで解消したが、電波状況が良くない会場では配信画面が粗く見にくい状態になってしまうこともあった。URLを記したメールが迷惑メールと認識され届きにくいことなど、いくつかの課題はあったものの、全般的に古文書講座のオンライン併用は評価され、アンケートでは約9割の方から、コロナ終息後もオンラインを続けてほしいという感想をいただくことができた。

「市民学芸員養成講座」は初回に全員がオンライン参加で自己紹介などをおこない、2回目以降は会場に来られない方がオ

ンライン参加となった。その後、新型コロナウイルスの感染拡大が進み始めると、会場参加人数を減らすため、オンライン参加希望者を募り、毎回6～10名程がオンライン参加となった。マイク・スピーカーなどの設備的な課題も残るが、10月から12月までの予定回はすべて開催することができ、先の読めない中、新型コロナの影響を受けない形で講座を実施する方法としてオンラインの活用は有効と思われた。また、多忙な方や妊婦の方などが遠方から参加するための選択肢としてもオンラインは有効であり、今後も適宜活用できそうな手ごたえが得られた。

自然系事業における新型コロナ対策

当館では自然系事業として、植物観察会（みんなの植物観察会、植物観察会ステップアップコース）、植物標本整理ボランティアを実施してきた。植物観察会、植物標本整理ボランティアとも休館中も実施する予定でいたが、新型コロナウイルスの影響により3月の植物観察会は延期に、ボランティア活動も中止になった。そして延期・中止は令和2年8月まで継続した。

植物観察会は、「みんなの植物観察会」が9月から、「植物観察会ステップアップコース」は10月から再開した。8月に「みんなの植物観察会」を共同で開催している多摩市植物友の会幹事らと話し合い、新型コロナ対策を行った上で9月からの再開を決めた。対策としては、①定員制の導入(40人)、②小グループでの観察(8人程度)、③事前申込制の導入、④消毒と検温、⑤マスク着用、⑥開催時間の変更(10時～12時、昼食なし)、といったことを行っている。定員制事前申込制導入により、希望者全員が気軽に参加できなくなり、利便性が下がってしまった。一方、参加者と事前連絡を取れることから、中止などの告知が確実にできるようになった。また、講師とサブリーダー合わせて10数名で運営していたことから、小グループ対応も問題なくできた。

「植物観察会ステップアップコース」については、8月に講師と話し合ったが、講師1人に対して65人の受講生がいることから小グループ化は困難なため、現地で集まって植物を講師の解説のもと観察することはできないと判断した。そこで受講生が一人で観察できるよう詳細な観察マップと植物の解説を作成し、講師による解説動画を作成した。また、観察した際の疑問などについては随時メールで受け付け、講師が回答するようにした。受講生からは、各自で都合のいい日に観察でき、質問も気軽にできることについてなど、好意的な意見が寄せられた。

植物標本整理ボランティアについてはいまだに実施できずにいる。新型コロナウイルス感染症に対して高リスクのメンバーが複数いらっしゃるのが一番の理由である。

新型コロナ対策としては、通常よりも手間がかかるものの、解説動画などは参加者からの評判もよく、今後の運営に活かしたいと考えている。対策を考えるのも実施するのも大変ではあったが、危機をチャンスとしていけたらと思う。

コロナ禍と東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター 武笠 多恵子

令和元年末に発生した新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナと略）は、1年が経過した今でも依然として猛威を振るっています。この原稿を執筆している12月現在も、国内感染第3波の只中にあり、先の見通せない状況が続いています。

6月の再開館以降、東京都埋蔵文化財センターでは、東京都および（公財）日本博物館協会のガイドラインに基づき、感染防止対策を講じながら施設運営を行ってきました。本稿ではその概要をご紹介します。

対応の経過

新型コロナに関わる当センターの対応経過は以下のとおりです。

- 2月29日～ 臨時休館
- 6月1日～ 再開館（人数制限あり）
- 7月1日～ 学校見学・体験コーナー・遺跡庭園復元住居内部見学再開
- 8月～ 一般団体見学・イベント・講演会再開
- 9月1日～ 入館人数緩和
- 10月1日～ 入館・復元住居内部見学人数制限撤廃、講演会人数制限緩和
- 12月1日～ 図書コーナー利用再開
- 12月28日～ 臨時休館（令和3年1月11日まで（予定））

※再開していないもの：出土品を触る展示、縄文服を着る体験、ドングリを割る体験、火おこしマイスター、ギャラリートーク、ビデオ鑑賞コーナー、体験を中心とするその他イベント等

再開館後の取り組み

一般見学 3月20日にオープンを予定していた令和2年度企画展示「リケイ考古学」は、6月の再開館まで公開延期となりました。来館者には入館時のマスク着用、非接触型体温計による検温、アルコール消毒にご協力いただくとともに、掲示物等により館内でのソーシャルディスタンスの確保を呼び掛けました。6月時点では展示室や遺跡庭園の屋外部などオープンスペースのみの公開でしたが、人数制限等を設けた上で7月から体験コーナーや復元住居内部の見学も再開しました。体験コーナーは1ブースにつき1名の利用とし、ブース間に仕切りを設け、各ブースに消毒液を設置して都度の手指消毒をお願いしました。入館人数については、再開館当初は45名に制限、9月には52名に緩和し、10月以降は制限を撤廃して現在に至ります。



ソーシャルディスタンス縄文人マネキン

学校見学 当センターでは、例年、4・5月にかけて社会科見学の一環として周辺地域の80～90校、6,000人に上る小学校6年生が来館します。新型コロナの影響により、今年度は

その多くが中止となってしまいましたが、7月以降、人数や案内方法を工夫することで、徒歩圏内にある近隣小学校を中心に学校見学の受け入れを行いました。見学の対策として、1回の受け入れ人数を制限し、さらに小グループに分割して案内することで、子供たち同士や他の来館者との物理的距離を適度に保つことを心掛けました。また、学芸員は小型の拡声器を用いた案内を行い飛沫防止に努めました。

イベント 当センターの大きな特色である原始・古代のものづくりや考古学にまつわるイベントは、職員が対面で丁寧に指導しながら行うため、「三密」の回避が難しく、大半が中止を余儀なくされました。ただし8月以降、実施方法の検討により、カラムシやアカソの茎を叩いて繊維をとり出す体験、火おこし道具（舞錐）を組み立てて火をおこす体験、企画展示に関連して縄文土器の圧痕から種子のレプリカを作るワークショップ、考古学の基本技術（土器の作図・拓本）を学ぶ講座等を実施しました。上記のイベントでは、参加者数の制限に加え、講師の実演風景を写したビデオカメラ映像を随時スクリーンに投影し、対面での指導に代わってリモートでの解説を行いました。



「リケイ考古学」ワークショップでのリモート指導

講演会・映像上映会

これまで自由参加、定員100名の先着順としていた講演会・映像上映会ですが、今年度は事前申込制、人数制限を設けた形での開催としました。会場内のレイアウトを変更したうえで、8月より定員を30名に制限して再開、10月には70名に制限を緩和して現在に至っています。企画展示にちなんだ考古学の最前線をテーマにした講演会や、地域史や民俗文化に関する映像の上映会を実施しています。

Webの活用 当センターでは、ホームページでの情報提供を中心に、速報性の高い情報の配信ツールとしてTwitterを活用しています。ホームページは体験イベントの申込にも利用しており、事前申込制となった今年度の講演会・上映会でもスムーズに受付を行うことができました。Twitterでは、開館状況やイベント告知に加え、休館期間中より「庭園だより」として遺跡庭園の動植物の様子を定期的に配信しています。また、新たにYouTubeチャンネル「東京都埋蔵文化財センターチャンネル」を開設し、中止となったイベントの代替として、人気の高い火おこし体験や勾玉作りの動画を配信しています。Webを用いた情報発信は、質・量ともにこれからの課題です。今後、より一層充実したご案内ができるよう、日々検討を重ねるところです。

新たなミュージアムの運営

奥多摩水と緑のふれあい館 神山 正明

2020、初めて耳にした「新型コロナウイルス」、この後これほど世界を脅かすように大きな災害に発展するとは、発生当初はだれもが想像もつかなかったでしょう。

クルーズ船での感染の情報が報道されると、まもなく緊急事態宣言が発令され、ようやく沈静化するかと思いきや第2波が発生し、東京以外の都市部でも集団感染が聞かれるようになり、現在第3波ともいえる被害が連日報道され、日増しに感染者数が増加する中、紅葉のこの時期奥多摩町に訪れる観光のお客様はピークに達します。



水と緑のふれあい館は紅葉の美しい奥多摩湖畔にあるため、週末には一日に3000人近いお客様がお見えになり、これまで行ったことのない、入館制限をお願いすること

もしばしばで、多くのお方がお見えになり嬉しい反面、ここでのクラスターの発生がないよう、ひやひやする日々を送ってまいりました。本来ミュージアムは時間をかけゆっくりと楽しんでいただきたい場ですが、「お客様どうしの間隔を保ちながら長時間立ち止まらずにお進みください」とのアナウンスも今では慣れてしまいました。小さなお子様向けのコーナーでは見て触れてをコンセプトに設けた展示場は、すべて閉鎖するなど、ミュージアム本来の目的を達成できない状況が続いております。また、館内での直接の説明は控えさせていただきなど、いままで普通に行ってきた事も現在控えるなど、サービス面における低下も著しく申し訳なく感じております。

これまでどこのミュージアムでも、その個性を生かし、多くの来館者を募ろうとそれぞれ工夫を凝らし、PR等を行ってまいりましたが、現在各種イベント情報に、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため・・・とのアナウンスや標記など、もはや当たり前になるとは、思いもしなかったことでしょう。手指の消毒、検温、三密回避、コロナ禍、などと言った言葉は当たり前のように毎日聞きなれておりますが、ウイルスによる感染拡大の防止を進めるうえで大変重要であると諦めずに発信するなど、地球上の全ての国で一斉に取り組むほどの脅威を誰が想像できたでしょうか。

ふたたび緊急事態宣言等が発令され長期化すると、人々の集中を避けるため働く人は、離れた場所で柔軟な行動を要求されることになり、テレワークや在宅勤務、電車、バス、飛行機、カフェ、ラウンジなどでのモバイルワーク、シェアオフィス、サテライトオフィス、モバイルワークオフィス、コワーキングスペース、レンタルオフィス、などでのサードプレイスオフィス勤務などこれまでとは違った働き方が要求されることでしょう。また多くの子供たちの行動や活動にも制限が加わり、県をまたぐ移動の自粛、夜間の外出の自粛等不要不急の外出の自粛など、感染防止に向けた様々な制約も二度目三度目となると、精神的にもダメージを生じることとなり、こんな時こそまさに

博物館、美術館の出番ではないでしょうか。仕事や学びのスタイルは変化しても、日常見て感じることでできない宝物が数多く展示され、訪れる方を癒します。

本物の作品や文化に触れ感じることでできる博物館・美術館の役割などリモートでは味わうことのできない貴重な体験をしていただくために、そもそもそこに行くこと自体に制限がされる場合において、どのように安全に来館いただくか、提供できるか、それぞれの館の持ち味や利点を生かした展開が求められることと思います。

自身が感染しない、させないは基より、違和感なくお互いの安全が保たれるような様々な配慮や工夫を施し、基本的な安全を担保する消毒設備の設置や、非接触型自動検温設備などの導入等物質的な設備の導入に加え、人と人との交差を避ける順路等、これまで以上に自然に危険を回避できる人と人との動線の確保やレイアウトの見直しを行うなど、これまでになかった視点での各種調整による配慮で安心安全にミュージアムを楽しむことができるのではないのでしょうか。触れることができない



国指定無形民俗文化財
「小河内の鹿島踊り」

なら視覚で補う、見ることが出来ないなら聴覚で補う、行くことが出来ないなら情報の配信で補うなど、これまでになかった新しい視点の取り組みがこれからのミュージアムに求められるのではないのでしょうか。

新しいタイプやスタイルで楽しむことのできるミュージアムの発展について、わたくしたちの持つこのネットワークがこれまで以上に発展した力を発揮できたらと願います。

奥多摩水と緑のふれあい館には、縄文時代の出土品始め、武家文書、や小河内ダム建設により湖底に沈むこととなった旧小河内村に伝わる国指定の民俗文化財を主に展示しており、中でも、小河内村に古く伝わる国の指定を受ける小河内の鹿島踊りを始め東京都指定を受ける無形民俗文化財である郷土芸能の展示に力を入れており、実際に祭事で使用される道具や、衣装の展示に加え、画像による紹介も行っております。

皆様の博物館・美術館でも歴史文化や地域の魅力など、数多くの情報が発信されていると思います。

今この時がまさにそれぞれのミュージアムにとって共通の運営に対する転換の時期が来たのではと感じております。

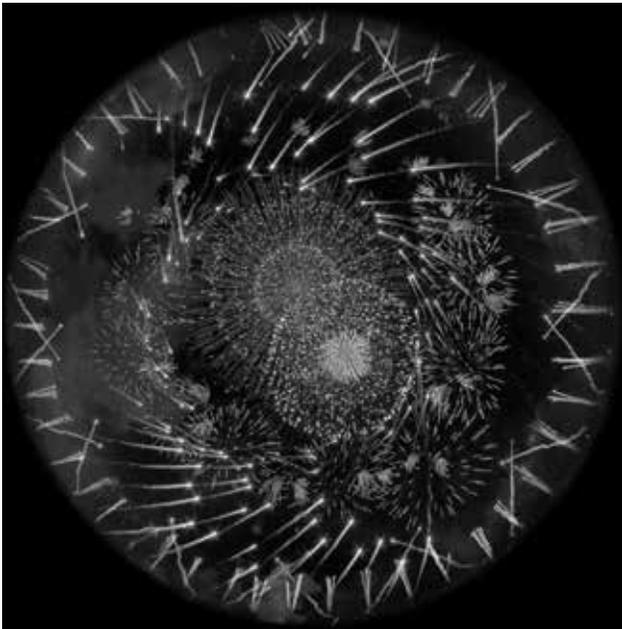
新型コロナウイルス感染症の撲滅はまだ少し時間を要することと思いますが、様々な工夫を通じて上手に乗り切り、来る時代に向けた新しい取り組みにこの集いが力を発揮できるよう皆さんで協力して新しいミュージアムづくりに関わって参りたいと思います。



奥多摩町イメージキャラクター（わさびー）

コロナとハナビと博物館

東大和市立郷土博物館 坂本 卓也



©丸玉屋

「本日のプラネタリウム ハナビリウムのチケットは完売しました。申し訳ありません」

駐車場のホワイトボードに、この夏、何度この文字を書いたでしょう。新型コロナウイルスの影響で、各地の花火大会が中止になりました。当館では、たまたまプラネタリウムで「ハナビリウム」という花火を扱ったおはなしを提供していたため、たくさんの方が来館されました。

心配したのは、プラネタリウムがクラスターの発生源になってしまうこと。非常事態宣言は解除されましたが、依然としてコロナの感染は続いていました。「お客さんが感染したらどうしよう」「わたしたちスタッフがコロナにかかったらどうしよう」という不安を持ちながらの投影でした。

東大和市立郷土博物館では新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、次のとおり対策を行いました。

- *臨時休館 令和2年3月5日～5月27日（プラネタリウムは6月2日から投影再開）
 - *入り口でのアルコール消毒やマスク着用をお願い
 - *窓を開けた館内の換気
 - *ハンズオン展示の撤去・縮小
 - *窓口への透明アクリル板の設置
 - *消毒用アルコールとハンドソープの各所への設置
 - *プラネタリウム投影後の座席のアルコール消毒と換気
 - *プラネタリウムの座席の調整（定員を半分に減らし、家族以外がとなりに座らないよう調整）
 - *休憩コーナーの座席を一部撤去
 - *清掃員の方へドアノブ、蛇口などの消毒作業をお願い
 - *職員用コロナ対策チェックシートの掲示（出勤前の体温測定、共用タオルの使用禁止、消毒用アルコールの設置等）
- こうした中、「ハナビリウム」人気に火をつけたのは、マス

コミの力でした。特に反響の大きかったのは報道ステーション（テレビ朝日）と朝日新聞です。駐車場は満車。プラネタリウムも席数を半分にしていたことありますが、連日売り切れ。臨時に投影回数を増やす日が続きました。

プラネタリウムは一般投影だけでなく、学習投影も例年どおりとはいきません。今までは学年すべての児童がいっしょに見ていたのですが、クラスごとに分けて複数回投影するようになりました。その間、ほかのクラスは別メニュー。博物館ならではの学習を行いました。

もともと当館は学校教育と連携した学習が特徴の一つでした。さまざまな自然観察・体験、天体望遠鏡を学校に持って行つての天体の観測、昔の道具調べや平和学習（戦災建造物の見学等）…。全て合わせると、年間100件程になります。これにプラネタリウムでの学習投影が30件以上ありますから、平日の開館日はほぼ毎日学校が来ているか、あるいは職員が学校にでかけているかになります。

こうした学校対応にもコロナの影響はありました。7月から授業対応が復活しました。しかし、今まで2学年合同で行っていた生活科の授業を別々に行い、草笛のように飛沫が飛ぶような体験はなし、みんなで手をつなぐネイチャーゲームも見合わせました。そんな状況でも子どもたちは、楽しみながら活動してくれます。それでも、元のような学習ができる日が来るのを願わずにはられません。

一方、講座や観察会でも、コロナ対策を行いました。失敗だったのは、非接触型体温計が野外でうまく作動しなかったこと。旧日立航空機株式会社変電所や旧吉岡家住宅の公開時に使おうと思ったのですが、とんでもない体温が表示されてしまうのです。

講演会では定員を厳しく設定し、講演のようすをロビーのモニターで写し、会場に入れなかった方にもご覧いただきました。ただし、音声の聞き取りが難しいなど課題を残しました。

星空観察会では、こんな道具を参加者の方に配りました。それは底に穴をあけた紙コップです。参加者の方はその穴から天体望遠鏡をのぞきます。これで、望遠鏡に大勢の方がさわることなく観測できるというわけです。

野鳥観察会ではそういうわけにはいきません。紙コップをあてている間に、鳥が逃げてしまいます。望遠鏡にアダプターをつけるとスマートフォンが取り付けられます。これで、複数の方がスマートフォンの画面に映った鳥を一度に見ることができます。でも、これだとなんだかテレビを見ているようでした。やはり、レンズをのぞいて観察する方がリアルな感じがします。

文化財めぐりのように開催を断念した催しもありますが、なるべくできる範囲で館の運営を行ってきました。新たな運営方法の確定には至りませんでした。試行錯誤を続け、来館者の皆さまの知的好奇心を刺激する活動ができたらと考えています。

集合住宅歴史館の休館・再開と感染防止の取り組み

集合住宅歴史館（UR都市機構）増重 雄治

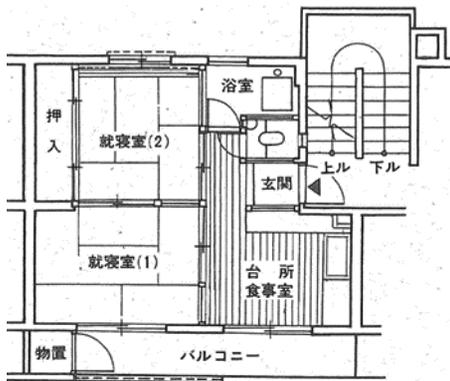
UR都市機構の運営する「集合住宅歴史館」（八王子市石川町・旧技術研究所内）は、関東大震災復興のため建設された「同潤会代官山アパート」や、戦後の住宅不足解消のため建設された「公団住宅」の昭和30年代団地の住戸を移築復元し、実際に再現住戸の中に入ってご見学いただけるのが特徴となっています。

（展示内容 同潤会アパート：代官山単身住戸・世帯住戸

公団住宅：蓮根団地2DK、多摩平団地テラスハウス、晴海団地高層アパート廊下階住戸・非廊下階住戸 計4地区・6間取り）



同潤会 代官山アパート 単身向け住戸 室内再現



日本住宅公団 蓮根団地 2DK 再現間取り

来館者の見学スタイルとしては、敷地内誘導、再現住戸等の解説及び展示物の見張りのため来館者の自由見学は原則行っておらず、事前予約制のうえ案内員同行でご見学いただく形をとっています。新型コロナウイルス感染症拡大以前は年間2800名程度の来場者があり、建設・不動産業の企業の研修や大学・専門学校等の授業利用、海外からの視察等の受け入れも行ってまいりました。（平日のみ公開。常設展示のみ。企画展・特別展開催は無し。）

新型コロナウイルス感染症の拡大に従い、令和2年2月27日より臨時休館いたしました。再開にあたっては、案内員同行という見学スタイルが感染防止上懸念されることと、古い住宅の決して広くはない間取りに大人数で入室することが三密を生んでしまう恐れが高いことから、それらへの対応策を講じつつ再開のタイミングを計り、10月1日より公開を再開いたしました。具体的な感染防止対応としましては、先に再開されました公共博物館・美術館、企業博物館等の対策を参考としつつ

- ・来館者人数の限定。一日最大40名程度、団体により80名程度迄受け入れていたところ、一日5名程度、団体により10名程度迄に限定。（なお、来館者の連絡先は予約受付時に把握・記録）
 - ・入館時の検温の実施 ・マスク着用義務付け
 - ・消毒液設置、入館時の手指の消毒義務付け
 - ・受付へのアクリルボード設置
 - ・書籍・資料等の閲覧の停止、当館関連以外の資料配布中止
 - ・ガイダンス会場の定員減によるソーシャルディスタンス確保
 - ・換気設備（換気扇・網戸）の増設、サーキュレーター等設置
 - ・来館者が使用するスリッパの消毒
- 等の対策を実施しております。

その他に、感染症防止策として来館者と案内員の対面時間の縮減が効果的と考えられたため、再現住戸の説明は従前は全て案内員の口頭によっていたところ、再開後はタブレット端末使用による音声案内を併用し対面機会低減に努めました。

タブレット音声案内に用いる音声・動画コンテンツは休館期間中に案内員が自作したのですが、来館者からも概ね好評な内容であることから、来館意欲を損なわない形でのYoutube配信等活用の可能性も探っているところです。

もともと、タブレット端末利用も良い面ばかりでなく、使用の都度充電・消毒が必要であるのと、イヤホンが使い捨てとなり購入コストがかかる等のデメリットもあります。また、タブレット持ち運びと同時に手持ちのスマホ・カメラでの写真撮影が困難なことや、タブレット端末等デジタルデバイスに不慣れなお年寄りへの対応が難しいことも課題として挙げられます。

当館主催イベントは、昨年度まではワークショップを中心とした冬休み親子イベントを開催し大変好評でしたが、今年度は感染症拡大防止の観点から中止することといたしました。



中止した親子イベント・ワークショップ（昨年度の模様）

最後に、集合住宅歴史館の再現住戸も文化財的価値が認められる一方で、再現住戸を収容する施設建物の陳腐化・老朽化が進んだこと、北区赤羽台の旧公団住宅赤羽台団地スターハウス・板状住棟計4棟が団地建築としては初めて登録有形文化財となり、それらの建つ敷地一角の利活用も期待されたことから、集合住宅歴史館（歴史展示棟）を赤羽台に移転のうえ、令和5年春の開館を目途に新たにURの新情報発信施設を整備する予定です。新施設的设计等を現在進めていますが、新施設の計画・オペレーションにも反映すべく、新型コロナウイルス感染症への諸館の対応・対策について引き続き動向等を注視しているところです。

くにたち郷土文化館 コロナ禍の記録

くにたち郷土文化館 安齋 順子

新型コロナウイルスの流行

令和2(2020)年1月半ばに国内でも新型コロナウイルスの患者が発生していることが報じられ、その後、国がマスク着用や手洗いの徹底を呼びかけるようになりました。マスクや消毒液の不足が生じるようになり、くにたち郷土文化館でもそれらの入手に手を焼くことになりました。

2月21日、国から今後の感染拡大を見越したイベント等の開催のあり方について発表があり、同日には国立市でも国立市コロナウイルス感染症対策本部会議が設置され、ここでの方針を受け、郷土文化館では「ひしもち作り」や「星空ウォッチング」「歴史講座」など3月末までに開催予定であった事業を中止することになりました。

また、この時期は毎年、小学校3年生を対象とし、むかしの暮らしや道具について解説する「民具案内」を開催しており、国立の市立・私立をあわせた11校の児童が参加していました。去年は、最後の1校の「民具案内」が残っており、担任の先生と電話で相談し、学芸員が少量の民具を持って学校に出張授業を行うことも検討されていましたが、2月27日に政府から全国の小・中・校、特別支援学校の3月2日からの臨時休校の要請があり出張授業の話も立ち消えとなりました。なお、民具案内関連企画展の「むかしの暮らし展」は、会期の3月6日まで実施することとなりました。

都内の博物館では東京国立博物館が2月27日から休館。その他の博物館もこの頃から徐々に休館となる館が増えていく中で、郷土文化館は、イベント等の中止は行ったものの三多摩の博物館の中でも比較的遅くまで開館していた館のひとつだったようです。

令和2(2020)年春、国立では大正15(1926)年に開業し「赤い三角屋根」の木造駅舎として親しまれた旧国立駅舎が再築され4月4日にオープンすることになっていました。当館でも、旧国立駅舎のオープンに合わせて、春季企画展「『赤い三角屋根』誕生 - 国立大学町開拓の景色 - 」の開催を予定していました。しかし、東京都からの新型コロナウイルス感染拡大防止のため週末の外出自粛要請が出されたことを受け、旧駅舎のオープン及企画展の開催を4月6日に延期。さらに、翌7日には国からの緊急事態宣言を受け、4月8日～5月6日までの休館が決まり、その後4月27日に市の対策として市内の公共施設の閉館が6月30日まで伸びることになりました。企画展では、多くの借用資料が展示されていたこともあり、これ以上の会期延長は難しく、開催わずか2日間で終了することとなりました。来館を予定されていた方々には展示を見ていただくことが出来ず残念な思いをしました。

緊急事態宣言中の博物館

4月10日から5月末まで学芸員の在宅勤務が出勤日の半数未満可能になり、6月も少し日数が減ったものの引き続き在宅勤務は可能でした。

このような状況下で、中止となってしまった春季企画展の内

容をミニ展示として開催することとなり、担当学芸員により展示の準備が進められると共に、春季企画展の「資料紹介」の記事を8回に渡りHPに掲載しました。また、春季企画展の一部をスライドショーにより紹介した動画を3本作成し、HP等で公開するなど、博物館が閉館する中でWEB上を中心とする発信を多く試みました。

緊急事態宣言解除後

5月25日に、緊急事態宣言解除および東京都の新型コロナウイルス感染症を乗り越えるためのロードマップステップ2への移行を受けて、郷土文化館は6月1日(月)から再開しました。また、館内の施設貸出も、6月3日より使用人数などの条件を変えた上で再開しました。

6月15日(月)～8月10日(月・祝)にかけて、当館所蔵資料および国立市所蔵資料を中心としたミニ展示「国立駅開業と国立大学町の開発—『赤い三角屋根』誕生のころ—」を開催しました。館藏品等を中心に、春季企画展よりも規模を縮小し展示を実施しました。

9月5日～27日には、紙の工芸展実行委員会との共催企画展「紙の工芸展」を開催しました。展示開催前の8月から期間中にかけて、実行委員会の先生方により10回の体験教室がありました。体験教室は、感染症対策として人数を絞り、アクリルの衝立や、講師のフェイスシールド着用などの措置をとって実施。この頃になると徐々に家に籠りがちだった人々の活動が始まっているのを感じました。しかし、新型コロナに関しての意識は、人によって様々であり、一方で、まだ講座を受けたいがしばらくは館を訪れることは遠慮したいという声もありました。そこで可能な範囲で講座の様子を撮影し、編集して動画をHPにアップするなど、自宅でも学習ができるコンテンツを増やしていくことになりました。

コロナ禍の博物館活動は、様々なことが制限される一方、動画の編集など今まで使用して来なかったツールに挑戦するきっかけともなりました。これからも動画やWEBでの発信を活用しつつ、この状況が落ち着いたのちには、実際に博物館に行ってみよう、来て楽しいとより感じてもらえるように考えていかねばならないと感じています。



紙の工芸展関連イベント 子ども折り紙教室(8月)

コロナ禍における文学館の活動

町田市民文学館ことばらんど 神林 由貴子

<はじめに>

オリンピック・イヤーとなるはずの2020年は、新型コロナウイルス感染症により様相が一変しました。文学館などの博物館施設にとっては、その役割やあるべき姿を考え直す機会ともなりました。

当館では、感染拡大防止のため2020年3月2日から6月8日まで臨時休館を実施。3月には22日までを会期とした冬季企画展「三島由紀夫展—「肉体」という second language」を開催していましたが、臨時休館に伴い会期半ばで終了とし、それに伴い関連イベントも中止となりました。

2020年度は、4月21日から6月28日を会期とする春季企画展「東京クロニクル 1964-2020—オリンピックと東京をめぐる創造力の半世紀」展を含め4本の企画展や文学講演会等を計画していましたが、しかし度重なる休館延長など先行きの見えない中で計画通りに進めることは困難と判断し、大幅な事業の見直しを行うとともに、自宅を過ごす時間の多くなった人々に文学を届ける方法の模索が始まりました。

<休館中の活動>

文学の発信

・「#おうちで文学」の配信

自宅時間に文学を楽しんでもらおうと、Twitterで文学情報を届ける試みを始めました。「町田が登場する文学作品」を発信し、フォロワーの感想や情報も取り入れながら紹介しました。また、「町田ゆかり作家」の生没の日に合わせて作家情報をエピソードとともに紹介。ホームページでは、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で中止となった講座の講師による近代文学講座のYouTube動画の配信や、子ども向けには俳句ワークシートやぬりえの公開、わらべうたの動画配信を行いました。

・展覧会動画の配信

4月21日から開催予定であった春季企画展「東京クロニクル 1964-2020—オリンピックと東京をめぐる創造力の半世紀」を自宅楽しんでらおうと、展覧会の紹介動画を作成して配信しました。

資料整理

休館に伴いイベント等が中止となり、また来館者対応業務もなくなったため、この間を利用して、市民が利用できる資料を増やすことを目指し資料整理に注力しました。その結果、4件の資料群について、検索システムへの登録、ホームページでの目録公開を完了しました。

<開館後の活動>

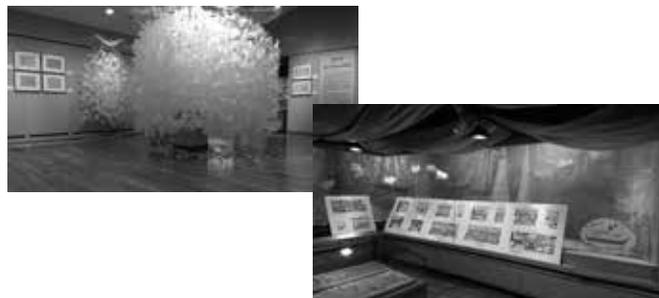
展覧会

企画展の計画を見直し、準備中であった春季展はそのまま開催、夏以降に予定していた3本の展覧会は白紙に戻して収蔵

資料を利用した企画展に変更、展示手法に工夫を凝らして実施しました。なお展覧会開催に際しては、感染症防止対策の徹底をはかるとともに職員による見廻りも行うなど来館者の安全に配慮しました。



「東京クロニクル 1964-2020—オリンピックと東京をめぐる創造力の半世紀」展（会期：6月9日～8月10日）



「20×20原稿用紙 & ニコニコ絵本原画展」
（会期：前期9月19日～12月20日／
後期2021年1月9日～3月28日）



本展では春季展に続き、来館できない方々にも展覧会を楽しんでもらえるよう動画を作成しYouTubeで公開しました。

教育普及事業

例年、乳幼児から一般を対象に年間30～40件、回数では約100回の事業を実施していましたが、2020年度は上半期の事業はすべて中止とし、10月から一般を対象とした事業を再開。連続講演会「疫病文学を読む」や収蔵資料公開記念講演会など時宜に適った内容に変更し実施しました。

<ポスト・コロナへの対応>

新型コロナウイルス感染症により、施設への集客を第一義とする従来の考え方は見直しを余儀なくされています。収蔵する資料や蓄積された知識をどのように人々に届けるか。デジタルを活用して来館しない人々といかにつながるか。地域のために何ができるか。課題は山積です。当館では、様々な分野の有識者による運営協議会を開催しています。今後は委員の方々からもご意見をいただきながら、新たな取組みや手法を試みていきたいと思えます。

羽村市郷土博物館の新型コロナウイルス感染症対応

羽村市郷土博物館 葛西 志耕

令和2年は、これまでに経験したことのない社会状況の変化によって、様々なことを考えさせられ、また実行した年になった。まだまだこの状況は続いていくと思われるものの、一度これまでの対応を振り返っておく必要があると思う。ここでは羽村市郷土博物館が実施した新型コロナウイルス感染症への対応や今後に向けての改善点をまとめてみたい。

当館が新型コロナウイルス感染症への対応を始めたのは2月の中旬ごろであり、消毒用アルコールの設置や職員向けのマスクの確保を行った。その他には特段の措置はとっていなかったものの、例年実施しているひな人形展にお越しいただいていた多くの高齢者福祉施設の方々が全く来館されず、来館者の減少が始まっていた。

その後国内の感染者が増加し、各学校への休校要請が発出された後の3月7日(土)より、当館は臨時休館となった。休館中も、職員は開館時と同様に出勤し、文化財に関する届出等の受け付けや、書籍の販売、トイレの貸し出しなどは継続して行っていたが、資料の寄贈や聞き取り調査などで市民の元へ出向くことや、外部の方々が参加する会議については延期とした。この休館措置は、その後の緊急事態宣言の発出を受け、6月1日(月)まで続くこととなるが、その間いつ開館できるかわからなかったため、例年実施している五月人形展や自然観察会を行えるのか判断がつかないままに準備を進めることになった。

今年度の五月人形展は、コロナ禍を踏まえて病除けの信仰がある鍾馭を中心に展示を企画していた。資料と解説パネルの設置まで全て完成させたが、結果として自然観察会と共に実施できずに終わった。せっかく準備をしたのに誰にも見てもらえないのは忍びないという思いと、休館中であっても少しでも博物館のサービスを提供したいという考えから、SNSを使って展示を紹介しては、という案が出た。当館はこれまで羽村市の公式ウェブサイトやメール配信サービスを中心とした情報提供を行っており、SNSの活用には慎重な姿勢だった。しかし、このころ多くの館が「おうちでミュージアム」「エア博物館」などの取組みをSNS上で行っており、そういった時流にも乗るかたちで当館のSNS利用が始まった。媒体については、すでに市として公式アカウントを持っていることからすぐに取組みを始められる利点を考慮し、Twitterを使用することとした。五月人形展の紹介については市公式アカウントから行ったが、その後当館独自のアカウントを作成し、運用している。

6月2日(火)より開館となり、企画展「羽村と多摩川―水害の記録―」についても無事、同日より開催することができた。しかし、入館上限人数を50名とし、各コーナーにも上限人数を設定、展示機器は使用停止、中庭にある国指定重要有形民俗文化財 旧下田家住宅に上がれないなどの制限付きでの開館となった。また、入館時の検温とマスク着用、連絡先の提出を求めることとなり、その他にも閲覧図書の使用停止、販売物の見本の撤去、休憩用のベンチの使用制限なども行った。

当館の来館者の中で大きな割合を占めるのが、社会科見学の

都内小学校4年生であり、玉川兄弟について学ぶために来ていただくのであるが、本来であれば説明員による館内説明や模型を使った羽村堰の解説を行っている。しかし、飛沫感染を防ぐためこれを中止し、自由見学のみ受け入れることとした。説明ができない分、解説パネルを設置したり、動画を流したりしてはいるものの、昨年度までの小学4年生と同等の学習ができていたとは言い難い。その他にも前述した自然観察会や体験学習会などの体験事業については、「三密」を避けられないという判断から今年度は全て中止となった。

現在、入館上限人数が156名に増え、展示機器も使用できるようになるなどいくつかの制限は緩和したものの、検温の実施や館内説明の中止など、ほとんどの制限が変わらず残っている。開館にあたって館内で相当の時間をかけて議論し、実施している新型コロナウイルス感染症対策であるが、他館ではどのような対策を行っているのか比較したことがこれまでなかったため、過敏になりすぎている部分もあるかもしれない。今号に掲載されている他館の対策をぜひ参考にさせていただき、感染症対策と博物館サービスの提供を両立させていきたい。

博物館サービスという点で言えば、新たに始めたTwitterによる効果は、例えば認知度向上や、来館者増などの目に見える効果はまだ薄いものの、展示が難しく外に出せなかった収蔵資料や市内に点在する文化財の紹介など、今までは扱えなかった情報の発信が容易になるだろうと考えている。また、あわせて収蔵資料データベースの公開についても現在検討しており、そこから展示説明アプリの活用も見込んでいる。当館ではこういった新規の取組みについての検討は進んでいるが、今年度実施できなかった体験事業をwithコロナの中でどのように実施するか、という改善の部分は今少し検討の余地があるように思う。

非常時こそ他館との連携を密にする必要があり、それを体現する今号は大変有意義なものだと思う。しっかりと参考にさせていただき、博物館サービスの向上に取り組みしたい。



羽村市郷土博物館
Twitter



新型コロナウイルス この1年の対応

コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館） 森 融

新型コロナウイルスによる目に見える影響は令和2年2月22日からの三連休から始まっていました。前の週の土日に比べて来館者が半数くらいになり、すでに多くの方が外出を控えている状況でした。2月29日に予定していたプラネタリウム星空コンサートを自主的に中止することとし、22日に申し込みの方へ中止の電話連絡をしました。いつものコンサートとは趣向を変えた宮沢賢治「よだかの星」朗読とコンサートだったので、218席満席を予想していましたが、申し込みは半数ほどと少なく、この先もキャンセルが出るのがうかがえました。

三連休が終わった25日に、市の施設全体の決定で、2月27日から3月15日までの講座、プラネタリウムの投影が中止になりました。これにより、以後に予約が入っていたプラネタリウムの中学校3年生の学習番組や幼児番組の投影も中止となりました。

3月5日には、これも市の決定により3月15日まで休館となり、以降、3月11日には3月22日まで、3月16日には3月31日までと、休館は延長、延長となり、最終的に、5月26日には6月30日まで休館となりました。この間、毎月の講座やプラネタリウムの投影計画を作って、市内の小学生全員へ配布するチラシを印刷するものの、結局は休館ということが、4～6月の3カ月続きました。

例年4月に入ると夏休みの工作教室等の講座の計画を立て始め、外部講師とも調整し、5月中旬までに確定させて、市内小学生全員に配付する市全体の夏休みイベントカレンダー（5月下旬原稿締切）に内容を盛り込むのですが、全く決めることができず、この先、講座を開くことができるのか？という状態でした。

4月には平成2年度中の小・中学校のプラネタリウム学習番組の見学を中止とし、毎年、館外3か所で開催している宇宙の学校（毎年6月から11月で開催）も中止としました。

学校が休校中の子ども達に向けて、家で学べるコンテンツをホームページから提供する「おうちミュージアム」（北海道博物館が主宰）に参加し、ホームページに工作や実験、天文情報、他機関の講演会などのコンテンツへのリンクなどを掲載し、現在も続いています。

6月に入ると再開館に向けて動き出し、7月1日からプラネタリウム投影のみで再開館、8月からは工作教室も開催するこ

ととなり、工作教室は科学指導員3名で対応できる範囲でスケジュールを決め、6/25のイベントカレンダーの原稿締切に間に合わせました。

再開館にあたっては日本博物館協会のガイドラインに沿って、プラネタリウムは定員が218名のところ、人と人の距離を2m近くあけるために46名定員とし、座席の背もたれに手作りで座らない旨の張り紙をつけました。投影は、平日は午前が団体1回、午後は一般1回、土日祝日は午前、午後とも一般各1回（10月から土日祝日の午後は2回）、土日祝日は1週間前からの電話予約制とし、工作教室は定員が36名のところ、6組（一組3名まで）計18名までとし、こちらも電話予約制としました。

展示物はほとんどが直接手で触れる体験型のハンズオンのためガイドラインに沿って全面中止とし、食事場所としている講座室も開放しないことにしました。

ハンズオン展示は約100年前にヨーロッパで始まったといわれています。その後、1969年に開館したサンフランシスコの科学館・エクスポラトリウムがハンズオン展示を数多く開発し、以降、日本の多くの科学館も、その展示を参考にしてきました。平成元年（1989）に開館した当館もその一つです。

100年かけて発展してきたハンズオン展示も新型コロナウイルスの前では何ともしようがないという状況です。

再開館後は、お客様には正面玄関で検温と手指消毒をお願いし、退館後に職員で、座席やロビーのベンチ、工作教室で使用した工具などを消毒するという対応をしています。

11月から土日祝のプラネタリウムの申し込みをインターネット申込とし、今年1月からは工作教室もインターネット申し込みとしました。まれにネット環境が無い方から問い合わせがありますが、特に苦情はありません。

小・中学校のプラネタリウム学習投影が中止になったので、個々に見に来てもらえるようにと、10月から土曜日に学習番組を投影しています。学習する月に合わせて小学3年生、6年生、4年生の順で数日ずつ投影し、この先中学生番組となりますが、高学年ほど参加者が少なくなっています。

新型コロナウイルスの影響はまだまだ続きます。次年度も感染対策を確実に行ったうえで来館者に喜んでいただけるよう、工夫をしていきたいと考えています。



プラネタリウム 218席を46席に背もたれに張り紙の無い席が使用可能な座席



工作室も机を離して配置

コロナ禍における古民家園

狛江市立古民家園（むいから民家園）

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当園では4月9日から5月31日まで臨時休園の対応をとり、6月2日から施設の利用を再開しました（6月1日は施設の休園日）。再開に当たっては、開園時間を前後30分短縮し、園内での喫食を禁止したほか、園内の滞在者数が20名以下になるように入園者数を制限し、園内での滞在時間を1時間以内とする制限も設けました。また、入園時にマスクの着用と手指の消毒を促し、健康状態を確認するため検温とチェックリストの記入を行うこととしました。6月16日以降は、施設の利用制限を緩和し、開園時間を通常の時間に戻すとともに入園者数と滞在時間の制限を解除しましたが、喫食の禁止と健康状態の確認は継続し、12月末現在も継続しています。



夏季の子ども向け体験教室の様子①

体験教室は屋外で実施できるものからはじめました。熱中症対策も必要で、例年以上に注意点が多くなりました。



夏季の子ども向け体験教室の様子②

屋内でも必ず距離をあけて実施しました。物の使い回しを避けるため、配布物は机上に事前準備。

古民家園で実施している教室等の各種事業については、臨時休園前から感染拡大防止のため実施の延期や中止の措置をとってきました。休園期間後もしばらくは実施を見合わせてきましたが、比較的状况が落ち着いていた時期に、事業の再開に向けて、クリアすべき課題などを確認しながら実施方法を検討していきました。①三密を避ける、②物の使い回しを避ける、③できる限り屋外で実施する（屋外で実施できるものを優先する）、以上の3点がクリアできる教室等を再開可能な事業とし、具体的な実施方法については、教室等の指導者や協力者と協議し、施すべき対策を詰めていきました。例えば、夏季に実施した子ども向けの体験教室では、先の3点に留意したほか、例年より1回の募集人数を減らして開催日を複数日設けるなど、参加者の分散を図って実施していきました。

最後に、施設の管理について、臨時休園以降、感染拡大防止のため施設の消毒を行っています。このまま木造の古民家に消毒を続けてよいものなのか、気がかりなところになります。現在のところ、大きな影響は見受けられず、施設を開放している以上、消毒は徹底すべきですが、文化財を保護していくことからすると、状態によっては消毒や施設解放のあり方を再検討する必要があります。



夏季の子ども向け体験教室の様子③

勾玉作り教室の様子。募集人数を少数にして実施回数を増やしました。

新型コロナウイルスとふるさと歴史館

東村山ふるさと歴史館 鈴木

江戸時代のコレラの流行や、1918年からのインフルエンザの大流行（スペインかぜ）の様に、我々は感染症に悩まされてきました。しかし、科学の進歩により、そのような感染症を人類は克服することができました。実際に、このような伝染病について扱うことは、保健衛生よりもむしろ、我々、博物館の企画展示の方が多かったのではないのでしょうか。

それでも、保健衛生の分野では、かねてより予防策が論じられていました。東村山市でも、対策マニュアルは作成されていました。しかし、それは、大地震等の災害が発生した時同様の事業継続計画的なものであり、博物館等の教育施設は基本休館し、その人員を避難所や保健福祉部門等の緊急性・重要性の高い分野に振り分けるものでした。

しかし、今回の新型コロナウイルス感染症は、そのような事業継続計画が思い描いていたものとは大きく違ったものでした。確かに、感染は危険で多くのかたがお亡くなりになっていますが、事業継続計画になるほどの状態ではなかったのです。よって、我々は、感染の拡大を防止しつつ、社会活動を継続するという難しいバランスをとることになったのです。

新型コロナウイルスの流行が国内でも発生し、WHOの国際的な緊急事態の発令を受けて、当館でも感染予防策をとりました。しかし、その後の感染者の増大を受け、3月2日から臨時休館に入りました。休館中は、民間事業者等からの開発に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会の対応に限って活動し、施設の修繕等を実施しておりました。

休館中の3月29日には、東村山音頭で有名な志村けんさんが、新型コロナウイルスによる肺炎でご逝去なされました。全国的なニュースとなり、東村山駅東口の志村けんの木に多くの献花が寄せられ、通行や安全性の問題から離れた所に献花台を設置しましたが、あまりの多さから、新型コロナウイルス蔓延防止のために閉めざるえない状態でした。

また休館のため、4月25日から5月17日を会期に予定しておりましたが、春の企画展「端午の節供」は、季節に係る内容なので延期は考えられず、中止を余儀なくされました。

しかし、このコロナの年禍であっても、当市の文化財が国の重要文化財の指定を受けるという吉事がありました。下宅部遺跡は狭山丘陵の東端（東村山市多摩湖町4丁目3番地）に位置し、都営住宅の建て替えにともなう調査で発見された縄文時代から古代・中世にかけての低湿地遺跡です。特に縄文時代後期（約3500年前）の水辺の作業の痕跡が遺されていました。縄文時代の漆塗りの弓矢や杓子などの木製品、縄文時代の漆の採取の跡を示す漆の木も発見されており、それら漆工関連遺物に、土器・土製品、石器・石製品、木器・木製品を含む392点が令和2年9月30日「東京都下宅部遺跡出土品」として重要文化財に指定されました。

何とか新型コロナウイルスの流行の第一波が終了し、はれて6月3日からふるさと歴史館は再開することになりました。入

り口に手指消毒液の配備及び注意事項の掲示を行いました。また、団体での施設利用は、団体ごとに参加者名簿を2週間保存するよう依頼し、新型コロナウイルス感染症の疑いがあった場合に濃厚接触者を特定できるように依頼を行いました。貸し出す部屋は、椅子を間引きし通常の定員の半数とし、密の回避を行いました。

ボランティア活動についても、一堂に会して行うことを避け、構成員を少人数単位に区分し時間帯を分けて行いました。

展示補強装置（映像装置）は、ボタンを押して映像を選択する仕様となっていたので、不特定多数の来館者に触らせないように利用休止としました。

そのような感染予防策をおこないながら、以下の事業を実施しました。

7月4日から8月30日にかけて企画展「写真でふるかえる東村山のできごと」昭和30年代から平成にかけての急激に都市化が進む東村山をふりかえる展示を実施しました。

9月16日から9月27日には「作品展 少シ昔ノ本当ニ見タ事 一見た人 池田宗弘」を実施し、幼少期を東村山で過ごした彫刻家池田宗弘氏が絵に描いた、当時の風景の生活から、今に続く街の記憶を読み解く展示を実施しました。

10月3日から12月6日まで、「東京都下宅部遺跡出土品」重要文化財指定記念特別展 下宅部遺跡展 「縄文人の技」

あけて令和3年1月8日から3月7日まで、小学校社会科見学対応展示「むかしの暮らしと道具」展を実施しています。

現在、2度目の緊急事態宣言が出され、あらたにAIによる画像での体温感知システムを導入され、さらに対策を強化しています。「不要不急の外出を控える」ように言われていますが、はたして本当に博物館に行くことが不要不急でないのか、あらためて、感染の拡大を防止しつつ、社会活動を継続するバランスのとり方も難しさを認識させられています。ただ、これが何時まで続くのかが気になる点です。実際、このコロナ対策により、肺炎の死亡者数やインフルエンザの感染者数等が減少しています。ワクチン等で新型コロナの問題が一定の目途がたっても、今のような厳格な感染予防をした方が、社会全体の利益が大きいと判断される可能性があることです。もしかしたら、将来、博物館で、転換点として展示されるかもしれないと思っております。



下宅部遺跡出土品（一部）

青梅市郷土博物館 コロナ禍での令和2年度

青梅市郷土博物館 小山 政史

青梅市郷土博物館の令和2年度の展覧会日程は、当初以下のようでした。

- ・企画展「青梅宿の才人～山田早苗と小林天淵～」会期：令和2年4月18日(土)～6月28日(日)
- ・企画展「中世青梅の城館跡～静かに眠る柚保の城～」会期：7月11日(土)～10月4日(日)
- ・収蔵品展「郷土工芸技術展～道具を通して見つめるものづくり～」会期：10月17日(土)～令和3年1月17日(日)
- ・「新収蔵品展2020」会期：1月30日(土)～3月31日(水)

「新収蔵品展2020」を除く3つの展覧会では、関連講座として講演会やフィールドワークなども予定していました。

しかし、2月下旬頃から新型コロナウイルスの感染が拡大しているというニュースが入ってくると、にわかに雲行きが怪しくなってきました。近隣の美術館・博物館が少しずつ臨時休館を実施し、青梅市でも「観梅市民まつり」などのイベントが中止となりました。なんとか4月上旬までは開館を続けていましたが、最初の緊急事態宣言が発出されると、当館でも4月7日から臨時休館を余儀なくされることとなりました。

当初は、5月7日までの臨時休館でしたが、情勢の悪化によって5月31日まで延長され、再開されたのは6月2日になってからでした。これに伴い、展覧会の日程も大幅に変更することとなり、以下のようになりました。

- ・企画展「青梅宿の才人～山田早苗と小林天淵～」会期：令和2年6月2日(火)～8月2日(日)
- ・企画展「中世青梅の城館跡～静かに眠る柚保の城～」会期：8月15日(土)～11月29日(日)
- ・収蔵品展「郷土工芸技術展～道具を通して見つめるものづくり～」会期：12月12日(土)～令和3年4月4日(日)

新収蔵品展については、令和3年度に延期し、2年分の新収蔵品を展示することとなりました。

再開にあたっては、他館の状況や、日博協の新型コロナウイルス感染拡大防止のためのガイドラインなどを参考にして、以下のような取り組みを行い、現在に至っています。

- ・来館者のマスク着用の徹底と、入口でのアルコール消毒液による手指の消毒。
- ・観覧時には一定の距離を保つとともに、会話は極力控える。
- ・体調に不安のある方の来館を遠慮していただく。
- ・団体見学の受け入れの休止。
- ・館内のソファなどの使用を休止。
- ・講演会やフィールドワーク、展示室での解説などの休止。

このような対策を主に講じ、開館していきました。特に影響

が大きかったのは、団体見学の受け入れの休止で、毎年市内の小学3年生が授業の一環として見学しているものが、今年度は一校も来館できないという事態になりました。また、イベントも全面的に休止となり、展覧会の内容をより深く理解してもらう機会が制限されてしまったのです。

ハンズオン展示についても、例えば「郷土工芸技術展」では、郷土の工芸技術に関するさまざまな職人の道具や製品を展示するという内容のため、実際にそれらを触って体験するというコーナーの設置が望ましかったのですが、断念せざるをえませんでした。

このようなコロナ禍での令和2年度でしたが、大きなトピックとして特筆すべきは、企画展「中世青梅の城館跡～静かに眠る柚保の城～」でのアンケート企画です。

これは、青梅の街おこしグループ「武州青梅三田弾正手作り甲冑隊」の協力を得て、中世の青梅を支配していた三田氏の勝沼城跡の「御城印」を制作し、アンケートにお答えいただいた来館者にお礼として配布するというものでした。開始と同時にネットを中心に話題となり、新聞にも取り上げられ、多摩地域はもとより愛知や大阪など、全国各地から来館者が訪れ、800枚以上の御城印が配布されました。この企画をきっかけに、当館に初めて来館したという方も多数いると思われます。入館者総数も5,700人を超え、大変盛況な展覧会となりました。

とはいえ、コロナ禍で大勢の方にアンケートを記入していただくということには、細心の注意を払う必要がありました。使用済みの鉛筆は回収し、毎回アルコール消毒液でこまめに消毒を行うなど、衛生面では特に気を使いました。また、展示室に人が大勢集まり、一時的に三密の状態ができるなど、懸念される場面もありました。無事に展覧会を終えることができたのがなによりだと考えております。

令和2年度の当館の状況は、おおよそ以上のものでありました。この原稿を書いている現在もなお、コロナ禍は続いています。それまで博物館として当たり前に行っていたことができないということに、戸惑いを感じることも多数あります。多くの人に展覧会を観てもらいたい、しかし、三密の状態をつくることはできない、というジレンマに悩まされています。そのような中で、手探りではありますが、博物館としてできることを模索しながら、今後も事業を展開していきたいと考えています。



大きな話題となった「勝沼城跡御城印」

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線 分倍河原駅から郷土の森総合体育館行バス「郷土の森正門前」下車すぐ
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤の台団地行きバス「市立博物館前」下車徒歩7分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩15分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	瑞穂町大字 駒形富士山316-5	042-568-0634	JR八高梅線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立 歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から新道福島行きまたは富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩5分／JR青梅線「西立川駅」下車徒歩15分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から藤倉行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口もしくは「東小金井駅」からココバス北東部循環③「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス「イオンモール」行きで「八幡神社」、または都営バス「青梅車庫」行で「八幡神社前」下車徒歩2分
パルテノン多摩	多摩市鶴牧1-24-1-501	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩10分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩10分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
東京都立埋蔵文化財 調査センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5～7分
集合住宅歴史館(独立行政法人 都市再生機構)	八王子市石川町 2683-3	042-644-3751	JR八高線「北八王子駅」下車徒歩10分、JR線「八王子駅」・京王線「京王王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」・「田無駅」北口からはなバス第4北ルート「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
コニカミルタ サイエンスドーム (八王子市子ども科学館)	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩2分
桑都日本遺産センター 八王子 博物館(展示場)※	八王子市子安町4-7-1 (サザンスカイトワー八王子3F)	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」南口から駅直結／京王線「京王八王子駅」から徒歩8分
八王子市郷土資料館(展示場を 除く)※	八王子市上野町33		JR中央線「八王子駅」南口より京王バス7番乗り場「法政大」行「東京家政学院」行乗車「市民体育館」下車徒歩約5分
東京都立大学91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」下車徒歩約5分
狛江市立古民家園 (むいから民家園)	狛江市元泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」より徒歩10分/小田急線「狛江駅」北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車
武蔵野市立 武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市境5-15-5	0422-53-1811	JR中央線・西武多摩川線 武蔵境駅から徒歩12分/ムーバス 境西循環0番「武蔵境駅北口」から4番「武蔵野ふるさと歴史館」下車
帝京大学総合博物館	八王子市大塚359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学駅」下車徒歩15分/京王線「聖蹟桜ヶ丘駅」・「高幡不動駅」・「多摩センター駅」より京王バス「帝京大学構内」行きに乗車し終点にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅二郎記念館	三鷹市大沢3-10-2	0422-33-3340	中央線三鷹駅南口または武蔵境駅南口より小田急バス国際基督教大学行にて終点下車/武蔵境駅からタクシー10分
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田4-16-17	042-739-3420	小田急線町田駅東口から徒歩12分、JR町田駅ターミナル口から徒歩8分
日本獣医生命科学大学付属 ワイルドライフ・ミュージアム	武蔵野市境南町1-7-1	0422-31-4151	JR中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」南口より徒歩2分

※現八王子市郷土資料館の展示場は令和3年3月末日で閉館し、4月下旬に「桑都日本遺産センター 八王子博物館」として再オープンします。展示場機能はサザンスカイトワー八王子3Fに、展示以外の調査研究等の事務室機能は八王子市教育センター内に移転します。詳しくはHPをご覧ください。また、その他の館においてもご利用の際には最新の情報をHPにてご確認ください。

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No. 42

発行日 2021年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2020年度会長 調布市郷土博物館
調布市小島町3-26-2 042-481-7656

編集委員	東大和市立郷土博物館	池田 昌司
	パルテノン多摩	仙仁 径
	東京農工大学科学博物館	齊藤 有里加
	くにたち郷土文化館	安齋 順子